拓殖大学大学院　言語教育研究科
言語教育学専攻　博士論文

視点による次元形容詞の使い分け

―「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」に関する考察―

2013 年

指導教授：遠藤　裕子　教授

0D502 劉笑倩

序章 5
0.1　研究の目的、対象及び方法 5
0.2　本論文の構成 6
第一章　次元形容詞および視点に関する先行研究 8
1.1　次元形容詞についての意味研究 8
1.1.1　『分類語彙表』(1964，2004)における形容詞の分類 8
1.1.2　国広(1968，1982)による次元形容詞の意義素と体系 10
1.1.3　久島(1993，2001)による《物》と《場所》に基づく空間的形容詞の研究 . 15
1.1.4　次元形容詞に関するその他の先行研究 21
1.1.4.1　服部(1968)：日英語における次元形容詞の対照 21
1.1.4.2　西尾(1972)：『形容詞の意味・用法に関する記述的研究』 22
1.1.4.3　小出(2000)：次元形容詞の空間的用法と非空間的用法 24
1.1.4.4　国語辞典における次元形容詞の意味記述 25
1.2　視点と捉え方に関わる認知言語学の研究 30
1.2.1　視点、パースペクティヴについて 30
1.2.2　スキャニングと主体の役割について 33
第二章　用例の収集および分析方法 37
2.1　分析対象：3 組 4 対の次元形容詞と名詞 37
2.2　用例の収集 40
2.3　用例の集計と分析方法 42
第三章　視点による次元形容詞の使い分け 44
3.1　「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使い分け 45
3.1.1　先行研究における「大きい・小さい」と「広い・狭い」 45

3.1.2　「大きい・小さい」と「広い・狭い」の分析における視点 47

3.1.3　「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使用状況と使い分け 47

3.1.3.1　「大きい・小さい」「広い・狭い」における集計結果 48

3.1.3.2　「大きい・小さい」「広い・狭い」における用例の個別分析 50

3.1.4　考察 67

3.1.4.1　実際的把握と概念的把握 67

3.1.4.2. まとめ 67

3.2　「大きい・小さい」と「高い・低い」の使い分け 73

3.2.1　先行研究における「大きい・小さい」と「高い・低い」 73

3.2.2　「大きい・小さい」と「高い・低い」における視点 74

3.2.3　「大きい・小さい」と「高い・低い」の使用状況と使い分け 75

3.2.3.1　「大きい・小さい」「高い・低い」における集計結果 75

3.2.3.2　「大きい・小さい」「高い・低い」における用例の個別分析 77

3.2.4　「形容詞 - 名詞」と「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」について 92

3.2.5　考察 94

3.3　「広い・狭い」と「太い・細い」の使い分け 99

3.3.1　先行研究における「広い・狭い」と「太い・細い」 99

3.3.2　「広い・狭い」と「太い・細い」における視点 100

3.3.3　主体性、およびトラジェクターとランドマーク 101

3.3.4　「広い・狭い」と「太い・細い」の使用状況と使い分け 103

3.3.4.1　「広い・狭い」と「太い・細い」における集計結果 103

3.3.4.2　「広い・狭い」「太い・細い」における用例の個別分析 105

3.3.5　「太い～」と「細い～」の使用における非対称性 117

3.3.6　考察 118

第四章　結論 123
第五章　おわりに 128
5.1　まとめ 128
5.2　今後の課題 131
文献目録 132
謝辞 136

序章

0.1　研究の目的、対象及び方法

本研究は、空間的な量を表す基本的な形容詞のうち、2 対の形容詞を同一の対象に使用する場合について論じたものである。

空間的な量を表す日本語の語や表現は数多く存在し、『分類語彙表』(1964､2004)では「量」の分類の中に「大きい、広い、長い」などさまざまな語、句、造語成分が挙げられている。1960 年代以降の諸研究で、空間的な量を表すもっとも基本的な形容詞として 7 対から 9 対が選ばれ、詳細な分析がなされてきた。空間の量を測るには、1 次元・2 次元・3 次元という軸で見る方法があり、国広(1969)は、主にこの次元(dimension)に注目して、8 対の次元形容詞の体系化を試みている。また、久島(1993)は、《物》と《場所》という新たな概念を提案し、さまざまな観点から分析・検証を行って形容詞の体系を説明した。

これまでの先行研究で、空間的な量を表す形容詞の関係や対象はおおよそ明らかにされたと言えよう。しかし、ある対象について視点の違いによる次元形容詞の使い分けとった日本語学習者の観点からは、十分説明されているとは言いがたい。たとえば、「道」においては、「狭い道」と「細い道」という意味の類似する 2 つの表現が実際の使用例として見られる。そこで、このような 2 対の表現の違いと使い分けという角度から、本研究を行うこととした。

本研究では、「大きい・小さい」と「広い・狭い」、「大きい・小さい」と「高い・低い」、「広い・狭い」と「太い・細い」の 3 組の形容詞が、「湖、建物、部屋、窓、皿、紙、解答欄、山、木、車、人、テーブル、道、橋、川、谷」という合わせて 16 の名詞を修飾する場合を取り上げる。そして、2 対の形容詞を同一の対象に使用する場合について、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を主な言語資料として、実際の用例を通して分析を行う。分析に際しては、視点と捉え方に関する先行研究を踏まえて新たに定義した「視点」の概念を用い、使い分けの様相を明らかにしていく。用例の前後の文脈から「視点」による詳細な分析が可能になり、理論面のみならず具体性のある結果を示せたと考える。

0.2　本論文の構成

論文の構成は、以下の通りである。

第一章では、次元形容詞に関する先行研究、及び「視点」を中心とした本研究に関連する認知言語学の先行研究について述べる。

まず、基本的な次元形容詞にはどのような語があるか、それらの語の意義素はどのようなものか、次元形容詞にはどのような体系が存在するか、などについて先行研究をまとめ検討する。また、対照研究や多義研究についても取り上げる。次に、「視点」に関する諸研究を検討し、認知言語学の研究、特に、視点現象、パースペクティヴ、主体の役割、スキャニングなどについてまとめる。

第二章では、用例の収集および分析方法について述べる。

考察対象である 4 対の形容詞と 16 の名詞についてその背景を述べ、言語資料として使用する現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)及び検索サイト「Yahoo！」について概説する。また、集計・分析する際の具体的方法について述べる。

第三章は、3 つの節から成る。3.1 は、「大きい・小さい」と「広い・狭い」、3.2 は、「大きい・小さい」と「高い・低い」、3.3 は、「広い・狭い」と「太い・細い」である。これらの組における、視点の違いによる次元形容詞の使い分けを分析する。

各節において、まず、先行研究における 2 対の形容詞について再検討し、分析の基盤となる「視点」について述べる。次に、BCCWJ のデータ収集結果から全体の傾向を見る。名詞群の特徴の異同の整理をした上で、個別の用例の詳細な分析を行い、最後に、分析のまとめを提示して、視点との関連から考察を述べる。また、実例から見られる運用上の特徴についても取り上げる。

第四章では、結論をまとめる。

「視点」が次元形容詞の使い分けとどのような関連性があるかをまとめ、実際的把握と概念的把握の両方から結論を図式で示す。

第五章では、論文のまとめと、今後の課題について述べる。

第一章　次元形容詞および視点に関する先行研究

1.1　次元形容詞についての意味研究

本節では、空間的な量を表す形容詞に関する研究をまとめ、その内容を検討する。

日本語の次元形容詞がどのような量を表しているかについて述べた研究として、国広(1969、1982)、西尾(1972)、森田(1989)、久島(1993、2001)、小出(2000)などが挙げられる。その中で、西尾、森田、小出は、形容詞の意味を個別に分析しているのに対して、国広、久島は形容詞の意味を分析した上で、それらの語の間にどのような関係があるかを体系化している。国広は各次元形容詞を反義語との 1 対ごとに取り上げて、まず「ヴェクトル」の有無に基づいて 2 種類に分け、その上でヴェクトルを含まない次元形容詞を体系化している。一方、久島は、被修飾語が形を持つか方向を持つかなどによって、物の量を表す形容詞と場所の量を表す形容詞に分けられると主張している。この他、服部(1968)は、英語と日本語の次元形容詞の意味を比較している。

1.1.1　『分類語彙表』(1964，2004)における形容詞の分類

先行研究を年代順に見ていくと、まず、『分類語彙表』が挙げられる。これは、「約三万二千六百の語句」を、音や表記ではなく意味の観点から整理しまとめた現代語としては最初の辞典である。

「まえがき」によると、『分類語彙表』(1964)とは次のようなものである。(下線部は筆者による。)

> 一般に一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表し得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配したものである。すなわち、その分類の各項には、同義の単語が集められることになるので、これを同義語類義語または<u>同義語類義語目録</u>とよぶ

こともできよう。

国立国語研究所(1964：1)

さらに、『分類語彙表』(1964)の同義類義の単語の目録について、4つの役割を挙げており、「主要な関心事」である第四番目として次のように述べている。

> 基本語彙設定のための基礎データとしての役割である。(中略)一国語の基本語彙は、生活上のまたは意味上の各分野から、最も適切な単語を選ぶことによって定められなければならない。そのためには、表現されるべき世界、意味の全分野が、偏りなく余すところなく見渡されなければならない。(中略)その各項に収める語句の重みが、その必要性や、はたらきや、語感など、また実際の使用率や使用範囲などの観点から、互いに比較商量されることになる。
>
> 国立国語研究所(1964：1-2)

『分類語彙表－増補改訂版』(2004)は初版(1964)をもとに作った増補改訂版である。初版の収録語数は約3万2千語であったが、増補改訂版では延べ約9万6千語に達している。増補の内容は、①複合語や新語を付け加え、②サ変動詞については一字漢語(例：愛する、信ずる)だけでなく、2字以上の漢語も採用し(例：愛好する、合理化する)、③辞典の見出し語と違う単位である慣用句を増補し、④多義語については、同じ単語を意味に応じて何箇所にも出したことなどである。

分類項目の修正も行われた。1.「体の類」(名詞)2.「用の類」(動詞)3.「相の類」(形容詞等)のほかに、4.「その他の類」(接続詞・感動詞等)を付け加えた。また、名詞の分類と動詞の分類とが対応するようにしたため、小項目については、若干変更した場合がある。さらに、使いやすさのため、「中項目」と「段落番号」を設置している。

『分類語彙表』(1964)では、空間の量を表す形容詞群は、「3.相の類」「3.1抽象的関係」「3.19 量」の「3.1920[1]　長い・広い」及び「3.1921　　厚い・太い・大きい」に分類され、前者には他に「高い、深い、遠い」など、後者には他に「細い」などの語が列

[1] 『分類語彙表』(1964) では、分類番号の四桁目は、小字を用いている。

挙されている。それぞれの対語も含まれている。

一方、『分類語彙表―増補改訂版』(2004)では、空間の量を表す形容詞群は、「3.1911 長短・高低・深浅・厚薄・遠近」及び「3.1912　広狭・大小」に分類されている。

1964 年版と 2004 年版における次元形容詞の分類は、次の表 1-1 のようにまとめられる。「広い・狭い」と「厚い・薄い」の分類区分が変更されているが、特に説明はされておらず、この資料が相互の関連や体系性よりも類義語の列挙という特徴が大きいことが分かる。(下線は、初版から改訂版への変更箇所で、筆者が付した。)

表 1-1『分類語彙表』(1964)(2004)における空間の量を表す形容詞群の分類

『分類語彙表』(1964)	『分類語彙表－増補改訂版』(2004)
3.1920　長い・広い 長い ・短い・高い・低い・深い・浅い・遠い・近い・広い・狭い、(他 70 語)	3.1911　長短・高低・深浅・厚薄・遠近 長い・短い・高い・低い・深い・浅い・厚い・薄い・遠い・近い、(他 69 語)
3.1921　厚い・太い・大きい 厚い・薄い・太い・細い・大きい・小さい、(他 76 語)	3.1912　広狭・大小 広い・狭い・大きい・小さい・太い・細い、(他 131 語)

1.1.2　国広(1968, 1982)による次元形容詞の意義素と体系

国広(1968)(1982)は、『分類語彙表』(1964)の「3.1920　長い・広い」と「3.1921　厚い・太い・大きい」の中から基本的な次元形容詞 8 対を取り上げ、それらの意義素を分析し体系化した。

> この中から、反対語の対をなす基本的なものを選び出し、順に並べてみると次のようになる：ナガイ⇔ミジカイ，タカイ⇔ヒクイ，フカイ⇔アサイ，トオイ⇔チカイ，ヒロイ⇔セマイ；アツイ⇔ウスイ，フトイ⇔ホソイ，オオキイ⇔チイサイ
>
> 国広(1968：13)

国広(1968)では、基本語彙の体系性と意義素について次のように述べている。「一般的な手順として、単語は語彙体系に組み立てられる前に、その意義素分析が一応終っていなければならない。一方、語彙体系に組み立てられることにより、逆に意義素分析に役に立つ手がかりを得る可能性があることは、音声研究において音韻体系の分析が逆に音声学的観察を深めることがあるのと同様である」(1968：13)。また、「意義素は単語の意味と定義される。この定義の含意は『単語』をいろいろな角度から眺めることにより、徐々にほぐれてくる。」(1982：39)と述べている。

国広(1968)(1982)[2]では、8 対の次元形容詞について、①その次元形容詞はどのようなものに対して使われるか、②その次元形容詞の意義素は何か、③次元形容詞の間にどのような関連がありどのような体系をなしているか、の 3 点について述べている。

まず、8 対の次元形容詞と共に用いられる名詞について、本稿で取り上げる 4 対については次のように述べている(pp. 157-167)。

「タカイ(ヒクイ)」については、「山・木・建物・天井・塔・背(タケ)・机・椅子・雲」を挙げており、連用形で副詞的にも用いられるとしている。また、「タカイ窓」には、ふた通りの意味があると述べている。

「ヒロイ(セマイ)」については、「国・部屋・庭・道・川・幅・肩・ヒタイ・机・窓・余白・面積」などに用いられるとしている。

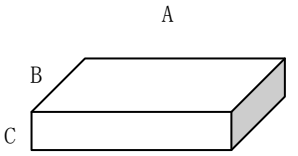
「フトイ(ホソイ)」については、「棒・針・糸・綱・指・腕・首・筒・管・幹・角(かく)材・線」などに用いられるとしている。

「オオキイ(チイサイ)」については、他の形容詞より広範囲の形の物に用いることができるのが特徴であると述べた上で、「頭・西瓜・ボール・かご」などの球形(に近いもの)については「オオキイ(チイサイ)」しか用いることができないとしている。また、「背ガタカイ(ヒクイ)人」も「フトッタ(ヤセタ)人」も共「『オオキイ(チイサイ)人』と言い換えることができると指摘している。

次に、国広の 1968 年と 1982 年の両方の意義素を 1 つの表(表 1-2)にまとめた。

[2]国広(1982)では、八対の次元形容詞の意義素について再検討している。

表 1-2　国広(1968)(1982)における次元形容詞の意義素

次元形容詞	意義素(1968)	意義素(1982)
長い・短い	線的な広がりが標準値より大きい(小さい)	線的な広がりが標準値[3]より大きい(小さい)
高い・低い	水平面を基準とする垂直の隔たりに関して、ある基準値から上向き(下向き)に隔たっている。	水平面を基準とし、それと注意の焦点との垂直方向の距りが標準値よりも大きい(小さい)
深い・浅い	基準面から物の内部に向かってはいりこんで行く隔たりが標準値より大きい(小さい)	基準面から物の内部へはいり込んで行く距離が標準値より大きい(小さい)
厚い・薄い	平面に対して比較的わずかな三次元的広がりを持つ物体について、その三次元的広がりが標準値より大きい(小さい)	 (Aは「長サ、Bは「幅」、Cは「厚サ」の次元が振り当てられる。つまり「アツイ(ウスイ)」はCの次元に用いられる。) ‘A>B>C’という長さの関係にある立方体において、ほかに限定的な条件がないとき、Cの値が標準値より大きい(小さい)
太い・細い	多少とも円形の断面を持ち、中心線に沿ってのびる立体のさしわたしが	多少とも円形の断面を持ち、中心線が通っているように見える立体物の直径

[3] 国広(1968) によると、この標準値は絶対的なものではなく、対象によって相対的に異なり、比較表現に用いられる場合は比較の基準になるものが標準値となる。また、国広(1968) は標準値について服部(1968) の考え方を取り入れて検討を加えた。服部(1968) は絶対的標準値のあることを示した。つまり、標準値の概念には二つあり、一つは人間も含めた動物の絶対的標準値であり、もう一つは種族だけの範囲で検討した標準値である。

	基準値より大きい(小さい)	が標準値より大きい(小さい)ただし長さは直径より大きい
遠い・近い	2つの地点の間の長さが、片方の地点を基準として方向性をもって眺めた場合、相関的に標準値よりも大きい(小さい)	ふたつの地点の間の長さが、片方の地点を基準として方向性をもって眺めた場合、相関的に標準値より大きい(小さい)
広い・狭い	板状をなしていない物の二次元的(＝平面的)広がりが標準値より大きい(小さい)	厚さを考慮に入れないで見るときの物の面積が大きい(小さい)[4]
大きい・小さい	形のある物を全体として見たときの空間占有量が大きい(小さい)	形のある物を全体として捕えたときの空間占有量が大きい(小さい)

国広は次元形容詞の体系について、まず「大きい⇔小さい」が他の次元形容詞と抽象度を異にしている点で区別されるとした。「高い⇔低い、深い⇔浅い、遠い⇔近い」も体系化から除外した。その理由は、これら3対の形容詞がヴェクトル(ある基点からの一方向性)を含んでいる点で他の語と異なり、「高い⇔低い」と「太い⇔細い」、「深い⇔浅い」と「遠い⇔近い」、「遠い⇔近い」と「高い⇔低い」のそれぞれの間には相関的な関係が認められないからであると述べている。

残る「長い⇔短い」、「厚い⇔薄い」「広い⇔狭い」「太い⇔細い」の4対はヴェクトルを含まないという共通点があるほか、次のような関係が認められるとした。

①「長い⇔短い」が言及する線を、その線とは異なった方向に移動させると、その「軌跡」として平面ができる。この平面に言及するのが、「広い⇔狭い」である。

②「長い⇔短い」が言及する線を中心として周囲に広がりを付ける(＝肉付けする)と棒状のものができる。この棒状のものに言及するのが「太い⇔細い」である。

[4] 「広い・狭い」の意義素の記述は、1984年印刷のものから引用した。これは1982年2月印刷の記述と一部異なる。

③「太い⇔細い」が言及する棒状のものをその中心線とは異なった方向に移動させると、その「軌跡」として板状のものができる。これに言及するのが「厚い⇔薄い」である。

④「広い⇔狭い」が言及する平面と直角の方向に広がりを付ける(＝肉付けをする)と板状のものができ、それに言及するのが「厚い⇔薄い」である。

国広(1968：20)[5]

さらに、国広は以上の 4 対の形容詞は互いに関連し合っているので、正六面体(図 1 - 1)に組み立てることが出来るとした。別扱いした「大きい・小さい」は抽象度が高いため、他の形容詞が点で表されているのに対して上下の面で表されている。

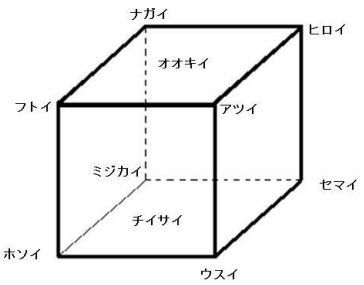


図 1-1

国広(1968)と国広(1982)を対照すると、「高い・低い」「厚い・薄い」「広い・狭い」の意義素の記述に多少違いが見られるが(表 1-2 参照)、内容的には同じだと考えられる。次元形容詞の体系について述べている内容もほぼ一致する。

国広は、基本的な 8 対の次元形容詞を研究対象として定め、共に用いられる名詞を数多く挙げて検討し、各対の意義素を記述した点で、その後の研究に大きな影響を与えている。また、ヴェクトルという概念も新しいもので、体系化が一歩前進したと言える。さらに、「線」を移動させることによって得られた軌跡が「平面」であるなど、各種の操作で「線」、「棒状のもの」、「板」を関連づけ、「長い・短い」「広い・狭い」「太い・細い」「厚い・薄い」の 4 対の語の相互関係を体系付けた点は意義深い。ただ、久島(1993)も述べているように、操作の記述自体はやや矛盾を含んでいる。

国広(1982)は、基本的に、意義素と語彙構造について内省で分析した研究であり、具体的な使用例に基づく検証は行われていない。このため意義素は、1 対に 1 つ記述され

[5] この関連付けは、1982 もほぼ同じである。

ており、例えば「広い」と「狭い」はその量的な大小以外の意味特徴はすべて同じであるという前提で記述されている。

1.1.3　久島(1993, 2001)による《物》と《場所》に基づく空間的形容詞の研究

久島は、久島(1993)に始まる一連の研究の中で、量を表す日本語の形容詞の意味体系について考察している[6]。そして、量を表す語彙は、単純に次元の違いに基づいた意味を持つのではないとし、まず言及する対象が《物》か《場所》かという区別をすると主張した。そして、どのような形か、あるいはどのような方向に伸びが広がっているかという基準によって、7 対の形容詞を使用すると述べている。

まず、久島(2001)は、国広(1982)の次元形容詞の体系化について次の 3 点を指摘している。

① 《肉付け》によって関連づけられた語は、対応が食い違っている。

久島は次の 2 点を挙げている。「長い」線が言及する線を中心とした肉付けによって必ず「太い」棒が、「短い」線が言及する線を中心とした肉付けによって必ず「細い」棒が得られるわけではない。また「広い」面が言及する平面と直角の方向の肉付けによって必ず「厚い」板が、「狭い」面が言及する平面と直角の方向の肉付けによって必ず「薄い」板が得られるわけではない。

② 《肉づけ》という表現が何箇所に使われているが、それぞれの語の導き出せる過程によって異なった意味操作が行われている。久島は次のように説明している。

「『長さ』に《肉付け》をして『太さ』を導くという操作によって、1 次元の線から 3 次元の棒ができるが、その時、2 次元の量を加えている。一方、『広さ』に《肉付け》をして『厚さ』を導くという操作によって、2 次元の面から 3 次元の板ができるが、この時は 1 次元だけの追加であって、同じ《肉付け》といっても、異なった意味操作となっているであろう。」(久島 2001：10)

③ 「長さ」と「太さ」を棒によって関連付けることは可能であるが、「広さ」と「厚さ」

6　久島(1993)と久島(2001)の第 1 章(7-58)、および久島(1995)と久島(2001)の第 2 章(59-90)とは対応する論文であるが、異なる点も見られる。

を板によって関連付けることは不可能である。その理由は「広さ」と「厚さ」は互いに違う種類の量だからである。

国広は、「大きい」「広い」「長い」「厚い」「太い」及びそれらの反義語を「肉付け」、「移動」などによって体系化したが、久島は、以上の理由からこれらの語は一緒にされるべきものではないとしている。その上で、久島は「広い」「高い」「深い」「遠い」およびそれらの対義語は「場所」の量を示すために用いられるもので、「大きい」「長い」「太い」「厚い」およびそれらの対義語は「物」に関して用いられると主張している。以下、「物」と「場所」に関する久島の説を概観する。

久島(1993)では、意味の似た語である「広さ」と「大きさ」を比較検討する論述で、対象が《物》[7]か《場所》かという対立性をはじめて取りあげた。さらに「大きい･小さい」は《物》について言い、「広い･狭い」は《場所》について言うとし、2 対の形容詞を 2 系列に分けて詳細に検討している。《物》と《場所》は、次のように定義されている。

> 《物》とは、全体のまとまりを持ち、立体的な形を成しているもの。
> 《場所》とは、(1)周囲の自然と一体で、独立していないもの。人や物が存在するための空間となる。(2)周囲から独立しているが、人や物の存在空間となるもの。(前半の《独立》という性質は無視され、後半の《機能》に重点が置かれている。)
>
> 久島(2001：14)

そして、「広さ」としての《場所》に加え、「高さ」としての《場所》、「深さ」としての《場所》の性質を検討した上で、それらの共通性を抽出し、意味記述用語としての《場所》を次のように定義している。これが、久島の主張する《場所》の基本的な意味である。

> (1)周囲の自然と一体で、独立していないもの。人や物が存在するための空間を持つ。

[7] 久島(2001)は、「」で示したものを語彙、《》で示したものを意味記述用語としている。

(2)周囲から独立していてまとまりがあるが、人や物が存在するための空間を持つもの(後半の《存在するための空間》)に重点がある)。

久島(2001:17)

久島は《場所》の意味についてさらに考察をすすめ、「本体の一部としての《場所》」と「位置としての《場所》」の二点を、それぞれ《準場所》、《地点》と呼んで補足した。

「《準場所》と言うべき鼻、傷、額の類である。これらも『高い・低い』、『深い・浅い』、『広い・狭い』と言えるのである。これらは地表面の一部ではないが、地面に当たる頭部や体があって、その一部を占めているという性質を持つ。それだけが頭部等の本体から分離することはなく、移動も不可能であるので、《場所》的である。」

「《地点》とは「『山が高い』『穴が深い』のように《場所》を量的に捉えるのとは違って、位置的に点として捉える用法である。つまり、雲・鉱脈等を、『高い・低い』『深い・浅い』というものである。これらは基準面からの距離(隔たりの程度)を表すので、《場所》でなく《地点》という名称を使うことにする。」

久島(2001:17-18)

なお、久島(2001)では、「物」「これ・それ…」「場所」「所」「ここ・そこ…」という語と結びつくかどうかという方法を使って、《物》的性質と《場所》的性質をさらに詳細に検討している。量を表す形容詞が《物》の性質を持つのか、《場所》の性質を持つのかのもっとも厳しい判定基準は、「物」「場所」という語とともに使えるかどうかということを示した。

さらに、《物》と《場所》の測り方の違いについて、久島は次のように述べている。《物》は、「典型的にはそれだけで独立しており、移動が可能」であり、その全体の形の特徴に基づいて量を測ることになる。一方、《場所》は、「典型的には周囲から独立しておらず、移動が不可能」であり、その中にいる人の視点から測ることになる。(久島　2001:22)

以上の分析によって、久島は《場所》の量形容詞として、「高い、深い、広い、遠い」及びその反義語を取り上げ、《場所》を次のようにまとめている。

(a)《場所》とは、次のものを言う。

周囲の自然と一体で、独立していないもの。人や物に存在空間を提供する機能を持つ。山、池、野原の類。

周囲から独立していてまとまりがあるが、人や物に存在空間を提供する機能をもつもの(後半の《機能》に意味の重点がある)。台、どんぶり、絨毯の類。

(b)《準場所》とは、本体表面の一部を占めているものである。鼻、傷、額の類。

(c)《地点》とは、《場所》がどこに位置するかという観点から捉えたものである。雲、鉱脈、町の類。

久島(2001:23)

さらに、《方向》《面方向》《片方向》という新たな術語を提案しており、それらは次の通りである。(p.23)

《方向》:《鉛直》を指す。

《面方向》:《水平》を指す。

《片方向》:《上方》《下方》や《前》《後ろ》等を指す。

一方、《物》の量形容詞について、久島は「大きい、長い、厚い、太い」及びその反義語を挙げている。

この他、「細長い」「平たい」「まるい(四角い)」について分析を行い、量形容詞の獲得順序についても検討を加えた上で、最後に《物》の量形容詞の体系を、久島は次の表 1-3 を用いて特徴づけている

表 1-3

辺 次元	大(L[8]～M)	中(M)	小(M～S)
1	長さ(L)	幅(M)	厚さ(S)
2	面積(M×M)		断面籍(M×M)
3	体積(M×M×M)		

久島(2001：42)

これらの量に語彙を当てはめると、表 1-4 のようになる。(反義語は省略する)

表 1-4

辺 次元	大(L～M)	中(M)	小(M～S)
1	長い(L)	太い(M)	厚い(S)
2	大きい(M×M)		太い(M×M)
3	大きい(M×M×M)		

久島(2001:42)

久島は《場所》の量を分析するとき、《場所》は、典型的には移動できない、普通の人間よりも大きい存在であり、独立しておらず、全体が捉えられるとは限らない。形に基づくのではなく、方向に基づいて量を分析的に捉えるとし、つまり《場所》の量を捉える基準としては、形よりも方向のほうが重要であると述べている。

久島(1995,2001)ではこの考え方をさらに進めて、《物》と《場所》の量の捉え方には共通性があり、その鍵となるのは、《物》と《場所》の両方に跨がった意味を持つ「縦」「横」などの語の存在であると指摘している。つまり、《場所》については、《縦》の一連の線的量、「高さ」と「深さ」があり、《物》については、《横》の一連の面的量、「長さ」「厚さ」がある。この 2 つの方向は直交する関係にある。

以上の議論から、久島(2001)は《場所》と《物》の量を表す語彙を次のように(表 1-5、

[8] 久島(2001:34) によると、《物》は 3 辺(最大辺と中間辺と最小辺)を持っている。最大性(長さ) を L、中間性を M、最小性(厚さ) を S で表すと、最大辺は L～M、中間辺は M、最小辺は M～S という大小の幅がある。

1-6)体系化した(反義語は省略する)。

表 1-5　《場所》の語彙

片方向 / 方向	上(正)	下(負)
縦(線)	高い	深い
横(面)	広い	

表 1-6　≪物≫の語彙

辺 / 方向	最大(正)	最小(負)
縦(線)	長い	厚い
横(面)	大きい《面積》	太い《断面積》

久島(2001：85)

表 1-5 にも示されるように、「広い・狭い」は《場所》について言い。「その場所の中心点が基準」となって「全ての方向に向けて測る」ことになる(2001：27)。また、《体積》を表す「大きい・小さい」について、「《体積》を表す「大きい・小さい」は語彙分化の出発となる語であり《細長さ》や《平たさ》という特徴がなく、他の語との対立性が弱い。より上位のレベルで「長い・短い」、「厚い・薄い」と対立するので、ここの体系化から外した」(2001:85)と述べている。

久島(1993、1995、2001)は、量を表す形容詞が言及する対象が《物》であるか《場所》であるかがまず問題になると考え、量を表す形容詞を《物》の量形容詞と《場所》の量形容詞に分けて詳細に分析し体系化した。この一連の研究は、個別の形容詞に配慮しながら、使い分けの原理を明らかにすることを目指したものであり、大変意義のあるまとまった研究である。

ただ、この二分法には不十分な点も残されている。

まず、実際の用例には、久島説では必ずしもうまく説明できない場合が見られる。例を挙げると、「大きい湖」と言う場合、久島の説に従うと、「湖」を《物》として捉えて

いると考えられる。久島は、《物》の特徴は、「典型的にはそれだけで独立しており、移動が可能である」と述べているが、「湖」は独立しておらず、地球の表面と一体になって、移動も不可能である。「典型的」でないのはどのような場合なのかについて、明示的に述べられていない。

また、久島が分析で挙げる例は作例であり、文脈から離れたものである。実際の用例を分析することにより、原理と実際とをより総括的に捉えることができると考える。

1.1.4　次元形容詞に関するその他の先行研究

日本語の次元形容詞がどのような量を表しているかについて述べた国広(1969、1982)、久島(1993、2001)のほかに、服部(1968)、西尾(1972)、森田(1989)、小出(2000)などがある。これらの研究は大きく 2 つに分けられる。1 つは外国語との対照研究、もう 1 つは各次元形容詞の多義研究である。

1.1.4.1 では服部(1968)の『英語基礎語彙の研究』を紹介し、1.1.4.2 では次元形容詞の多義研究について、森田(1989)などの先行研究を取り上げる。

1.1.4.1　服部(1968)：日英語における次元形容詞の対照

『英語基礎語彙の研究』は、服部が英語教育協議会(ELEC)から英語教育の基礎となる言語学の研究をするために引き受け、1968 年に刊行したものである。この中で服部は、日英語の次元形容詞について論じている。

取り上げられている次元形容詞は、日英語の対の組み合わせで 8 組、日本語形容詞については 9 対あり、次のとおりである。

大キイ、小サイ	large,big;small,little
太イ、細イ；厚イ，薄イ	thick,thin など
粗イ、細カイなど	coarse, fine など
広イ、狭イ	wide,broad;narrow
長イ、短イ	long,short

高イ、低イ	high,tall;low,short
深イ、浅イ	deep, shallow
遠イ、近イ	far,near

「意義素」という考え方を提唱した人として、服部は意義素を「単語の意義素とは、該当の一類の事物(things, events)の概念(concept)ではなく、該当の事物に共通な諸特徴のうちのあるものだけに関係するものである」(1968：8)と定義している。

そして、たとえば、「large,big;small,little」の意義素について、英語母語話者の「large, small は多少 dignified という感じがある。Intellectual に見せようと思うときには large, small を使う」という説を紹介している。また、「日本語ではオーキイヤマ、チーサイ　ヤマ　と言うが、英語では　a high mountain / a low mountain　というのがふつうだ」とし、「high, low は colorless な(すなわち neutral な)形容詞で、遠くに見える山を descriptive に表現するのに良い」と述べている。

日本語の次元形容詞に関しては、「池」を修飾する例を取り上げ、「大きい・小さい」は池全体の形を客観的に問題にしているのに対し、「広い・狭い」は池の広さを評価しており、観点が異なると述べている。そして、「大きい・小さい」は「形のあるものについて用いられる」が、「広い・狭い」は「形のつかめないものについても言える」と述べている。

1.1.4.2　西尾(1972)：『形容詞の意味・用法に関する記述的研究』

1972 年には西尾による『形容詞の意味・用法の記述的研究』が出版された。これは、国立国語研究所が 1972 年に編集した「現代語の動詞・形容詞の意味・用法の記述的研究」の形容詞の部分として出版された。西尾は「これまで、現代語の意味・用法の記述(たとえば辞書における)は、主として主観的に、思いつくものを記述するという態度でされている。このため、重要な用法で抜けているもの、あやまって一面的に規定されたものなどが少なくない」(1972：7)とし、「かなり大量の用例を資料として集め、それに基づいて意味の記述を行おうとして」(1972：7)取り組んだと述べている。

調査の資料の種類、内容、テキストは、以下のとおりである。

① 文学作品の用例：明治・大正・昭和にわたる 52 の文学作品から採集した。

② 科学説明文・論説文の用例：約 6 万枚の用例カードがある。

③ 「現代雑誌九十種」の用例：書きことば研究室が行った「現代雑誌九十種の用語用字」の調査(1971)のために作られたカードである。この雑誌資料はすべて、1956 年の 1 月号から 12 月号までのものである。資料の中で、形容詞は 1 万余りと推定される。

④ 「総合雑誌」の用例：「現代雑誌九十種」の前に、書きことば研究室が行った「総合雑誌の用語」の調査のために作られたカードである。形容詞は 5 千余りと推定される。

西尾(1972)は、文学作品など 70 余りの文献、自立語の述べ語数約 67 万(そのうち、形容詞は 1 万 5 千余り)を調査し用例収集を行った。また、用例調査の絶対量の不足などの問題を補うため、意識調査も行った。この膨大な調査を通して、文学作品などの中で実際に使われた形容詞の客観的意味およびその用法を明らかにした。当時としては大変意義のある研究であると認められる。

そのうち、次元形容詞の研究について、まず、第 1 部の中の「ものに関する属性」の「空間的量」の中で 9 対の形容詞を取り上げて紹介している。

> ものは「延長」をもつ。すなわち，空間の中に位置して，そのある部分を占めている。その占めている量の大小に関係する形容詞として，
>
> (a) おおきい――ちいさい，ひろい――せまい，ながい――みじかい，たかい――ひくい，ふかい――あさい，あらい――こまかい，ふとい――ほそい，あつい――うすい，とおい――ちかい
>
> という，対義関係をなす，一群の基本的な形容詞がある。
>
> 西尾(1972：69)

これは、服部(1968)と同じであり、国広(1968)が取り上げた 8 対の次元形容詞に、「粗い・細かい」という 1 対が加わっている。

続いて、第 1 部後半「分析例」の 84 項目には、「ふとい、ほそい、おおきい、ちいさい、ひろい、せまい、たかい、ひくい」などが含まれており、「ふとい、ほそい、おおき

い、ちいさい、ひろい、せまい」は「次元」、「たかい、ひくい」は「基準面に対する角度」「基準面に対する向き」という分類名が付されている。「太い・細い」は、「断面が円い形や四角い形をした、細長い物体の、断面の差し渡し(ないし面積)が大きいか小さいかを表す」とし、「広い・狭い」は、「2 次元のものの、2 次元の量を表すが」、「3 次元のものの、面積すなわち 2 次元の量を表すこともある」と述べている。(pp. 74-75)

また、第 2 部「個別的記述」の中で「あつい、うすい、たかい、ふかい」を個別にとりあげて、大量の用例の分析に基づき意味分析を行っている。「たかい」については、その主体になりうるものの形態にまったく制約がなく、また、位置が固定していないものは固定しているものより「たかい」と言いにくいと指摘している。

以上、次元形容詞の分類や記述に、「基準面」「角度、向き」「断面」「細長い」「差し渡しないし面積」など、それまでの研究成果を取り入れつつ平明な表現で分析をまとめているといえる。

1.1.4.3　小出(2000)：次元形容詞の空間的用法と非空間的用法

小出(2000)が取り上げた次元形容詞は「高い、深い、広い、大きい、長い、太い、厚い」の 7 語である。それらの用法を「空間的な量を表す場合」と「抽象的な対象について用いられる場合」の 2 つに分け、前者を「空間的用法」、後者を「非空間的用法」と呼んでいる。

小出は「非空間的用法についても個別の記述はされているが、その体系について十分には検討されていない。」(2000：107)と指摘した上で、「空間的な用法が、非空間的な用法に利用されていると考えたとき、どのように利用されているのかを、2 つの用法間の意味のあり方を探ることによって、検討しようというのが本稿の目的である」(2000:107)と述べている。

次元形容詞の空間的用法と非空間的用法に関する小出の説は、次のようにまとめられる。

①次元形容詞には、「空間的用法」と「非空間的用法」がある。「空間的用法」が基本的な用法である。

②「高い」「深い」「広い」の 3 語の空間的用法について、「ある地点から物を眺めるとき

の対象の様子を表現するもの」という共通点を持っている。これは非空間的用法でも部分的に維持されている。ただし、それは完全に共通しているのではなく、「広い」が価値的なものに絡むのに対して、「高い」と「深い」は価値的なものは絡まない。

③「長い」「太い」「厚い」について、それぞれの空間的な用法はきれいな全体的対応を見せず、意味領域も分化している。一方、非空間的用法は「人にとって意味のあるあり方」という性質で緊密な関係を持っている。

④「大きい」の非空間的用法については、ひと固まりの全体として捉えているもので、個別的な次元は問題にされていない。その点では空間的な用法に見られる「大きい」の性質は保存されている。しかし、「大きい」の空間的用法では「長－太－厚」系と分布の重なりが見られるが、非空間的用法にはあまり見られない。一方、「大きい」の非空間的用法では「高－深－広」系の「精神的営みに関わるもの」を言及対象とする点で大きな重なりがある。

小出(2000)は、次元形容詞の空間的用法に関して分析するだけでなく、非空間的用法についても言及している。さらに、非空間的用法及び共起対象についての分析によって、「大きい」と「長－太－厚」、「高－深－広」との用法の対応も明らかにしたことが評価される。

しかし、この研究で取り上げているのは 1 対の次元形容詞のうちの「量的に大きい方」の語だけである。ところが、実際の使用において、対となる形容詞の「量的に大きい方」[9]と「量的に小さい方」の形容詞の使い方は完全に同じとは限らない[10]。このような実際の使用における非対称性は「空間的用法」でも「非空間的用法」でも見られる。したがって、次元形容詞の意味や体系性を分析するためには、量的に大きい方と小さい方の両方を対象とする必要があると考えられる。

1.1.4.4　国語辞典における次元形容詞の意味記述

本研究の分析対象である 4 対の次元形容詞を 7 つの辞典で調べ、そのうち『日本国語

[9]「大きい・小さい」では同語反復になるが、ほかに適当な表現がないので、「大きい・小さい」を便宜的に使用する。以下同様。
[10] たとえば、「細い橋」に対する「？太い橋」、「厚い信頼」に対する「薄い信頼」などが挙げられる。

大辞典』第 2 版、『明鏡国語辞典』第 2 版、『新明解国語辞典』第 6 版の 3 つの辞典の中で、空間的な用法に関する意味記述を抜き出し、表にまとめる。用例は省略した。

この 3 つの辞典の特色としては、まず『日本国語大辞典』は日本で最大規模の国語辞典であること、『明鏡国語辞典』は語法などに詳しい説明があること、『新明解国語辞典』は意味分類が比較的大きいこと、などが挙げられる。いずれも定評のある辞典である。

以下、第三章で取り上げる順に見ていく。

表 1-7　3 つの国語辞典における「大きい・小さい」の意味記述

	『日本国語大辞典』　第 2 版	『明鏡国語辞典』第 2 版	『新明解国語辞典』第 6 版
大きい	(1)(物の形について)空間を占める容積や面積が大である。	①〔視覚的にとらえて〕物体が空間を占める量が多く、面積・体積・寸法などが大である。	㊀〔目に見える形を備えていて、互いに比較することができるものについて〕問題となるものが比較される他方を包み込んだ(とみなされる)状態になり、なおかつ余りがあると想定できる様子だ。
小さい	(1)空間を占める体積・容積・面積・身長などが小である。小形である。	①〔視覚的にとらえて〕物体が空間を占める量が少なく、面積・体積・寸法などが小である。	伸び方・広がり方・かかわり方・かさ・数・年齢などが他より少ない状態だ。

「大きい・小さい」の記述では、「視覚的、目に見える形、物の形」「空間を占める量」「容積、面積」などの表現に類似が見られる。『新明解』の「互いに比較することができるもの」という記述は、程度形容詞全般の特徴である、絶対的基準や相対的基準について述べたものと考えられる。また、『明鏡国語辞典』では、「大きい」と「小さい」の記述が対応しているのに対し、他の 2 点では対応していないのが注目される。

表 1-8　3 つの国語辞典における「広い・狭い」の意味記述

	『日本国語大辞典』　第 2 版	『明鏡国語辞典』第 2 版	『新明解国語辞典』第 6 版
広い	(1)空間・面積が大きい。幅・奥行が狭くない。	①空間が開けてゆとりのあるさま ㋐面積が大きい。特に、活用できる面積が大きい。 ㋑仕切られた両端の幅が大きい。 ㋒ものの広がりが大きい範囲に行き渡っているさま。	㊀(何かをするのに十分過ぎるほど)△面積(空間)が大きい。 ㊁幅が大きい。
狭い	(1)空間の余裕がなく小さい。広くない。また、物と物との間隔、幅が小さい。	①空間にゆとりのないさま ㋐面積が小さい。特に、活用できる面積が小さい。 ㋑仕切られた両端の幅が小さい。	広がりが少なくて、何かするのにゆとりが無い様子だ。

「広い・狭い」は、「面積、幅」などのほか、「空間」という語も 3 点の類似点として挙げられる。1・2・3 次元のいずれの量も表すことができる。「大きい・小さい」の記述と対照すると、「面積、空間」などの点で共通し、逆に「ゆとり、余裕」という点が異なる。

表 1-9　3 つの国語辞典における「高い・低い」の意味記述

	『日本国語大辞典』　第 2 版	『明鏡国語辞典』第 2 版	『新明解国語辞典』第 6 版
高い	〔一〕空間的に上の方にあったり、上の方まで広がってあったりするさま。 (1)上の方にある。 (2)盛り上がったり積もったりして、上の方まである。積もって多い。 (3)丈(たけ)が長い。 (4)外部に盛り上がり、突き出ている。	①上方への距離が大きい。 ㋐基準点から上方に存在する物までの距離が大きい。また、ある物が基準点より上方に位置している。 ㋑物の下端から上端までの距離が大きい。 ㋒鼻・筋肉・乳房などの盛り上がり方が大きい。	㊀基準とする位置から上の方向への隔たりが△比較対象とする(一般に予測される)ものより大きいと認められる状態だ。

低い	〔一〕空間的に下の方にあったり、下の方まで広がってあったりするさま。 (1)下の方にある。下の方に位置している。 (2)ある基点からの盛り上がりや突き出しの程度が少ない。下からの長さ、隔たりが小さい。「鼻が低い」	①上方への距離が小さい。 ㋐基準点から上方に存在するものまでの距離が小さい。また、ある物が基準点より下方に位置している。 ㋑物の上端から下端までの距離が小さい。 ㋒鼻などの盛り上がり方が小さい。	㊀基準とする位置から上の方向への隔たりが△比較対象とする(一般に予測される)ものより小さいと認められる状態だ。

「高い・低い」は、「基準点、基準とする位置」「上方、下方」「隔たり、距離」などの記述が 3 点において類似している。「大きい・小さい」の記述と対照すると、共通する記述はあまり見られないが、空間を占める量が多いという点では一致すると考えられる。

表 1-10　3 つの国語辞典における「太い・細い」の意味記述

	『日本国語大辞典』　第 2 版	『明鏡国語辞典』第 2 版	『新明解国語辞典』第 6 版
太い	〔一〕物体の周囲やさしわたしが長く、体積・面積が大きい。 (1)棒状のものの径が大きい。また、線状のものの幅が大きい。	①線条的なものの幅が大きい。 ㋐ひも状や棒状のものの径が大きい。周囲が大きい。 ㋑帯状・線状のものの幅が大きい。	㊀棒状のものの(すべての)側面の幅、また、線状・帯状のものの幅が、△比較の対象とする(一般に予測される)ものより広い様子だ。〔ただし、一般に、川、道路・線路など、地表に沿って形作られたものについては用いない〕

細い	(1)長く延びるものの断面や幅が小さい。 (イ)立体的なものの、さしわたし・直径が小さい。肢体などがやせている。太くない。 (ロ)平面的なものの、さしわたし・幅が狭い。広くない。 (2)体積が小さい。こまかい。小さい。	①線条的なものの幅が小さい。 ㋐ひも状や棒状のものの径が小さい。周囲が小さい。 ㋑帯状・線状のものの幅が小さい。	㊀棒状のものの(すべての)側面の幅、また、線状・帯状のものの幅が、△比較の対象とする(一般に予測される)ものより狭い様子だ。

「太い・細い」は、「棒状、紐状」のものの「径、さしわたし」や、「線状、帯状」のものの「幅」について述べるとある。「広い・狭い」の記述と対照すると、「幅」について言うという点が共通することがわかる。

上記 3 点の中では、『明鏡国語辞典』がもっとも新しい研究成果を反映させているように思われる。『明鏡国語辞典』は語の意味用法の違いだけでなく、重なり合う部分の説明や漢字の使い分けも詳細に記述されていることから、2.1 で、3 対 4 組の次元形容詞における空間の量を表す意味記述を再度取り上げる。

1.2　視点と捉え方に関わる認知言語学の研究

認知言語学では､｢言語で表されている状況が人間とは切り離して客観的に存在すると考えるのではなく、人間が外界を見るときには、必ず複数ある選択肢のうちのある一つの切り取り方・見方を採用しており、それが言語表現に表れていると考える」(河上 1996：13)　本研究で取り上げる「細い道・狭い道」などの場合においても、外界では同一の対象を複数の次元形容詞で表現しており、その使い分けについて詳細に分析するのが本稿の課題である。言語主体による対象のとらえ方をここで仮に「視点」と呼ぶこととし、「視点」に関わる主要な先行研究を見ていく。

1.2.1　視点、パースペクティヴについて

「視点」という語は日常用語としても使用する語であり、そこでは「視線が注がれるところ」あるいは「物事を見る立場」などと記述する国語辞典が多い。

専門語としては、まず、認知科学の立場からの研究を見ると、宮崎・上野(1985)で上野は､「視点」には､「どこから見ているかというときの“どこ”をさす場合」と､「どこを見ているかというときの“どこ”をさす場合」の 2 つの意味があり、この 2 つは密接な関係を持つとした上で、論考の中では「どこから」の「どこ」に対して視点という語を使用している。さらに､「視点の構造は、2 つの対語によって表現」できるとし、動的視点と静的視点という概念を導入している。前者は､「生成的であり」「視点の変化に伴う対象の見えの変化のあり方を見る」のに対し、後者は､「そうした連続的な変化の途上にある対象の一つの見え方の事例をながめる」と述べている。(1985：53-55)

言語学では､「前・後ろ、右・左」といった方向性を表す表現において視点が問題とされる。一般に、話し手の視点によって座標軸が与えられる場合を直示的と言い、基点となるものの内在的な方向性によって座標軸が与えられる場合を非直示的と言う。田中(1997)は、このような空間詞の日英比較の中で､「一般に､『見る』という行為は必然的に『視点』を含んで」おり､「どの表現が実際に選ばれるかは、主体が与えられた状況をどう意味づけするかに係っており、表現上の差異は『視点の違い』として説明されることになる」(103-104)と述べている。そして、事物の空間関係表現の事例研究から、話者の視点と物(基点)の内在的な方向性とのどちらがどのような場合に突出しあるいは抑制

されるか等について仮説を導き出している。

また、松木(1992)は「視点」について、「見る」という行為が成り立つために必須の要素として、まず「『誰がみるのか』という見る主体」と「『どこ(何)を見るのか』という見られる客体(対象)」の2つがあるとした。続いて、その2つの必須の要素の上に、「『どこ(何)でみるのか』『どこ(何)から見るのか』という見る場所」と「『その結果どのように見えるのか』という見える様子」の2つを加えて、合わせて4つの要素を挙げている。

さらに、本多(2005)は、生態心理学の観点を取り入れた認知言語学の立場から、「視点現象」という概念を提案した。これは松木(1992)の4つの要素に1つを加えたもので、それぞれの要素に「視点人物、注視点、視座、視野(ヴィスタ)、見え」の5つの術語を与えている。視点現象の5要素は、次のように説明されている。

a 見る主体：誰が見るのか(視点人物)

b 見られる客体(対象)：どこ(何)を見るのか(注視点)

c 見る場所：どこ(何)で見るのか、どこ(何)から見るのか(視座)

d 見える範囲：どこからどこまでが見えるのか(視野、ヴィスタ)

e 見える様子：その結果どのように見えるのか(見え)

本多(2005：32)

dの「見える範囲」が加わることにより、より実際的な対象の把握を説明できるものとなっている。

次に、ラネカーの説を見る。Langacker (1987)は、視点(view point) について、次のように述べている。

"…the general term viewpoint as subsuming the two more specific notions **vantage point** and **orientation**"

Langacker(1987 :123)

このラネカーの考えを、籾山・深田(2003:108)は、「視点をものを見るときの位置(vantage point)とものを見るときの指向性(orientation)とを包括する概念として用いている」とまとめている。

ラネカーは、「ある事物をどの程度主体的／客体的に解釈しているか」ということなどを含めた、視点よりもさらに包括的な概念として、パースペクティヴという考え方を提案している。Langacker(1988)では、パースペクティヴについて次のように述べている。(斜体は、筆者による。)

> “The final dimension of imagery, perspective, subsumes a number of more specific factors: *orientation, vantage point, directionality, and how subjectively or objectively an entity is construed*. All these factors imply a viewer, or more abstractly, a conceptualizer whose construal of the conceived situation can be thought of as roughly analogous to a perceptual relationship(cf. Langacker 1985).”
>
> Langacker(1988 :84)

ラネカーのこの「パースペクティヴ」を、深田・仲本(2008)は次のように解説している。

> あらゆる言語表現の背後には、必ず、その言語表現が表す事態を解釈する概念化者(conceptualizer)が存在する。パースペクティヴとは、この概念化者の役割に焦点を当てた概念である。これには、
>
> (i) 視線の向き (orientation)、
>
> (ii) 立脚点 (vantage point)、
>
> (iii) 方向性 (directionality)、
>
> (iv) ある存在をどの程度主体的／客体的に解釈するか (how subjectively or objectively an entity is construed)という四つの要素が含まれる。
>
> 深田・仲本(2008 : 43)

また、ラネカー(2011)では「概念化が比喩的に言って場面を視覚的に捉えることだと

するならば、パースペクティヴ(perspective)とは、視点の配置(viewing arrangement)であると言えるだろう」(2011：95-96)「視点の配置とは『観察者』と『観察されている状況』の全体的な関係のことである」(2011：96)と述べている。

以上のように、「視点」についてはさまざまな領域で注目され、研究が行われてきている。

Langacker は、他の研究よりも概念化者の役割に重きをおいた、ある存在をどの程度主体的／客体的に解釈するかを含めた包括的な「パースペクティヴ」という考え方を提案している。

本稿では、次元形容詞の語彙体系上の意味の使い分けを説明するため、以上の「視点」に関する解釈を踏まえた上で「視点」という語を定義し、第三章以降で使用することとする。

1.2.2　スキャニングと主体の役割について

1.2.1 では、宮崎・上野(1985)の「動的視点」「静的視点」という考え方について触れた。ここでは、さらに心的側面に注目してスキャニング(scanning)に関する先行研究を見ていく。

山梨(2000)では、「外部世界に視線を投げかけ移動していく行為(あるいは視線を移動していく行為)は、一般にスキャニングの認知プロセスとして理解される」とし、スキャニングに関わる視線の移動について次のように述べている。

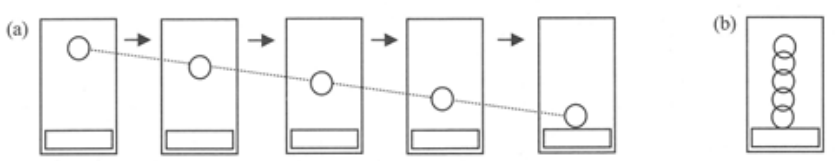
> スキャニングにかかわる視線の移動としては、少なくとも次の二つの移動(すなわち(i)一次元的な視線の移動と(ii)二次元的な視線の移動)が考えられる。前者は、上下、左右のような空間のある一方向に向かっての視線の移動、後者は、ある形(ないしはフォルム)をもつ対象の輪郭にそった視線の移動として理解される。外部世界の知覚には、さらに三次元的な構造や奥行きにかかわる視線の移動も考えられる。
>
> 山梨(2000：57)

一方、Langacker(1987：101 - 105)は、外部世界を認知していく場合、2つ以上の対象における比較行為を行う場合を「スキャニング」と呼んでいる。この「スキャニング」について深田・仲本(2008)は次のように述べている。

> 一般に、外界を認知していく場合には、ある〈存在〉と別の〈存在〉とを比較するという認知プロセスが無意識のうちに起こっている。〈略〉この比較行為は、ある認知事態を「基準」(standard, S)とし、これに基づいて別の認知事態 (target,T)を相対的に捉えていく行為として規定される。この比較行為において、2つの認知事態を関連づけていくプロセスがスキャニング(scanning)である。
>
> 深田・仲本(2008：92)

また、Langacker(1987)は、スキャニングのモードによって、連続的スキャニングと一括的スキャニングの2種類に分けられるとしている。連続的スキャニングとは、2つの関連付けられた認知事態を1つのまとまりにして、また別の1つの認知事態と関連付けていくような場合を指している。スキャンした認知事態の連続は、ひとかたまりの事態として処理することも可能であり、このモードは、一括的スキャニング(summary scanning)と呼んでいる。また、連続的スキャニングは認知処理の仕方であって、実際の時間軸にそった変化ではなく、時間的に変化のない事態を表す場合にも用いられるという。

次の図1-2は、「落ちる」を例として、2種類のスキャニングの違いを示したものである。



連続的スキャニング (a) と一括的スキャニング (b)

図 1-2

山梨(2004)によれば、ある対象の形状を把握する際に、英語と日本語は異なる認知処

理で行われており、英語では一括的スキャニングが好まれるのに対して、日本語では連続的スキャニングの方が好まれる。このため、英語における「スキャニング」がそのまま日本語の表現に適用できるかどうか検討する必要があるという。

そこで、本稿では、山梨とラネカーの「スキャニング」の概念を区別するため、対象を観察する際、ラネカーの「一つの対象と別の対象を比較するという認知プロセス」のみに「スキャニング」という言葉を使用する。

次に、概念化の対象である事態と主体との関係について、先行研究を見ていく。

深田・仲本(2008：93-94)は、Langacker(1991)の説に基づきながら、さらに分析を加えている。そして、「主体のある場所への移動とそれに伴う＜見え＞の変化を表す言語表現」には英語の場合 4 通りの表現がありうるとした上で、事態の捉え方には、主体の視点と役割との関連で 4 つのタイプがあるとし、それを図で示している。(下記の、A､B､C､D は、それぞれ対応している。)

A　They are approaching Tokyo.

B　We are approaching Tokyo.

C　The island came into view.

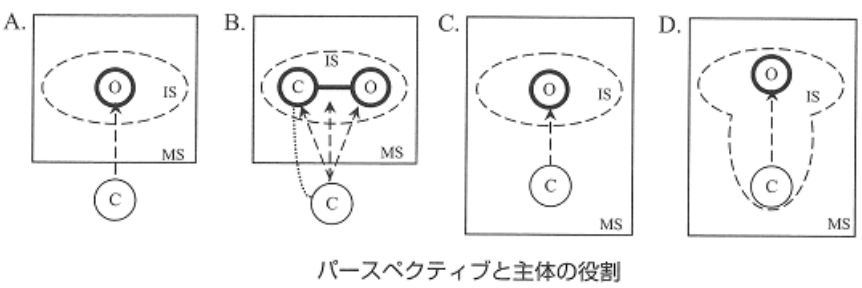
D　Tokyo is approaching.

A.主体(C)は、事態の外から自らが参与者とはなっていない事態(O)を把握する。

B.主体(C)は、事態の外から自らが参与者となっている事態(O)を把握する。

C.主体(C)は、事態が起こる場を形成し、その上で事態(O)を把握する。

D.主体(C)は、事態の中に入ってその事態(O)を把握する。



パースペクティブと主体の役割

図 1-3

各々の図において、MS(最大領域、Maximal Scope)は概念化の対象となっているすべての＜存在＞を含む領域、IS(直接スコープ、Immediate Scope)は、このMSの中でプロファイルされている＜存在＞を最も直接的に特徴づけている領域を表している。(Cは、conceptualizer、Oは、objectの略。)

上記で挙げられている用例は動詞を用いた文であるが、深田(2004)は、形容詞についても言及している。そして、形容詞の主体・客体関係を論じた論考の中で「英語であれ日本語であれ、形容詞の意味には、対象の性質に関する客体的な側面だけでなく、その対象を知覚、認知するという主体的な側面も重ね合わせられている」(2004：119)と指摘している。

図1-3の図式は、本稿で扱う「次元形容詞＋名詞」の用例における言語主体と対象の関係を表す上で援用できると考え、第三章で図式化を試みる。

第二章　用例の収集および分析方法

第二章では、本研究の分析対象である次元形容詞と 16 個の名詞、用例収集に使用するコーパス BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）及び検索サイト Yahoo！について述べる。

2.1　分析対象：3 組 4 対の次元形容詞と名詞

本稿では、次元形容詞「大きい・小さい」「広い・狭い」「太い・細い」「高い・低い」を対象として、「湖、川、谷、山、木、道、橋、建物、部屋、窓、テーブル、車、人、紙、皿、解答欄」の計 16 個の名詞との共起状況を調査分析する。そして、実際の用例で、これらの形容詞と名詞がどのような意味で使用されているかを文脈から判断し、両者の使い分けの様相を示すとともに、その原理を示すものである。なお、分析対象の次元形容詞は「大きい山」のような連体修飾の形に限定して、用例を分析する。

分析対象の決定に関して、以下の 2 点について述べる。

1)　4 対の次元形容詞を分析対象とした理由。

2)　16 個の名詞を分析対象とした理由。

まず 1)について述べる。本稿は、言語主体が観察対象をどのような視点で観察するかによって観察対象の捉え方が違うことを明らかにしようとするものである。つまり、その観察対象がなぜ特定の形容詞と共起するかという点に注目する。そのため、同じ観察対象が 2 種の次元形容詞と共起する例を対象として取り上げて分析する。たとえば、「細い道」と「狭い道」のような例である。

次元形容詞の意味については、「先行研究」で述べたが、ここで各形容詞の意味を『明鏡国語辞典』から引用する[11]。この 3 対 4 組の次元形容詞における空間の量を表す意味

[11] 7 点の国語辞典で調べ、1.1.4.4 で『日本国語大辞典』、『新明解国語辞典』、『明鏡国語辞典』の 3 点を表にまとめた。

記述には、それぞれ共通点があることが分かる。

「大きい」:〔視覚的にとらえて〕物体が空間を占める量が多く、面積・体積・寸法などが大である。

「広い」: 空間が開けてゆとりのあるさま。

㋐面積が大きい。特に、活用できる面積が大きい。

㋑仕切られた両端の幅が大きい。

㋒ものの広がりが大きい範囲に行き渡っているさま。

（明鏡　第二版：219、1498）

意味記述からわかるように、「大きい」と「広い」はともに 2、3 次元的部分を持つ対象に適用される。そして「面積が大きいこと」あるいは「体積が大きい、ものの広がりの範囲が大きい」ことを表す点が共通している。

大きい:〔視覚的にとらえて〕物体が空間を占める量が多く、面積・体積・寸法などが大である。

高い：上方への距離が大きい。

㋐基準点から上方に存在する物までの距離が大きい。また、ある物が基準点より上方に位置している。

㋑物の下端から上端までの距離が大きい。

㋒鼻・筋肉・乳房などの盛り上がり方が大きい。

（明鏡　第二版：219、1041）

意味記述からわかるように、「大きい」と「高い」は、ともに 3 次元的な対象に適用される。他の 2 組と比べると共通性はやや低いが、「上方までの距離が大きい」物は「空間を占める量が多い」ことから、同じ対象について使い分け例が見られる。

広い：空間が開けてゆとりのあるさま。

㋐面積が大きい。特に、活用できる面積が大きい。

㋑仕切られた両端の幅が大きい。

㋒ものの広がりが大きい範囲に行き渡っているさま。

太い：線条的なものの幅が大きい。

㋐ひも状や棒状のものの径が大きい。周囲が大きい。

㋑帯状・線状のものの幅が大きい。

（明鏡　第二版：1498、1536）

意味記述からわかるように、「広い」と「太い」はともに 2、3 次元的部分を持つ対象に使用される。「幅が大きい」ことを表す点が共通している。

1.1 で述べた諸研究および以上の記述からも、「大きい・小さい」「広い・狭い」、「広い・狭い」「太い・細い」、「大きい・小さい」「高い・低い」の 3 組の次元形容詞を考察の対象とすることは妥当であると考える。

次に、2)については、この 16 個の名詞の多くは、先行研究、特に、国広(1969、1982)、久島(1993、2001)、西尾(1972)の研究の中で言及されているものである。本研究では一般性をみるために、さらにいくつかの名詞、例えば「皿」、「紙」、「車」、「テーブル」、「谷」などを追加して取り上げることにした。そして、これらの名詞が「視点」などとの関連を実際の使用例の中を分析していく。

2.2　用例の収集

本稿で使用する用例の収集は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を主とし、補足資料としてインターネット検索サイト「Yahoo! JAPAN」を参考にした。

コーパスとは、前川(2009)によると、「言語研究のための大規模なデータ。対象とする言語において実際に用いられた用例を、その言語の実情を正確に反映するように組織的に収集して、公開したもの。通常コンピュータで利用する。品詞情報などの検索用情報を付加したものも多い」(p.6)である。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese：略称 BCCWJ)は、国立国語研究所が構築した現代日本語のコーパスであり、少納言、中納言、NINJAL-LWP が、検索システムとして提供されている。本研究では、BCCWJ を使用し、BCCWJ で出現度数の少ない場合は「Yahoo! JAPAN」も利用した。

BCCWJ には 13 種のメディア／ジャンル別のデータが収録されており、サンプル数は全体で 17 万件、合わせて 1 億余りの語が収録されている。NINJAL-LWP for BCCWJ では、表 2-4 のように各サブコーパスの媒体ごとの記号と語数を示している。表からも分かるように、検索サイト「Yahoo!」からは、「Yahoo!知恵袋」と「Yahoo! ブログ」を、資料として収録している

表 2-1　NINJAL-LWP for BCCWJ における各サブコーパスの媒体ごとの記号と語数

サブコーパス	媒体	記号	語数(語)
出版	書籍	PB	29,330,755
	雑誌	PM	4,626,060
図書館	書籍	LB	27,195,969
特定目的	ベストセラー	OB	4,130,582
	知恵袋	OC	11,329,855
	法律	OL	938,198
	国会会議録	OM	5,086,849

	広報紙	OP	4,108,470
	教科書	OT	1,041,837
	韻文	OV	232,506
	白書	OW	4,766,219
	ブログ	OY	12,018,463
		総語数	104,805,763

なお、田野村(2012)によれば、BCCWJ のインターネット文書で構成されたサブコーパス(Yahoo!知恵袋と Yahoo!ブログ)においてデータ重複の様相が見られるという。本稿では、より客観性と信頼性を高めるため、重複しているデータは 1 件として集計した。

次に、BCCWJ における使用例を中納言で収集する際の手順は次の通りである。「道」を例とする。

1)「前方共起条件の追加」を「品詞の大分類が形容詞」にとし、「キー」を「語彙素が道」と設定する。

2)得られた検索結果を zip ファイルでダウンロードして「sortKWIC full_data」でソートし Excel に格納する。

3)Excel ファイルの中から 4 対の次元形容詞の連体修飾形に対象語が接続する例だけを残す。[12]

[12] 「長き橋」などのような用例は、分析対象外とした。

2.3　用例の集計と分析方法

第三章で扱う現代日本語書き言葉均衡コーパスからの用例は、筆者が 2013 年 1 月から 2013 年 6 月にかけての 6 か月間に検索し収集したものである。

集計方法と個別の用例分析について、次に述べる。

表 2-2[13]　表 3-1-1 の一部分

	大きい～	小さい～	広い～	狭い～	計
～湖	3	3	2	0	8
～建物	10	2	8	2	22

① 「3.1.3.1」、「3.2.3.1」、「3.3.4.1」におけるそれぞれ表の「計」の部分の数字は、「次元形容詞＋名詞」についてヒットした件数を示している。「計」の中には、次の②③（多義語、合成語）の数も含まれている。

② 多義語の扱いについて

16 の名詞には、単義語もあれば多義語もある。たとえば、「窓」の用例には、建築物の「窓」だけでなく、「封筒の窓」「パソコン操作の窓」などがある。「道」には、通行のための「道」だけでなく「人生の道」のような抽象的な意味の「道」もある。このような多義語の場合もすべて「計」に含まれているが、用例分析には、次元的な意味で使用されたものを対象とする。

③ 合成語の扱いについて

分析対象とする次元形容詞を目標として検索するとき、たとえば、「高い」の関連語「小高い」や、「広い」の関連語「だだっ広い」なども拾った。これらの数も「計」の中に含まれる。なお、このような関連語と修飾される名詞の修飾関係また意味は、分析に大きく影響しないため、用例の多様性を狙いとして、取り上げた用例の中に入っている。

④ 「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」について

次元形容詞の使い方として留意すべき形式であり、3.2 の「高い・低い」の使用

[13] 説明のために、表 3-1-1 の一部分を取り上げる。

状況を調べた結果、「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」という形が多数表れている。この「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」と「形容詞 - 名詞」の使い分けを明らかにするため、BCCWJ で収集した「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」の形式の数および使用状況を 3.2.4 で詳しく述べる。

個別の用例分析においては、対象となる語連結を含む文だけでなく前後の文も合せて検討し、先行研究で取り上げた視点の観点から詳細に分析を行う。

第三章　視点による次元形容詞の使い分け

本章では、次元形容詞「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」を対象とし、これらの形容詞が「湖、川、谷、山、木、道、橋、建物、部屋、窓、テーブル、車、人、紙、皿、解答欄」の計 16 の名詞を修飾する場合を考察する。

まず、3.1 では「大きい・小さい」「広い・狭い」と「湖」「建物」「部屋」「窓」「皿」「紙」「解答欄」の 7 つの語とのそれぞれの組み合わせ(例えば「大きい湖」と「広い湖」)を含む文を収集し、使用状況を分析した。結論として、「視点」の概念のうち、「①言語主体の立脚点　②言語主体から見える対象の範囲　③言語主体が注目する対象の部分と特性」の 3 つの要素が、「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使い分けに影響を与えることが分かった。

3.2 では「大きい・小さい」「高い・低い」と「山」「木」「建物」「車」「人」「テーブル」「窓」の 7 つの語とのそれぞれの組み合わせ(例えば「大きい山」と「高い山」)を含む文を収集し、使用状況を分析した。結論として、「視点」の概念のうち、「①言語主体の立脚点　②言語主体から見える対象の範囲　③言語主体が注目する対象の部分と特性」の 3 つの要素が、「大きい・小さい」と「高い・低い」の使い分けに影響を与えることが分かった。

3.3 では「広い・狭い」「太い・細い」と「道」「橋」「川」「谷」の 4 つの語とのそれぞれの組み合わせ(例えば「狭い道」と「細い道」)を含む文を収集し、使用状況を分析した。結論として、「視点」の概念のうちの「①言語主体の立脚点　②言語主体から見える対象の範囲　③言語主体が注目する対象の部分と特性　④言語主体が対象をどの程度的に主体的／客体的に解釈するか」の 4 つの要素が、「広い・狭い」と「太い・細い」の使い分けに影響を与えることが分かった。

また、3.3 では用例の分析に際して、認知言語学の「スキャニング」「主体性」「トラジェクターとランドマーク」などの概念を使用する。

3.1　「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使い分け

3.1.1　先行研究における「大きい・小さい」と「広い・狭い」

『日本国語大辞典』は、「広い」は「空間・面積が大きい。幅・奥行が狭くない」とし、「大きい」は「(物の形について)空間を占める容積や面積が大である」と記述している。二語の意味は全体としては異なるものの、ともに「面積が大きい」「面積が大である」というほぼ同じ内容の表現を含んでいる。そして、面的な拡がりを持つものを対象とする場合、「広い」も「大きい」も次のように使用することができる。

・広い／大きい - 部屋／湖／池…
・狭い／小さい - 部屋／湖／池…

この小節では、「大きい・小さい」「広い・狭い」に関する主要な先行研究として、服部(1968)、国広(1968、1982)、西尾(1972)と久島(1993、2001)の四人の説を取り上げ。それぞれについて見ていく。

「大きい・小さい」の次元の量について、西尾(1972)は「『大きい・小さい』は体積や面積だけでなく、長さを表すこともあって、1、2、3 次元のすべての量に関係する。ものが空間を占めている量が大(小)であることを表す、もっとも一般的・包括的な語だといえよう。」(1972：230)と述べている。

「大きい・小さい」の意義素について、国広は「〈形のある物を全体として捉えたときの空間占有量が大きい(小さい)〉」(1982:166)と定義している。国広(1982)によれば、「大きい・小さい」は次元形容詞の中の「高い・長い・太い・広い・厚い(反対語は省略する)」より広範囲の形のものに用いられるという。「高い・低い」が用いられる「塔、建物」についても、「広い・狭い」が用いられる「部屋・庭」についても、「大きい・小さい」を用いることができる。一方、「頭・ボール」などの球形のものについては「大きい・小さい」しか使用できないと述べている。つまり、「形態上の特徴に関する制約が最も少ない形容詞だということができる。」(1982：166)と主張している。また、次元形容詞の中では「大きい・小さい」は抽象度のもっとも高いものなので、「大きい・小さい」を説明で

きる抽象的な形容詞はほかに存在しないと指摘している。

一方、「広い・狭い」は1次元と2次元の量を表すと、多くの先行研究で述べられているが、3次元の量について言及しているものは少ないようである。その中で、西尾(1972)を挙げる。西尾によれば、「広い・狭い」は2次元の量を表すことが多いが、1次元の量も3次元の量も表すことができるという。たとえば、「狭い六畳の間」「狭いすりガラスの箱の中」などのように、面積についての表現が多く見られるが、面積が広ければ部屋全体の容積もそれに応じて広くなるのが普通であると説明している。

以上から、「大きい・小さい」と「広い・狭い」はともに1，2，3次元の量を表現することが可能であるとまとめられる。

次に、相違点であるが、服部(1968)では、「広い・狭い」と「大きい・小さい」の意味の違いについて、次のように論じている。

> 「日本語のヒロイ、セマイは確かに面積の大小を表わすけれども、ただそれだけではない。面積の大小なら　オオキイ、チイサイもそれを表わす。たとえば〈略〉オオキイ、チイサイと言うときには、池全体の形(面積)を客観的に(あるいは地図の上で見た場合のように)問題にしているのに対し、ヒロイ、セマイ、というと、その瞬間に、その池の岸に立っているか、水面にボートでも浮かべながら、その池の広さ(面積)を評価しているような気がしてくる。すなわち、同じく面積の大小を問題にしているのだけれども、観点が違う。」
>
> 「オオキイ、チイサイは形のあるものについて用いられるが、ヒロイは形のつかめないものについても言える。」
>
> 服部(1968：104-105)

この服部説を手がかりに、久島(2001)は考えを進め、「大きい・小さい」は《物》について言い、「広い・狭い」は《場所》について言うとして、2対の形容詞を2系列に分けることができると主張している。久島は「絨毯」という語を挙げて、「絨毯」を「大きい・小さい」というのは、店で商品として陳列したり、持ったりするような場合で、《物》扱いとなっており、それに対して、「広い・狭い」というのは、床に敷いて、人がその上で

活動するような場合で、《場所》として捉えていると説明している。

久島は観察対象に注目し、「観察対象を《場所》ととらえるか《物》ととらえるかによって、共起する次元形容詞が変わる」と説明しようとしている。しかし、実際の用例の使用状況の分析によると、久島の観点には不十分なところが見られる[14]。そのため、筆者は認知言語学の角度から言語主体に注目し、実際の用例の分析を通して、「言語主体が観察対象をどのような『視点』で観察しているかによって、共起する形容詞が変わる」という観点を提案する。

3.1.2　「大きい・小さい」と「広い・狭い」の分析における視点

本稿では、1.2 の視点と捉え方に関わる研究に基づき、「視点」を次の 4 つからなるものと考える。

① 言語主体の立脚点
② 言語主体から見える対象の範囲(「場」)
③ 言語主体が注目する対象の部分と特性
④ 言語主体が対象をどの程度主体的／客体的に解釈するか

このうち、本節で扱う「大きい・小さい」「広い・狭い」については、以上のうち、①②③の 3 つに基づいて分析する。

① 言語主体の立脚点
② 言語主体から見える対象の範囲(「場」)
③ 言語主体が注目する対象の部分と特性

3.1.3　「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使用状況と使い分け

[14] 1.1.3 を参照。

3.1.3.1　「大きい・小さい」「広い・狭い」における集計結果

本節では、「大きい・小さい」「広い・狭い」の両方が用いられる対象のうち「湖」「建物」「部屋」「窓」「皿[15]」「紙」「解答欄[16]」の 7 語の用例を挙げて分析していく。まず、BCCWJ の用例数について見てみよう。(表 3-1-1)

表 3-1-1　「大きい・小さい」「広い・狭い」が「湖･建物･部屋・窓･皿・紙」を修飾する用例数

	大きい～	小さい～	広い～	狭い～	計
～湖	3	3	2	0	8
～建物	10	2	8	2	22
～部屋	8	9	91	107	215
～窓	2	5	9	9	25
～皿	1	1	0	0	2
～紙	1	4	0	0	5

集計結果から、以下の 2 点が指摘できる。

① 「大きい・小さい」と「広い・狭い」の 2 対の次元形容詞の使用数に大きな差のある語があることが分かった。つまり、「広い・狭い - 部屋」の用例は 198 あるのに対して、「大きい・小さい - 部屋」は 17 となっている。したがって、「広い・狭い - 部屋」は「大きい・小さい - 部屋」」より使用頻度が高いということができる。

② 1 対の次元形容詞の中で、「量的に大きい方」と「量的に小さい方」のうちでどちらが被修飾語(名詞)と多く共起するかの傾向がうかがえるものがある。たとえば、「大きい／広い - 建物」がそれぞれ 10、8 なのに対し、「小さい／狭い - 建物」はそれぞれ 2、2 となっており、「建物」では量的に大きい方の形容詞とより多く共起している。

次に、データの扱いと集計方法について 4 点補足する。

① BCCWJ では「小さい窓」の用例は 5 件あり、5 件ともに建造物の窓とは異なる意味で

15　「お皿」も分析対象とする。
16　「回答欄」も分析対象とする。

使われている。例えば、「封筒の窓」「パソコン画面操作の窓」などである。そのため、「小さい窓」は個別の用例分析では対象から外した。

②「広い」については、「建物」において合成語「だだっ広い」の例が見られた。「だだっ広い」の用例は 2 件あるが、この合成語は結論に影響しないため、本稿では分析対象に含めた。

③「広い・狭い - 窓」については、BCCWJ では、「広い・狭い - 窓」18 件のうち「幅のせまい窓」が 2 あった。確認のため、「幅の広い窓」「幅の狭い窓」を Yahoo!で検索したところ、「幅の - 広い／狭い - 窓」は、ともにわずかであった。

④「皿」、「紙」、「解答欄」については、BCCWJ では、「広い・狭い - 皿」、「広い・狭い - 紙」「大きい・小さい - 解答欄」「広い・狭い - 解答欄」の用例はゼロであるが、検索サイト Yahoo!では用例が見られる。そこで、Yahoo！の用例を個別分析で取り上げる。

ここで 7 つの分析対象について、「大きい・小さい」「広い・狭い」に関連する特徴の異同を整理すると、次のようになる。

表 3-1-2　対象 7 語の「大きい・小さい」「広い・狭い」に関連する特徴[17]

	何かに付属している	移動できない	内部空間を持つ	顕著な面を持つ
湖	○	○	×	○
建物	×	○	○	×
部屋	○	○	○	×
窓	○	○	△	○
皿	×	×	×	○
紙	×	×	×	○
解答欄	○	○	×	○

個別の用例分析は、上記の特徴の異同、分析上の便宜、および結論とのつながりの 3 点を考慮し、「湖」、「建物」、「部屋・窓」、「皿・紙・解答欄」の 4 つのグループに分けて行う。

17 「○」は肯定の表示、「×」は否定の表示、「△」はどちらともいえないの表示である。以下同様。

第一は、「湖」である。「湖」は深さがあり 3 次元的な形を持っているが、2 次元の部分(水面)が顕著であり、一般には水面に注目する。久島(1993、2001)は、《場所》の性質が強いとしている。

第二は、「建物」である。「建物」は人工物であり独立的な形を持ち、内部空間を持つものである。外から観察するのが一般的であるため、次の「部屋」と区別する。

第三は、「部屋」と「窓」である。劉(2013)では、「窓」は壁の一部として存在しており、壁にある「穴」であると述べた。「部屋」は、家や建物の中をいくつかに仕切ったそれぞれの空間であり、床、壁、天井によって囲まれ形成された建物の一部である。したがって、「部屋」は「建物の中にある穴(空間)」と考えることができる。

第四は、「皿」「紙」「解答欄」である。皿の上に食べ物などを載せる、紙の上に字を書く、解答欄(紙)に字を書くというように、その機能に共通点が認められる。解答欄は、線によって囲まれた部分であり、「紙」との使用の差異を見るため加えた。

3.1.3.2　「大きい・小さい」「広い・狭い」における用例の個別分析

3.1.3.2.1　「湖」における「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

服部(1968)によれば、「池」の面積を問題とするとき、観点の違いによって、「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使い分けがあるという。検証するため、「湖」の用例から「大きい・小さい」と「広い・狭い」における使い分けを見てみよう。

まず、「大きい／小さい - 湖」の例から見ていく[18]。

(1-1)そうしたらこの**大きい湖**の生態系というものは壊れちゃう。石油コンビナートも大事かもしれないが、日本で十一番目の大湖、しかもあの湖沼群というものは日本にあれしかない。(OM11_00011)[19]

[18]用例中の太字と下線は筆者が付したものである。また、用例の番号は、(○-△)のような形で示している。「○」は節の数字、「△」はその節における用例の順番である。たとえば、第 3 節の第 12 番の用例は「(3-12)」のように示している。

[19]用例末尾の「(OM11_00011)」のようなアルファベットと数字の組み合わせは、BCCWJ のサンプル ID であり、検索サイト Yahoo!の用例の場合は用例の末尾にサイトの出所を付した。

(1-2)世界で一番**大きい湖**は、カスピ海です。ロシア南部、カザフスタンからイラン北部にまたがる湖で面積は374,000ｋ㎡あります。この湖の広さは日本の国土(日本の総面積377,923km2)とほぼ同じくらいの広さです。
(http://www.tabi2ikitai.com/geography/j0101a/a01003.html)

(1-3)周囲が地図で大雑把に計ると7キロくらいでしょうか、**小さい湖**です。 しかしとても綺麗なところで、今回の旅行の中では自然好きのわたくしには、一番良かったかもしれません。(http://www.geocities.jp/mimi6062000/homepage6/top13.html)

用例(1-1)の場合は「日本で十一番目の大湖」という表現から、この湖における何らかのデータ(例えば､面積など)に基づいて､湖の大きさを判断していることが推測できる。(1-2)は具体的な数字で湖の面積を説明しようとしている、用例(1-3)は地図を使って客観的に湖の形を把握している。

(1-4)夜明けとともに、玄徳は一隊を率いて前線の近くまで馬をすすめて見た。黄河の支流は、ひろい野に、**小さい湖**や大きな湖を、無数に縫いつないでいる。ふかい春眠の霞をぬいで、山も水も鮮やかに明け放れてはいるが、夜来の殲滅戦は、まだ河むこうに、大量な人物を撒いて咆哮していた。(LBd9_00063)

(1-5)大雪山国立公園の南端に位置している｡いずれにしても旭川からも帯広からも遠い、山奥の湖には違いない。「はあ、なるほど、これはまた**小さい湖**だこと」「どうしたんです、この湖が」「孫が、ここにいます」(LBk9_00240)

(1-6)新幹線の中でトランプババ抜きをやったりました後は景色を眺めたりしました愛知や近畿地方はいったことがないので景色をよくみておきました海だと思ったら**大きい湖**だったり多摩川より大きい川があったりしました[20](OY08_00346)

一方、次の用例(1-4)(1-5)(1-6)は、観察主体が対象の前にいて、湖の輪郭に視線を走らせて湖の大きさを客観的に把握し、さらにほかの対象物と大きさの比較をしていると見られる。前述のように、服部(1968)、国広(1968)は「大きい・小さい」は対象物の全体的な形を掴むことができる時に使用しやすいと指摘している。用例(1-6)においては、全体的な形がつかめない間は「海だと思った」が、新幹線での移動に伴い全体的な形を

[20] Yahoo! ブログから拾った用例であり、句読点がついていない。

把握できるようになると「大きい湖」だと認識したと考えられる。

次の用例(1-7)～(1-10)は「広い／狭い - 湖」が使用されている例である。

用例(1-7)、(1-8)はともに湖を１つのまとまったものとして取り上げ、用例(1-7)は湖の面積について、(1-8)は湖のある盆地の形状について述べている。また用例(1-7)は、面積のデータに基づいて、猪苗代湖は４番目に広い湖であると説明している。

(1-7)猪苗代湖(いなわしろこ)は、福島県の会津若松市、郡山市、耶麻郡猪苗代町にまたがる、日本で４番目に**広い湖**である。
(http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8C%AA%E8%8B%97%E4%BB%A3%E6%B9%96)

(1-8)近江盆地は、周囲が山地に挟まれて、中心に日本一**広い湖**があるためドーナツ状を呈している。(LBf3_00085)

(1-9)と(1-10)は、「ヒロイ、セマイ、というと、その瞬間に、その池の岸に立っているか、水面にボートでも浮かべながら、その池の広さ(面積)を評価しているような気がしてくる」(服部 1968：105)という考えを裏付ける具体例である。用例(1-9)の実際の視線で「湖」の形を把握するのに対して、用例(1-10)では、ボートで釣りをする時には十分な広さが必要とされるため、狭い湖では接触しないように注意しなければならないことについて述べている。この場合、言語主体は湖の２次元の面的拡がり、つまり面積に注目している。また、その面積の上方の空間も注目する範囲に含まれていると考えられる。

(1-9)とにかく広いですね。別に日本一広いというわけではないでしょうが、やはり**広い湖**を目の前にすると、ただただ広さに圧倒されますね。
(http://icanrecall.cocolog-nifty.com/blog/2012/05/post-414d.html)

(1-10)**狭い湖**の中にボートに乗った釣り人が多いので、接触しないように注意しましょう(図 3-1-1) (http://www.mfi.or.jp/kinpuso/tsuri-annai.html)

図 3-1-1

用例の(1-10)の「ボートに乗った釣り」という語から、言語主体は対象を「動作を行う所」として把握していることがわかった。この用例においては、言語主体は心理的視線によって、自分を対象の中に中において、主体的に対象を把握していると考えられる。湖の全体的な形を把握するときに使われる「大きい湖」に対して、「広い湖」は主体性が高いと考えられる。なお、この「主体性」に関する詳細な考察は 3.3 の中で述べる。

以上の分析を次の表でまとめる。

表 3-1-3　「湖」における「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲(「場」)	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	**「視点」**の要素①②③の違いによる次元形容詞の使用
湖	湖の水面の部分	対象の「場」の外	全体的な形；1 つのまとまったもの	大きい・小さい - 湖
		対象の「場」の外	面積；1 つのまとまったもの	広い・狭い - 湖
		対象の「場」の中	面積；動作を行う所	

3.1.3.2.2　「建物」における「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

BCCWJ における「建物」の用例の集計では、次元形容詞の量的に大きい方の数が量的に小さい方の数より多くなっている。検索サイト Yahoo!でも同じような傾向が見られた。

(1-11)街は夕ぐれてゆき、家いえや店みせには明かりがともりました。街の中心のほうに、ぽっこりと**大きい建物**がみえるのは、お城でしょうか。(PB49_00318)

(1-12)いよいよかすかに太陽の明かりが感じられるころになって、寒さをまぎらすために小走りに歩いていると、《…市場》という看板のかかった**大きい建物**が目に入った。(LBo9_00131)

(1-13)歴史のある八幡様のお社らしく、朱色の柱がとてもきれいな、りっぱで**大きい建物**です。でもいまのこのお社は、昭和三十一年(千九百五十六)に再建された、鉄筋コンクリート造りのものだそうです。(LBr2_00013)

(1-14)直線的な外壁をもち、屋外の中庭からの入口はひとつで、二つから4つの部屋をもつ**小さい建物**だった。こうした家屋からの出土物は、それが農民や牧夫のための住居であったことを明らかにしている(Stager：千九百八十五，十二)。(PB21_00048)

(1-15)これと対になる位置に、九尺二間の**小さい建物**がある。こちらはミソ専用で、一年ミソからはじまって、三年ミソ、五年物、十年物、二十年物。(LBs9_00167)

(1-16)**小さい建物**ですが、チャペルの挙式会場は狭さを感じさせない程、ゆったりと清々しておりました。
(http://www.weddingpark.net/000000a7/kuchikomi/231082/)

(1-17)なお、現在建物が何も建っていない敷地に建築する場合はどんなに**小さい建物**でもこの申請は必要です。
(http://www.town.shimizu.shizuoka.jp/toshi/toshi00025.html)

用例(1-11)(1-12)は、言語主体が実際に「建物」の外から「建物」の全体的な形を客観的に把握している。それに対して、用例(1-13)～(1-17)は、言語主体が対象の前にいるかどうかにかかわらず、「建物」の外観と内部構造について説明する説明文となっている。なお、BCCWJにおける「小さい建物」の2つの例(用例(1-14)(1-15))はともに間取り(内部の空間構造)について述べた文である。

また、検索サイトYahoo!の例はBCCWJと同じく、「大きい建物」の場合は建物の外観に注目している文が多いのに対し、「小さい建物」の場合は内部の空間を表現したり(用例(1-16))、敷地について述べる((用例(1-17))など、多様な使い方をしている。

西尾(1972)は「広い・狭い」について「面積が広ければ部屋全体の容積もそれに応じて広くなるのが普通だから、3 次元の表現とも見られる」(1972：235)と述べている。つまり、西尾は「部屋」「箱」など内部空間を持つ対象に「広い・狭い」を用いるとき、「広い・狭い」は 2 次元的な量を表すだけでなく、2 次元的量の上方の空間にも注目すべきとしている。本研究の用例調査によると、「建物」における「広い・狭い」は直接 3 次元の量を表している場合が多く見られた。用例(1-18)～(1-23)のいずれもこのことを示している。

(1-18)スタッフは、そのあと、境港の魚市場へ行った。そばには、海が見え、新鮮な魚が手に入るときいたからである。まるで、学校の講堂のような**広い建物**に、あらゆる海産物が並んでいた。(LBi9_00128)

(1-19)五時七分。汚染ガス放出までに残り一時間もない。日野はあたりを見まわした。**広い建物**の中にタービンが七基、唸りを上げている。天井には大小さまざまの数千本のパイプが走り、細かな振動を伝えている。(LBn9_00153)

(1-20)そんなワセトの片隅に、街の何処にでも見かけるような、一軒の安酒場がある。日干煉瓦を積み上げて造られた、**狭い建物**の中には、いつも、むっ、とする人いきれが満ちていた。(LBj9_00141)

(1-21)ただ、おおぜいの人間の笑い声が重なりあい、うねりあい、こだまして、**広い建物**の中の空気が「笑い」にだけそめ上げられるのが、熱い湯にどっぷりつかっているみたいに気持ちがよかった。(LBpn_00022)

上記の 4 例ともに「建物」の内部空間について述べている。そのうち、(1-18)(1-19)では「海産物」「タービン」といった具体的事物が建物の中にあるのに対し、用例(1-20)(1-21)では「人いきれ」「空気」といった実際には掴みにくいものの存在で、内部の空間の広がりを表現していることは興味深い。具体的事物の「海産物」「タービン」は人によって置かれており、「人いきれ」「空気」はたくさんの人が集まった時に生じるもので、いずれも「動作の結果の存在」という点でまとめられるように思われる。

形容詞「だだっ広い」は「必要以上に広い」、「意味もなく広い」という意味で「広い」

の類義語である。用例(1-22)(1-23)において、「だだっ広い」は言語主体が視覚、聴覚などを通して「空間の広さ」を体感している時に用いている。

(1-22)行列は到着ロビーを通っている。ターンテーブルに荷物はなく、**だだっ広い建物**はがらんとしていた。だが、ここは記憶の中の空港により近かった?熱されたビニールと香のにおい、茶色い制服を着た裸足の掃除人、屋根裏から聞こえる小鳥のさえずり。(LBq9_00245)

(1-23)「お呼びですか？」と、ネフスキーが二分ほどで姿を見せた。**だだっ広い建物**でないから直ぐ駈けつけられるし、板張りに絨緞を敷いた床は、近づいてくる足音が聴こえて便利である。(LBn9_00260)

表 3-1-4 で「建物」における「大きい・小さい」「広い・小さい」の使い分けをまとめる。

表 3-1-4　「建物」における「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲(「場」)	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	「視点」の要素①②③の違いによる次元形容詞の使用
建物	建物が占めている 3 次元の空間	対象の「場」の外	全体的な形・体積；1 つのまとまったもの	大きい - 建物
		対象の「場」の外	容積・面積；1 つのまとまったもの	小さい - 建物
		対象の「場」の中	容積；関わる動作の結果の存在する所	広い・狭い - 建物

3.1.3.2.3　「部屋」「窓」における「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

まず、「部屋」について述べる。「部屋」は独立できず、「建物」などの一部として存在している。そのため、部屋は外観的な形を捉えることができず、「大きい・小さい - 部屋」

は内部的な空間に注目することとなる。

(1-24)大きい部屋を二つに仕切ったウナギの寝床みたいな部屋だ。(PB29_00231)

(1-25) 現在、十二、十五、二十、二十五、三十三、四十三ｍ²等の部屋二十八室がある。このねらいは、経営トレーニング、創業の試行である。以前は、八ｍ²の小さい部屋もあったが、統合、拡張した。(PB53_00222)

(1-26)人はいくらお金があって、大きい部屋に住んだとしても、実際生活するスペース(住みやすい部屋)というのは８畳ぐらいのものではないでしょうか。(http://www.aki-club.co.jp/designers_apartments/p_kishibe/)

(1-27)気象庁の客は食事をもらえるのである。職員の数が少ないから、食堂も、小学校の教室よりも小さい部屋だ。(PB1n_00034)

(1-28)普通は、大きい部屋を小さくして、たくさんのお客を収容できるようにするけど、豪華な改装ですね。(http://www.ikyu.com/mb/magazine/hyaku/6/001.htm)

(1-29) 上がりきったところに黄金のアゲハチョウがありまずはびっくりします(写真１)。なぜ黄金のアゲハチョウがここにあるか後で分かります。奥には四畳半の小さい部屋があります。何やら半纏の展示で一杯です(写真 2)どうも、御車山祭の半纏のようです。(OY15_08902)。

これらの用例から分かるように、説明文が多い。「大きい／小さい - 部屋」のうち、(1-24)(1-25)は間取りについて説明している例である。用例(1-25)では「八㎡の小さい部屋」という床面積の表現が使われているが、床面積が大きければ容積もそれに応じて大きくなるので、この用例において「小さい」は容積のことを示していると見られる。用例(1-26)(1-27)(1-28)は「生活するスペース」「食堂」「お客を収容できる」といった文脈から、いずれも人が使用する空間(「容積」)について述べていることが分かる。また、用例(1-29)のような実際に目で対象を把握する用例もある。

一方、「広い／狭い - 部屋」はどのような使い方をしているかを次の用例から見てみよう。まず、用例(1-30)(1-31)から「広い・狭い」における面積的な用法を見る[21]。

[21] BCCWJ における「広い・狭い - 部屋」の用例は表 3-1-1 で示したように数が多いので、全体的な傾向が表れるように配慮して、この節で使用する用例を 10 個とした。

(1-30)源十郎は憶えていなかった。かなり歩いたような気もするし、あっという間に着いたような気もする。そこは六畳ほどの板敷きの**せまい部屋**だった。入口は分厚い杉板の遣り戸、三方が板壁でかこまれ、背後に明かりとりの小さな窓がある。(LBm9_00268)

(1-31)建物は木造二階建て、食堂・楽室・撞球室などを備え、**広い部屋**で十二畳半、**狭い部屋**でも十畳であった。(PB22_00347)

用例(1-30)(1-31)はともに「六畳ほど」「十二畳半」などの具体的な数字で面積を示している。

また、次の用例でも分かるように、「部屋」における「広い・狭い」の表現は多くの場合3次元の量の「容積」について述べている。

(1-32)場合によっては賊と対峙して反撃に打って出てもいいのですが、**狭い部屋**の中での接近戦は思うような動きがとれませんし、最悪な事態(殺傷)もあり得ます。(LBs7_00043)

(1-33)「ごめんね…」「なんで？」「こんな**せまい部屋**でさ、すわっているのもつらいでしょ？」(PB53_00562)

(1-34)**広い部屋**に、何人もの子供たちが、毛布にくるまって、眠っている。(LBn9_00111)

(1-35)部屋の中に干すと、**狭い部屋**がいつも洗濯物だらけになりません？(OC08_04794)

(1-36)「ひとりだったら、この部屋で十分じゃない」「私ね、家具も何もおいてない**広い部屋**に住みたいの。(PB39_00213)

(1-37)部屋が6畳以下の場合は、テーブルとイスの生活はやめて、床に座るライフスタイルにするといい。目線が低くなるので、天井が高く感じられ、**狭い部屋**でも圧迫感を感じずにすむ。(PB15_00293)

(1-38)僕たちはろうそくの明かりに照らされた、話し声がこだましてくるほど**広い部屋**で食事を共にし、異様な話の一部を聞かされ、その続きを待っている。(LBi9_00023)

(1-39)一瞬だが、違和感を感じた。後ろ手で扉を閉じ、ロックしておいて中を見回す。**狭い部屋**の中では、バスルーム以外、人の隠れる場所はない。何者かが私を待ち受けているとは思えなかった。(LBb9_00080)

用例(1-32)～(1-34)は人間が実際に部屋の中で活動を行うときで、部屋を「人の活動の場所」として捉えている。また、部屋は「動作の結果の存在」として捉えることもでき、用例(1-35)(1-36)がこれに該当する。洗濯物、家具のような具体物が人によって部屋の中に置かれている。一方、用例(1-37)(1-38)のような「圧迫感」「話し声」などの形の掴みにくいものの存在について使われている例も少なくないようである。この点では「広い／狭い - 建物」と似ている。また、用例 (1-29)「大きい／小さい - 部屋」のように、「狭い部屋」も、用例(1-39)のような実際に目で対象を把握する例がある。

(1-40)突き当たりの壁が、鉄製の扉となっており、男が押すと扉は静かに開いて、**広い部屋**があらわれた。高級なソファや、大理石のサイドボードが置かれ、部屋の片側にはテレビモニターが十台ほど並んでいる。(LBs9_00051)

用例(1-40)は、「広い部屋があらわれた」という表現のやや特別な使い方の例である。この文では、男が扉を開けた瞬間、視野が突然広がって、スキャニングによる言語主体の心象の変化[22]について描写している。

なお、筆者は 3.1.3.1 で対象語のグループ分けに際して、「部屋」と「窓」はともに「穴(空隙)」という特徴が強いと述べた。用例(1-41)はそれを裏付ける例と言えよう。

(1-41)ちょうど少年達の通った道と、爺さんのいつも案内する道と同じだったと見え、**広い部屋**のような洞窟をすぎて、やがて、例の深い井戸のような穴のある道へ出ました。(PB39_00392)

---

22 この用例は 3.3 の「狭い道」が「広い道」に変わった時の「心象の変化」と似た用法だと考えられる。

以上から、「部屋」における、「大きい・小さい」と「広い・狭い」の用法の区別は、「大きい・小さい - 部屋」は主に内部の空間・構造などについて述べる使い方をしているのに対し、「広い・狭い - 部屋」は主に人が何らかの「動作を行う所」、また「関わる動作の結果の存在する所」として捉えていることにあるとまとめられる。

続いて、「窓」の用例を見てみよう。まず「大きい窓」の用例について述べる。

(1-42)雨は相変らず激しく降っている。やがて本堂とその豊かな**大きい窓**の列が現われる。僕は、ただこの教会の姿に見とれた。(LBn1_00034)

(1-43)夏の暑さに弱い人には不向きなのはもちろんのこと、壁面に対して南側の開口(窓)が多すぎる部屋、あるいは**大きい窓**がある部屋にも要注意。(http://www.homes.co.jp/edit/hikkoshigakuen/mikiwame/08/)

(1-44)「海に面した場所だから、どんな設計をしても良い眺望は得られるものだと当初は思っていた。でも、これだけ**大きい窓**を設けたからこそ眺望が確保できるのだと実感 ...(https://kenplatz.nikkeibp.co.jp/premium/dl.jsp?id=109967)

この 3 つの用例はいずれも、言語主体が「窓」の外から窓の全体的な形を把握している。用例(1-42)は、遠いところから窓の全体的な形を捉えている。用例(1-43)は、窓の全体的な形とともに、窓の採光面積の観点から「大きい窓」に注目している。用例(1-44)では「大きい窓」であるため、より良い眺望が得られることについて説明している。

続いて、「広い／狭い - 窓」の用例をあげる。

(1-45)**狭い窓**の視野から見える外の景色に集中しようとしてみた。気づまりで自分から言葉をかける気になれなかったのだ。(PB19_00079)

(1-46)先に述べたように片側廊下型の校舎であったときは、廊下側の高い位置に**狭い窓**があるという状況だったので、廊下に人がいても、座ったままではその姿を見ることはできませんでした。(PB23_00020)

用例(1-45)(1-46)においては、言語主体は心理的視線を窓の場までのばし、そこから

実際的視線を窓の反対側までのばすことによって、向こう側の景色を目に入れることができる。この場合の窓は見る動作を実現するために必要とされる場として考えることができる。

(1-47)腕時計を見ると、午後の四時を過ぎていた。**広い窓**から西陽が差してきたので、カーテンを少し閉めようと出窓に寄って見下ろした。(PB43_00222)

(1-48)「採光のためよ。ここは私達の教室、アトリエなの。だから、北向き側に**広い窓**を作って安定した光を得られるようにしているの」(PB39_00333)

この2つの用例は「広い窓」であるため、「狭い窓」の場合より光を多く部屋の中に取り込むことができると説明している。この2つの用例では、ともに実際の視線の走査によって窓の面積を把握している。

(1-49)痛む腕にかかる負担を減らそうと、果敢にも、レンガに足をたたきつけるようにして。ついに、どうにかこうにか体を引きずって**せまい窓**のすきまをぬけ、そのむこうの部屋にするりと入った。(PB49_00399)

用例(1-49)は人が窓を通り抜けて向こう側に行くことを描写している。窓の機能は採光や換気であるが、ここでは通路として、人が自分の体を基準に窓の面積あるいは幅を測っていると言える。

なお、「幅の - 広い／狭い - 窓」については、例はあまり見られない。「広い／狭い - 窓」という用例の文脈からは「窓の面積」について言うか、「窓の幅」について言うか、の境目は曖昧である。とちらかと言えば、面積について言うほうが多いようである。「幅」を明確にしたい場合には、「幅 - が／の - 広い／狭い」で表現するものと思われる。

「部屋」と「窓」は、「移動できず、基準面と密着している、かつ輪郭を持つ」という共通点を持ち、さらに「穴」というイメージが強いことから、同じグループにした。この2つの語の用法を1つの表にまとめる。

表 3-1-5　「部屋」「窓」における「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲(「場」)	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	「視点」の要素①②③の違いによる次元形容詞の使用
部屋	床と壁と天井によって囲まれた 3 次元の空間	対象の「場」の外	容積・面積；1 つのまとまったもの	大きい・小さい - 部屋
		対象の「場」の中	①面積・容積；動作を行う所 ②面積・容積；関わる動作の結果の存在する所	広い・狭い - 部屋
窓	窓、および窓を囲む壁	対象の「場」の外	全体的な形；1 つのまとまったもの	大きい窓
		対象の「場」の外／中	①面積・幅；窓の向こう側を見るために必要とされる所 ②面積・幅；1 つのまとまったもの	広い･狭い - 窓

3.1.3.2.4　「皿」「紙」「解答欄[23]」における「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

服部(1968)によれば、「紙」については「大きい・小さい - 紙」とは言えるが、「広い･狭い - 紙」とは言えないという。その理由は「広い･狭い - 部屋、公園」などは人間が入ることができるが、「紙」の中には入れないからだと述べている。つまり、「広い・狭い」は「人間のはいり得る物体・空間について」という意義特徴を含んでいると服部は主張している。

そこで、「皿」「紙」「解答欄」のような「人間が入ることができない」ものを対象にして、「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使用状況を見ていく。まず、「皿[24]」から述べていく。

---

23 用例分析では、「解答欄」と「回答欄」の両方を取り上げた。

24 BCCWJ における「(お)皿」と「紙」の用例は、「大きい・小さい～」はあるが、「広い・狭い～」は見られず、使い分けが認められない。しかし、Yahoo!を検索したところ、「広い・狭い～」の用例があることが分かった。そのため、Yahoo!から用例を収集することにした。

(1-50)とにかくうちの姑は小さく細かい意地悪が多いのです。洗い物を多くするためだけに、大きい皿をいっぱい使ってそのままにしていたり(毎日)さすがに先日、「楽しいですか？こういう意地悪」って言いました。(OC10_01308)

(1-51)小さいお皿／通販 ｜shopping.yahoo.co.jp こだわりの食器、カトラリーなら国内最大級のショッピングサイト！(shopping.yahoo.co.jp/)

この２つの用例とも、皿の全体的な形に注目している。用例(1-50)は洗い物としての皿の形に注目し、用例(1-51)は商品としての皿の形に注目している。(1-51)の場合、「お皿」をインターネットで販売しているので、皿の寸法が書かれていることが多い。

皿の上にものを載せる場合、つまり「関わる動作の結果の存在する所」を与える「皿」の用例の(1-52)～(1-55)を見ていく。

(1-52)食事(オムライスやパスタなど大きいお皿に盛られているもの)を食べる時に手をこぼしてもよいようにお皿のようにスプーンやフォークの下にして食べるのマナー違反でしょうか？
(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1239314042)

(1-53)お皿が大きければ大きいほど、料理との間隔をあけてあげれば、おしゃれな盛り合わせができますよ。 … 大きいお皿だからといって、大きいものを載せる必要はありません。大きいお皿をテーブルとしてイメージしてみましょう。
(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1441757609)

(1-54)なんか超大盛り状態に見えますが、何時もの器(食器さら)よりは、小さい皿ですからネ(OY15_02804)

(1 - 55)マカロニを電子レンジで調理する際は平たく広いお皿を選びましょう。 2 分茹でたらくっつきを防ぐためまぜましょう。
(http://recipe.gnavi.co.jp/movie/sweetkitchen/index1001.html)

日常でパスタのような洋食を盛り付けるとき、さまざまなサイズの皿のうち大きい皿を使う。パスタ、オムライスなどの料理は形がまとめにくいので、十分な広さを持っている器が必要されているからであろう。また、用例(1-53)の場合は寿司のような料理を

間隔あけ、美しく盛りつけしようとする時も広さのあるお皿を使用したいとする例である。

以上の用例によれば、「皿」については「大きい・小さい - 皿」という言い方が基本であるが、「広い皿」も使用できることが分かった。

続いて、「紙」の用例を見てみよう。

紙についてはBCCWJにおけるデータが少ないため、「大きい紙」と「広い紙」を検索サイトYahoo！で調べた。用例の調査方法としては、キーワード「大きい紙」と「広い紙」を入力し、2012年4月の10日、16日、30日の三日間に一日3回の検索を行った。その結果は、いずれの検索においても、「大きい紙」のヒット数は「広い紙」のヒット数の30倍ほどであった。

(1-56)ノート、メモ用紙、使用済み書類、封筒、そのほか名刺サイズより**大きい紙**×ビニール加工紙(紙のようにやぶれないもの)(OP13_00001)

(1-57)よく**大きい紙**についてのお問い合わせが多いです。紙のサイズですが大判ペーパーのサイズは四六判　1091×788mm　が基本になります。
(http://www.daimarufujii.co.jp/central/central-blog/kami/5284/)

(1-58)あの手紙を拾ったすぐ近くのほらあなの中にだよ。ウサギの好きなクズの葉っぱの形した**小さい紙**で、二まいあった。(PB49_00345)

(1-59)**大きい紙**に書くのは意外と難しかった。でも,とても楽しかったです。 ちょっと「う」「心」の部分が離れてしまってくやしいこともありました。
(http://www.miyoshi.ed.jp/archive/ikeichi/hp/kyoka/kokugo-kakizome.html)

用例(1-56)(1-57)は紙の「サイズ」、(1-58)は紙の「形」に注目している。つまり、この場合「紙」を「１つのまとまったもの」として捉えている。一方、用例(1-59)では、書くという動作によって字が紙に書かれ、その後、そのまま紙に残ることになる。つまり、紙は「関わる動作の結果の存在する所」と考えられる。

(1-60)ムカゴは、晩秋に採りますが、採取するような時期になると、触っただけでも落ちますので、下に、**広い紙**でも敷いて下に落ちたムカゴも取るようにしてくださ

い。

(http://www.alles.or.jp/~ohshin1/yamanoimo/yamanoimo.html)

西尾(1972)は、「『ひろい - せまい』が 2 次元の量、すなわち面積を表わすばあい、絶対的な大きさがある程度以上でないと使われない傾向が見られる。」(1972：77)、また、「『ひろい - せまい』は、単に客観的な量の大小を表わすだけではなく、『中に多くのものを容れうる(容れない)』『活動のための十分なゆとりがある(ない)』『らくに通過できる(できない)』などというような意味合いを含んでいることが多い。こういう要素をかりに『収容性』と呼ぶことにしよう」(1972：77)と述べている。用例(1-60)はこの「収容性」のことを示している。

(1-60)では、ムカゴが直接地面に落ちないように、植物の周りに紙を敷くことについて言っている。この場合の「広い紙」は「幅」ではなく「面積」を指していると考えられる。なぜならば、果実がついている枝が伸びる方向はどちらでもありうるからである。ムカゴが地面に落ちたとき、ある範囲をはみ出さない、十分な広さを持つ紙が必要であることを述べている。

次に、「解(回)答欄」の用例を見る。解答欄に文字を書くことと紙に文字を書くことは動作としては共通しているが、「解(回)答欄」は「紙」の一部である点が異なる。なお、解(回)答欄には直線で囲まれた形のあるものと、そのような枠のないものとがある。

(1-61)内部統制については,この<u>狭い回答欄</u>で簡単に書くことはできません。商事法務の省令解説や，３月に出そうと思っている本の中でふれたいと思います。Posted by 葉玉匡美 at 2006 年 01 月 21 日 02:22

(http://blog.livedoor.jp/masami_hadama/archives/50502034.html)

(1-62)ひどいものになると「東大の入試問題に対する解答のような 50～60 字の解答文を、なんとか引き伸ばして京大特有の<u>広い解答欄</u>に合わせるようにせよ」というような書き方をしているものある。

(http://tk.benesse.co.jp/tk_blog/2010/04/post_4.html)

「解(回)答欄」の用例は検索サイト Yahoo!で調査した。キーワード「広い／狭い - 解

(回)答欄」で検索したところ、条件に合う用例が一定数得られたが、「大きい／小さい - 解(回)答欄」はわずかであった。「大きい／小さい - 解(回)答欄」は、枠のない解(回)答欄について使われるのは不自然であり、決められた範囲に文章を書く場合は、「広い・狭い」のほうが使われやすいと考えられる。「解(回)答欄」は紙の一部分であり、その上に文字などを書くという点で、「紙」と異なる。

最後に、以上の「皿」「紙」「解(回)答欄」の内容を表にまとめてみよう。

表 3-1-6　「皿」「紙」「解(回)答欄」における「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲(「場」)	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	「視点」の要素①②③の違いによる次元形容詞の使用
皿	皿の 2 次元の平面の部分	対象の「場」の外	①全体的な形；1 つのまとまったもの ②面積；関わる動作の結果の存在する所	大きい・小さい - 皿
		対象の「場」の外	面積；関わる動作の結果の存在する所	広い皿
紙	紙の平面の部分	対象の「場」の外	①全体的な形；1 つのまとまったもの ②面積；関わる動作の結果の存在する所	大きい・小さい - 紙
		対象の「場」の中	面積；関わる動作の結果の存在する所	広い紙
解（回）答欄	解(回)答欄の全体	対象の「場」の中	面積；関わる動作の結果の存在する所	広い・狭い - 解(回)答欄

3.1.4　考察

3.1.4.1　実際的把握と概念的把握

現代日本語書き言葉均衡コーパスと Yahoo!で収集した用例の分析から、対象の把握の仕方は大きく 2 種類に分けられると考える。つまり、言語主体が対象の前にいて、実際に視線によって対象の次元的な量を把握する場合と、言語主体が対象の前にいるかどうかに関わらず持っている知識や経験などで対象の空間的な量について把握する場合である。これは、3.1 で取り上げた「大きい・小さい」「広い・狭い」だけでなく、「高い・低い」「太い・細い」でも同様である。

言語主体が対象の前におり、視覚によって対象を把握する場合を「実際的把握」と呼ぶ。 言語主体が対象の前にいるかどうかに関わらず、持っている知識や経験などで対象の次元的な量について把握する場合を「概念的把握」と呼ぶ。

たとえば、「大きい・小さい - 湖」における用例(1-1)(1-2)(1-3)は「概念的把握」の例であり、用例(1-4)(1-5)(1-6)は「実際的把握」の例である。「広い・狭い - 部屋」における用例(1-30)(1-31)は「概念的把握」の例であり、用例(1-32)(1-33)(1-34)などは「実際的把握」の例である。「大きい・小さい／広い - 紙」における(1-56)(1-57)(1-58)の 3 つの用例は「概念的把握」の例であり、用例(1-59)は「実際的把握」の例である。

また、「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使い分けから見ると、「大きい・小さい - 名詞」の用例、つまり、観察対象を 1 つのまとまりとして捉える場合は「概念的把握」が多く見られた。それに対して、「広い・狭い - 名詞」の用例、つまり観察対象を「動作を行う所」、「関わる動作の結果の存在する所」として捉える場合は「実際的把握」が多いという全体的な傾向が見られた。

3.1.4.2. まとめ

「湖」「建物」「部屋」「窓」「(お)皿」「紙」「解(回)答欄」の 7 語の用例を 3.1.3.2 で

分析した。そして、①言語主体の立脚点、②言語主体から見える対象の範囲(「場」)、③言語主体が注目する対象の部分と特性、およびこの 3 点の違いによる対象の全体的な捉え方を表 3-1-3、3-1-4、3-1-5、3-1-6 にまとめた。ここでは、視点の違いによる「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分けを表 3-1-7 でまとめる。

表の中で、①言語主体の立脚点は「『場』の外から／『場』の中から」に当たる。「場」は②の言語主体から見える対象の範囲を示す。「全体的な形」、「体積」、「動作を行う所」などは、③の言語主体が注目する対象の部分と特性を表している。

表 3-1-7　視点の違いによる「大きい・小さい」「広い・狭い」の使い分け

	大きい・小さい	広い・狭い
湖	「場」の外から、「湖」の全体的な形に注目し、1つのまとまったものとして把握する	①「場」の外から、「湖」の面積に注目し、1つのまとまった対象として把握する ②「場」の中から、「湖」の面積に注目し、動作を行う所として把握する
建物	「場」の外から、「建物」の全体的な形・体積・面積、容積に注目し、1つのまとまったもの	「場」の中から、「建物」の容積に注目し、関わる動作の結果の存在する所として把握する
部屋	「場」の外から、「部屋」の容積・面積に注目し、1つのまとまったものとして把握する	①「場」の中から、「部屋」の面積・容積に注目し、関わる動作の結果の存在する所として把握する ②「場」の中から、「部屋」の面積・容積に注目し、動作を行う所として把握する
窓	「場」の外から、「窓」の全体的な形に注目し、1つのまとまったものとして把握する	①「場」の外から、「窓」の面積・幅に注目し、心理的視線と実際の視線を伸ばしてその向こう側を見るために必要とされる所として把握する ②「場」の外から、「窓」の面積・幅に注目し、1つのまとまったものとして把握する
皿	①「場」の外から、「皿」の全体的な形に注目し、1つのまとまったものとして把握する	「場」の外から、「皿」の面積に注目し、関わる動作の結果の存在する所として把握する

	②「場」の中から、「皿」の面積に注目し、関わる動作の結果の存在する所として把握する	
紙	①「場」の外から、「紙」の全体的な形に注目し、１つのまとまったものとして把握する ②「場」の中から、「紙」の面積に注目し、関わる動作の結果の存在する所として把握する	「場」の外から、「紙」の面積に注目し、関わる動作の結果の存在する所として把握する
解（回）答欄		「場」の外から、「解(回)答欄」の面積に注目し、関わる動作の結果の存在する所として把握する

続いて、「視点」による分析内容に基づき、言語主体と対象との関係を、図で示す。

それぞれの図における記号とイラストの意味は次のとおりである。

大きい長方形の「S」は言語主体から見える対象の範囲(「場」)、小さい長方形の「0」は対象物、「目」のイラストは言語主体の立脚点を表す。点線の矢印は心理的視線、実線の矢印は実際の視線を表している。

「概念的把握」は１種の図で表す。7つの語例「湖、建物、部屋、窓、皿、紙、解(回)答欄」を1つ(図3-1-2)で示す。

「実際的把握」は3種の図で表す。6つの語例「湖、建物、部屋、皿、紙、解(回)答欄」を図3-1-3、4、5、6、7で示す。「窓」は用法が異なるため、ほかの語例と区別して図3-1-8、9、10の3つの図で示す。

A.　概念的把握

「概念的把握」における、「大きい・小さい」「広い・狭い」を１つの図で示す。

言語主体が対象の場の外にいて、心理的視線によって対象を１つのまとまったものとして把握する。(図 3-1-2)

用例：(1-1)(1-7)(1-13)(1-31)(1-57)など

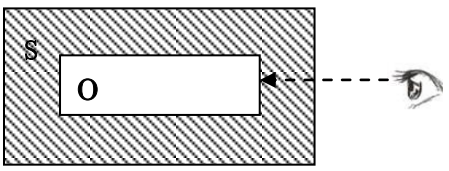


図 3-1-2

B.　実際的把握

B.-1　「大きい・小さい」について、2 つの図で示す。

B.-1-1　言語主体が対象の場の外にいて、実際の視線によって対象の全体的な形、容積、面積を把握する。A.の概念的把握と異なり、実際の視線を実線で表している。(図 3-1-3)

用例：(1-4)(1-11)(1-50)(1-58)など

B.-1-2　言語主体が対象の場の中にいて、何らかの動作をし、その場を関わる動作の結果の存在する所として把握する。(図 3-1-4)

用例：(1-52)(1-59)など

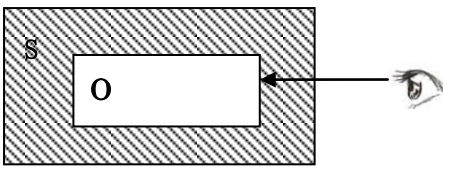


図 3-1-3

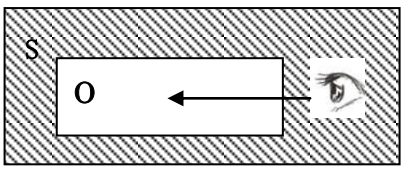


図 3-1-4

B.-2　「広い・狭い」について、3 つの図で示す。

B.-2-1　言語主体が対象の場の外にいて、実際の視線によって対象の全体的な形を把握する。(図 3-1-5)

用例：(1-9)

B.-2-2　言語主体が何らかの動作によって対象の場の中に入り、その場を動作を行う所として把握する。(図 3-1-6)

用例：(1-10)(1-32)(1-33)など

B.-2-3　言語主体が対象の場の中に入り、何らかの動作をし、その場を関わる動作の結果の存在する所として把握する。(図 3-1-7)

用例：(1-18)(1-35)など

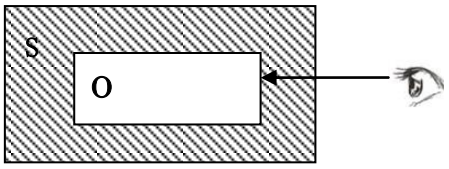


図 3-1-5(＝3-1-3)

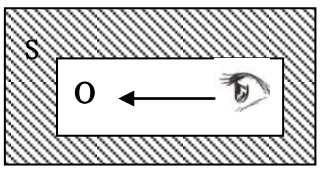


図 3-1-6

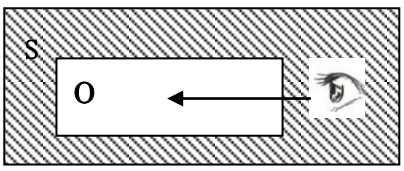


図 3-1-7(=3-1-4)

B.-3　「窓」には 3 つの場合がある。1 つ目は、B.-1-1 と同じ把握、2 つ目は B.-2-2 と同じ把握であり、3 つ目が「窓」特有の把握である。

B.-3-1　言語主体が「窓」の場の外にいて、実際の視線によって「窓」の「全体的な形」或いは「面積」を把握する。これは「大きい･小さい - 窓」と「広い・狭い - 窓」の両方の場合がある。(図 3-1-8)

用例：(1-42)(1-43)(1-44)(1-47)

B.-3-2　言語主体が「窓」の場の外にいて、心理的視線によって場の中に入り、心理的視線と実際の視線を伸ばして窓の向こう側を目に入れながら、窓を把握する。これは「広い・狭い - 窓」の場合である。(図 3-1-9)

用例：(1-45)(1-46)

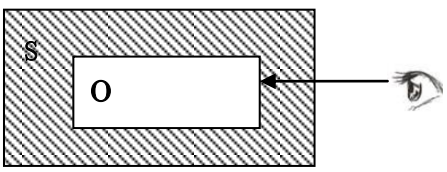


図 3-1-8 (=図 3-1-3)

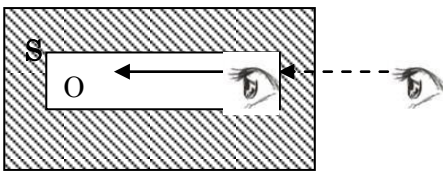


図 3-1-9

以上、本節では「大きい・小さい」と「広い・狭い」が同じ対象を修飾するとき、「湖」「建物」「部屋」「窓」「(お)皿」「紙」「解(回)答欄」の 7 つの語を通して、「視点」との関連性を検証した。3.1 の小節では次のような結論が得られた。

1) 言語主体が「視点」によって、観察対象を「１つのまとまったもの」として把握する場合は、「大きい・小さい」の方を使用する傾向が見られる。一方、言語主体が、「視点」によって、観察対象を「動作を行う所／関わる動作の結果の存在する所」として把握する場合は、「広い・狭い」の方を使用する傾向が見られる。

2) 言語主体が「視点」によって、「窓」を「向こう側を見るために必要とされる所」として把握する場合は、「広い・狭い」を使用する傾向が見られる。

3) 「広い・狭い」における用例のうち、たとえば「広い湖」のように、言語主体が対象を「動作を行う所」として把握する際、対象に対して主体的な解釈を行う場合がある。

3.2　「大きい・小さい」と「高い・低い」の使い分け

3.2.1　先行研究における「大きい・小さい」と「高い・低い」

この小節では「大きい・小さい」「高い・低い」に関する主要な先行研究として、西尾(1972)、国広(1968、1982)と久島(1993、2001)を取り上げる。

まず、「大きい・小さい」に関しては、国広(1982)によれば、「大きい・小さい」は次元形容詞の中の「高い・長い・太い・広い・厚い」より広範囲の形のものに用いられるという。国広は次のような例を挙げている。「頭・ボール」などの球形に近いものについては「大きい・小さい」しか使用できない。一方、「高い・低い」が用いられる「塔、建物」についても、「広い・狭い」が用いられる「部屋・庭」についても、「大きい・小さい」を用いることができる。つまり、「形態上の特徴に関する制約が最も少ない形容詞だということができる。(1982：166)」と主張している。さらに、「深い／浅い - 井戸」が「大きい／小さい - 井戸」に言い換えられない理由について、対象物の全体的な形が掴みにくいからであると述べている。国広は、「大きい・小さい」の意義素を「形のある物を全体として捕らえた時の空間占有量が大きい(小さい)」(1982：166)と定義している。[25]

一方、「高い・低い」における対象物の形態に関する制約について、西尾(1972)は、「『たかい』の主体になりうるものの形態は、山のような先細りの形であろうと、樹木のように根元より先のほうが広がっていようと、ビルディングなどのように下から上まで同じ幅であろうと、柱のような細い形であろうと自由であって、まったく制約がない」(1972:369)と述べている。また、西尾は、位置が固定していないものは固定しているものより、「高い」と言いにくいと指摘している。

久島(1993、2001)では、「大きい・小さい」は、《物》について言い、「高い・低い」は《場所》について言う語であると述べている。そして、「大きい山」と「高い山」の例を挙げて、2 つの用例の異なるところについて次のように述べている。

---

25 国広より先に服部(1968：104) は「オオキイ(チイサイ) を用いる場合は対象物の全体の形がみえているか、あるいは念頭に描かれていなければいけない、ということと関係があるであろう」と指摘している。

「『大きい(小さい)山』、『～池』と言った時には山・池が全体としてまとまりのある《物》として捉えられているが、『高い(低い)』『深い(浅い)』といった時の山・池は地面を基準にして、山の頂上や池の底に注意が向けられているので、地面と連続した《場所》として捉えられていることになろう。」

久島(2001：14)

以上、国広、西尾はそれぞれの研究の中で「大きい・小さい」、「高い・低い」はどのような対象について使用するのかについて述べている。それに対して、久島は《物》、《場所》の観点から「大きい・小さい」と「高い・低い」の区別を論じた。

3.2.2　「大きい・小さい」と「高い・低い」における視点

本稿では、1.2の視点と捉え方に関わる研究に基づき、「視点」を次の4つからなるものと考える。

① 言語主体の立脚点
② 言語主体から見える対象の範囲(「場」)
③ 言語主体が注目する対象の部分と特性
④ 言語主体が対象をどの程度主体的／客体的に解釈するか

このうち、本節で扱う「大きい・小さい」「高い・低い」については、以上のうち、①②③の3つに基づいて分析する。

① 言語主体の立脚点
② 言語主体から見える対象の範囲(「場」)
③ 言語主体が注目する対象の部分と特性

3.2.3　「大きい・小さい」と「高い・低い」の使用状況と使い分け

3.2.3.1　「大きい・小さい」「高い・低い」における集計結果

本節では、「大きい・小さい」「高い・低い」の両方が用いられる対象の中で「山」「木」「建物」「車」「人」「テーブル」「窓」の7つの語を取り上げて分析していく。

まず、BCCWJの用例数について見てみよう。

表3-2-1　「大きい・小さい」「高い・低い」が「山･木･建物･車･人･テーブル･窓」を修飾する用例数

	大きい～	小さい～	高い～	低い～	計
～山	2	4	176	40	222
～木	10	3	55	4	74
～建物	10	2	48	8	68
～車	16	11	22	5	55
～人	57	36	244	99	436
～テーブル	2	4	1	15	22
～窓	2	5[26]	14	2	23

集計結果から、以下の3点が指摘できる。

①「大きい・小さい」と「高い・低い」の2対の次元形容詞の使用数に大きな差のある語があることが分かった。たとえば、「大きい・小さい - 山」の用例数が6であるのに対して、「高い・低い - 山」は216となっている。「木」や「建物」も同じような傾向が見られる。「山、木、建物」においては、「大きい・小さい」より「高い・低い」の使用頻度が高いということができる。

②「テーブル」を除く6つの対象語においては、「低い」より「高い」とより多く共起している。たとえば、「高い木」が55なのに対して、「低い木」が4となっている。

③「高い／低い」の場合、「背が - 高い／低い - 人」、「車高が - 高い／低い - 車」などの

[26] 3.1と同じような理由(建造物の窓と異なる意味での使用)で、BCCWJの「小さい窓」を分析対象から外した。

ような「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」という形で多数現れていることが分かった。

次に、データの扱いと集計方法について3点補足する。

①「高い」については、「山」の例において合成語「小高い」という例が見られた。「小高い」の用例は 30 あり、「小高い」は「高い」と同じように次元的な量を表すので、本稿では分析対象に含めた。

②対象名詞が次元的な量以外の意味で使用されている用例は、原則として扱っていない。たとえば、「高い／低い - 名詞」では、価格、困難度などの抽象的な意味で使用されている例が見られた。本研究の分析対象ではないが、「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」との関連がある場合は触れることにする。

③「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」については、次元的な量に関しては、数に含めた。

続いて、この7つの対象について、「大きい・小さい」「高い・低い」に関連する特徴の異同を整理すると、次のようになる。

表 3-2-2　7 つの分析対象「大きい・小さい」「高い・低い」に関連する特徴の異同

	移動できない	3 次元的な量を持つ	上端に顕著な面を持つ
山	○	○	×
木	○	○	×
建物	○	○	×
車	×	○	×
人	×	○	×
テーブル	×	○	○
窓	○	×	×

個別の用例の分析は、上記の特徴の異同、分析上の便宜、及び結論とのつながりの3点を考慮し、「山・木・建物」、「車・人・テーブル」、「窓」の3つのグループに分けて行う。

第一は、「山」「木」「建物」である。これらは基準面に密着しており、移動できない。西尾(1972)では、「山」「木」「建物」をもっとも「高い」が使われやすい対象であると述べている。

> 「山・建物・樹木のようなものは、位置が固定しており、全体の形も不動的(樹木は風でかなり動きうるものもあるが)である。そして、垂直上方へのかなりの延長を持っている。このようなものは、「たかい」といわれる条件が、もっともよくそなわっている。」
>
> 西尾(1972：369)

第二は、「車」「人」「テーブル」である。これらは、独立的な形を持ち移動できるという点で、「山、木、建物」と区別される。また、「山・木・建物・車・人・テーブル」は、3次元的な量(「体積」あるいは「容積」)を持つ。「テーブル」は顕著な2次元的な量もあわせ持つ。

第三は、「窓」である。「窓」は2次元的な量(「面積」)を持つが、「テーブル」の面が水平であるのに対し、窓の面には、そのような制限はない。したがって、「高い・低い - 窓」がどのような基準でどのような意味に使用されるかを分析することには意義があると考える。

3.2.3.2　「大きい・小さい」「高い・低い」における用例の個別分析

3.2.3.2.1　「山」「木」「建物」における「大きい・小さい」「高い・低い」の使い分け

BCCWJ と Yahoo!の検索結果において、「大きい・小さい - 山」の用例はわかずしか見られなかった。用例(2-1)(2-2)はそのうちの 2 つである。前述のように、服部(1968)も国広(1982)も対象物の全体的な形が掴みにくい場合、「大きい・小さい」は使いにくいと指摘している。したがって、「山」を観察対象とする時、「山」を遠望する場合以外は、「大きい･小さい - 山」は使いにくいと考えられる。

(2-1)マウナロアという名前は、ハワイ語で「長い山」という意味があります。その名の通り、マウナロアはとても横に幅が長く、その体積は約 75,000 km^{3}にもなります。これは、世界で一番体積が**大きい山**になります。
(http://hawaiilo.com/big-island/maunaloa/)

(2-2)夏実が答えかねているうちに、皆を乗せた顕現ウグイスは、都のはずれの**小さい山**へ、ゆるやかに降下し始めた。近づいてくる山腹には、新緑と山桜に見え隠れして、ひと筋の石段が頂上に通じている。(LB19_00202)

用例(2-1)は概念的把握であり、「大きい」ではなく「体積が大きい」という形式で使用された例である。「体積は約 75,000 km^3 」で山の大きさを説明しており、「横に幅が長く」という表現で山の形状を捉えている。この場合では、「大きい／小さい - 山」が使われやすいように思われる。

一方、用例(2-2)は、言語主体が遠いところから視線の走査で山の輪郭を把握して、「小さい山」だと判断している。

次の用例(2-3)～(2-10)は「高い／低い - 山」の用例である。

(2-3)タオスはニューメキシコ最北部に存在するプエブロで、州内で最も標高の**高い山**マウント・ウィーラーを聖地としている。(LBm2_00056)

(2-4)高尾山は標高五百九十九ｍと六百ｍにも満たない**低い山**ですが、ミシュランの三つ星の山に選定されている二つの山の一つです．もう一つは富士山ですね。(OY15_16181)

(2-5)ということは灌漑が発達しているからではなく、夏の間も雪が残るような**高い山**が近くにたくさんあるということなのだ。その雪が溶けて流れて、夏の間中畑をうるおす。(LBc1_00016)

(2-6)森林をみると，四川省と湖北省の境界付近で，中程度の高度の山や**低い山**の分布する地域において森林が分布している。(PB12_00140)

用例(2-3)(2-4)ともに「標高」という専門用語が使用されており、「山」を垂直上方への延長(一次元)から把握している。また、用例(2-4)では、「標高五百九十九ｍ」という具体的な数字が述べられていることから、人が実際に山の前にいるかどうかに関わらず、

持っている知識・経験から山の高低に対する基準値が形成され、当該の山の高さを判断している。用例(2-5)は「夏の間も雪が残る」という知識を通して「山」の高さを判断している。一方、用例(2-6)は「中程度の高度の山」、「低い山」という表現から、山の高さに注目していることが分かる。

次の用例(2-7)(2-8)は、いずれも遠方から言語主体が視線の走査で直接山を観察する場合の「低い／高い - 山」の用例である。用例(2-9)では、雲が高い部分を隠していくため、山の全体的な形を直接目でとらえることはできないが、心理的視線を山頂へと伸ばし走らせ、山の高さを判断していると考えられる。

用例 (2 - 10)は「小高い山」の用例である。

(2-7)お碗を伏せたような**低い山**が連なっている。奥羽の山々とはずいぶん違うものだな、とゴーグルの男はペダルを踏みながら周囲の山を眺めた。(PB49_00364)

(2-8)ぼくのいたその村に滝が一つありました。あまり大きくはなかったが、白い泡を立てながら騒々しく、**高い山**の上から細い糸のようになって、ほとんど垂直に落ちてくるのです。(LBi9_00055)

(2-9)視界はいいが、雲が垂れ込めて**高い山**は雲の中って感じですね！どんどん高い部分が隠されて行ってます。(OY13_00933)

(2-10)バスが旭川駅の北に位置する近文台の西端旭岡を登っていくと，まもなく前方に二つの頂が連なる**小高い山**が見えてくる。右の高いほうが通称嵐山，左が近文山である。(LBi2_00024)

以上、「大きい・小さい - 山」と「高い・低い - 山」の用例である。

「木」は「山」と同じく、「高い・低い」の用いられる典型的な例として挙げられる。山・木・建物のようなものは基準面にしっかり接触してその上にほぼ垂直に位置する。特に「木」は上方(延直線の上方)への延長という「方向性」を持っているため、言語主体の視線の移動は基本的に地面から上方へという方向で行われやすい。したがって、このような観察方法の場合では、木のすぐそばからではその全体像を掴むのは困難だと思われる。このため、「大きい・小さい」より「高い・低い」を「木」に用いる例が多いの

は自然であろう。

(2-11)【世界一大きい木】≪シャーマン将軍の木 General Sherman Tree≫
米国はカリフォルニア州セコイア国立公園内に立つジャイアントセコイアの巨木(その個体名)。スギ科-セコイア亜科。体積 約 1,486m³, 直径 11.1m, 周囲 31.3m, 高さ 約 84m。(Wikipedia)

(2-12)大きい木になれるのは、そういう血をうけ継いだものだけであって、灌木や草本はいつまでたっても灌木であり、草本である。(LBi4_00038)

(2-13)割り箸は小さいから、端材でも、間引きした細い木でも、角材をとった残りのところからも作ることができる。割り箸のように小さい木が利用できる用途がさらに広がってくると、日本の森林は生き返る。(OY14_19056)

用例(2-11)の、「世界一大きい木」における「大きい」は、直径、体積など 3 次元的な量を全て含めて「大きい」という意味を表している。また、用例(2-12)では、形の小さい木(灌木や草本)との対比で「大きい木」と言っている。用例(2-13)では、森林の資源を守るため、「割り箸」を作る時「小さい木[27]」が利用できるということを説明している。この 3 つの用例はいずれも「概念的把握」である。

「高い・低い - 木」における「概念的把握」の用例として次の 2 つを挙げる。用例(2-14)は具体的な数字で地面から上方への垂直距離の大きいことを表している。用例(2-15)は、オリーブの木の形が「太く低い」だと説明している。

(2-14)【世界一高い木】≪ハイペリオン(ヒュペリオン) Hyperion Tree≫
米国はカリフォルニア州レッドウッド海岸に立つセコイアの巨木(その個体名)で、現存する木として世界一の高木。スギ科-セコイア亜科。その高さは約 115.55m。(http://tozanabo.com/archives/28747209.html)

(2-15)オリーブ林の太く低い木の下にはいった。なんとかつまずかないですむぐらいの星明かりはある。(PB19_00028)

---

27 ここでの「木」は地面に生えている木ではなく、「木材」「木片」という異なる意味である。

用例(2-16)(2-17)では、言語主体が移動中に、実際の視線の走査で複数の木の高さを把握している。また、(2-17)の「背の高い樹」のように「高い」の前に「背の」が付いた表現も見られる。

(2-16)行く手に、**高い木**が一列に並んで生えているのが見えた。その木の幹のまわりに、クモの巣のようなもようがついていた。(LBbn_00026)

(2-17)道の両側には途切れることなく、**背の高い樹**が植えられている。落葉した木々の向こうには、広大な大地が続いている。(PM41_00588)

続いて、「建物」について述べていく。「建物」は人工物で、自然物よりきちんとまとまった形をしている。以下、建物を対象とした「大きい・小さい」と「高い・低い」の使用状況を見てみよう。

(2-18)街は夕ぐれてゆき、家いえや店みせには明かりがともりました。街の中心のほうに、ぽっこりと**大きい建物**がみえるのは、お城でしょうか。(PB49_00318)

(2-19)午後一時十分。北々東の空に姿を見せたヘリ一機が、やがて、Mi-8C と判るくらいまで近付くと、飛行場の中で最も**大きい建物**の前に着地した。(LBg9_00229)

(2-20)白壁づくりの豪壮なもので、どうかすると二棟が並びたち、母屋を圧倒している。…これと対になる位置に、九尺二間の**小さい建物**がある。こちらはミソ専用で、一年ミソからはじまって、三年ミソ、五年物、十年物、二十年物。(LBs9_00167)

「建物」は一般に外から観察することが多い。用例(2-18)(2-19)は言語主体の視野の中にある「大きい建物」について述べており、ともに外から建物の体積に注目して観察している。一方、用例 (2-20)では「九尺二間」という「容積」を示す表現があることから、「小さい建物」の場合、内部空間について描写することも可能である。また、3.1.3.2.2では、「小さい建物」は「容積」のほか、敷地(用例(1-17))について述べることもできると分かった。

「高い・低い - 建物」の用例について見てみよう。

まず、知識・経験などで建物の形状を判断する場合についての用例を検討する(「概念

的把握」)。用例(2-21)の「建物」はゴシック建築であるため、先の尖ったアーチを連想しやすい。用例(2-22)は「高い建物」が「テレビ塔」と並べて書かれているので、高層の建物を思い描きやすいと思われる。

(2-21)私自身、ヨーロッパにいってゴシック建築の**高い建物**をみるたびに、これはアーチを積み上げて作ったんだなとフォレットさんの『大聖堂』を思い出します。(LBs9_00099)

(2-22)大小の飛行機やヘリコプターが飛びかい、電線が縦横に張りめぐらされ、テレビ塔や**高い建物**が乱立し、おまけに都市の騒音がたえず下からわき上がっていて、注意力をにぶらせる。(LBbn_00026)

(2-23)まわりに、**高い建物**もなく、冬には富士山がじつによくみえました。関西から引っこしてきたとき、一番うれしかったのは、富士山がみえることだったほどです。(LBfn_00015)

(2-24)その塔の間には、不透明なガラスのような青い物質で作られた、船窓のような小さい円形の窓をもった、低い、一階建てのビルが建っていた。その**低い建物**は、明らかに下僕の人間の住居だった。(PB19_00310)

地面から上方への垂直な長さに注目する時には「高い建物」のほうが使われやすい。用例(2-23)では、言語主体が自宅のまわりの建物の高さに注目して、「高い建物」がないので富士山の見やすいことを述べている。用例(2-24)は、観察対象としての建物(一階建てのビル)を隣にある塔と比べて高さが低いことについて述べている。

(2-25)「あおり」のテクニック　**高い建物**を撮影するときにレンズを上向きにしたり、逆に下のものを見下ろしたりすると、通常は遠近感(パース)がきつくついて撮影されます。(PB10_00109)

(2-26)ドームのまわりの時計台などが、目と同じレベルの高さにあるのが見え、**低い建物**も眼下に見える。(LBn9_00063)

(2-25)(2-26)は、視線の出発点の方向を変えるという用例である。用例 (2-25)では、言語主体は「高い建物」をレンズの中に収めるため、相対的にかなり低いところから写

真を撮ると言っている。また、人が高いところから下を眺めると、自分がいるところの高さより低い位置にある建物を「低い建物」と呼ぶことになる。用例(2-26)はこのことについて述べている。

建物は人によって造られるものなので、多様な形をしている。ここで同じ平面上に同じ階数を持つ建物の場合を考えてみよう。図 3-2-1 のように B の横幅を A の横幅の 3 倍あると仮定する。

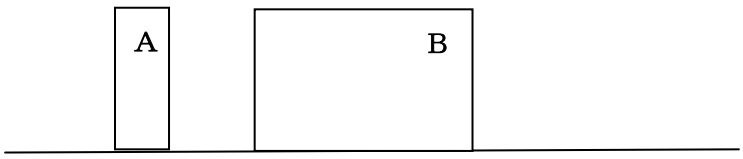


図 3-2-1

両方の建物が他の一般的な建物より大である場合、建物 A を「高い建物」、B を「大きい建物」と呼ぶことが多いであろう。「高い」と「大きい」の使用上の区別は「横幅」、つまり縦と横の比率が関係すると考えられる。同じ高さを持つ建物の場合は、横幅が大きければ大きいほど「大きい建物」と言いやすくなると考えられる。

以上で述べた内容を、表 3-2-3 にまとめる。

表 3-2-3　「山」「木」「建物」における「大きい・小さい」「高い・低い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲(「場」)	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	「視点」の要素①②③の違いによる次元形容詞の使用
山	山が占めている 3 次元の空間	対象の「場」の外	全体的な形・体積；1 つのまとまったもの	大きい･小さい - 山
			高さ；1 つのまとまったもの	高い･低い - 山
木	木が占めている 3 次元の空間	対象の「場」の外	全体的な形・体積；1 つのまとまったもの	大きい･小さい - 木
			高さ；1 つのまとまったもの	高い・低い - 木

建物	建物が占めている3次元の空間	対象の「場」の外	全体的な形・体積；1つのまとまったもの	大きい建物
		対象の「場」の外	容積・面積；1つのまとまったもの	小さい建物
		対象の「場」の外	高さ；1つのまとまったもの	高い・低い - 建物

3.2.3.2.2 「車」「人」「テーブル」における「大きい・小さい」「高い・低い」の使い分け

この小節では移動できるもの「車」、「人」、「テーブル」を対象に、「大きい・小さい」と「高い・低い」の使用状況について見ていく。

まず、「車」について述べる。

車が商品として販売される場合、「長さ・幅・高さ」の3つの量で車の規格が示される。また、乗用車は人が乗るためのものなので、「何人乗れるか」という基準で空間的な量が示される。

車の大きさに対する観察方法は2つに分けられる。1つは車の外から観察する方法(ここでは「体積」に注目している)であり、もう1つは車の中から観察する方法(ここでは「容積」に注目している)である。具体的な用例を次に挙げる。

(2-27)車を後ろから見ると、こんな感じです。垢抜けない、モッサリとしたスタイリング。富士重工のレガシーと同じような車格ですが、より車高が高く、<u>大きい車</u>の印象を受けます。(OY15_11495)

(2-28)日本車で1番<u>大きい車</u>はどのﾒｰｶｰのどんな車ですか？トヨタ　メガクルーザーが一番大きいと思います。定員6名、ハマーH1くらい大きいです。(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1413195694)

(2-29)家内と二人だけで乗るのでそれほど<u>大きい車</u>でなくてもいいのですが、リッターカーでは、若干豪華さに欠けるかな、という感じです。(OC06_13198)

用例(2-27)では、言語主体は実際に車の外から観察を行って、対象の車に関する「富士重工のレガシーと同じような車格」という情報を聞き手に伝えている。一方、用例(2-28)(2-29)は「概念的把握」である。用例(2-28)では、言語主体は日本で一番大きい車(メガクルーザー)はハマーH１ぐらい大きいと説明している。(2-29)では「家内と二人だけで乗る」という表現から、言語主体が実際に車の前にいるかどうかに関わらず、車の容積について述べていることが分かる。

(2-30)龍は、今朝雪をみたので、危ないから**大きい車**で行きました。(OC10_01686)

(2-31)なぜ小さい車だといじめられて、大きな車だとなんとも無いんでしょうか？うちには六百六十ＣＣと四千三百ＣＣの大小の車がありまして、**小さい車**に乗ってると、けして遅いわけじゃないのに、煽られたり、合流とかで入れてくれなかった、高速なんかじゃ「お前は１番左車線でも走ってろ」みたいな感じで(OC06_00824)

用例(2-30)(2-31)における「大きい／小さい - 車」の用法では、1 つの表現に 2 つの意味を込めていると思われる。用例(2-30)では、空間的量の大きい車が同時に安定性や安全性も高いことを示している。(2-31)では、車の大きさは、エンジンや性能、価格などとの関係があるとを考え、「小さい車」だから格下だと思われることについて説明している。

(2-32)しかし、塩釜亘理線と交差する青沼橋は、路面が低くなっており、特に**車高の低い車**はガードレールで視界が遮られ見通しが悪く危険であるため、かさ上げ等の対策を要望します。(OP08_00004)

(2-33)北海道(結構田舎で冬の雪はものすごい)で生活するとなれば、どんな車がおすすめですか？中古で、予算は八十万ぐらいで、国産、４駆、**車高が高い車**がいいです。 (PM11_00034)

(2-34)わたしは車を降りた。後ろ手にタクシーのドアを閉めたとき、例のヘッドライトが通過していった。つやのある黒っぽい色をした、**車体の低い車**だった。その車のテールライトを眼で追った。一ブロックほど行ったところで、その車は左折し五十九丁目の通りに入った。(LBi9_00183)

用例のうち(2-32)(2-33)は「概念的把握」であり、(2-34)は視線で対象の車を観察して、「実際的把握」である。車に関する「高い・低い」の使用について、西尾(1972)、小出(2000)は、基準面にしっかり接触している、位置が固定しているという条件が必要であるため、「高い・低い-車」という表現は不自然だと指摘している。また、BCCWJ また Yahoo!での用例から見れば、「高い車」は車の車高が高いという次元的な意味を表すことはなく、車の価格という抽象的な意味を表すのが一般的である。一方、車の特定の部分(長さ、幅、高さ)の次元的な量を表現しようとする場合、用例(2-32)～(2-34)のように「名詞 - が／の - 高い(低い) - 車」の形で、その部分を明示して焦点を当てた言い方をすることになる。

続いて、「人」について見てみよう。

「人」は睡眠をとる時以外は、立ったり座ったり屈んだりといろいろな姿勢を取るが、この中で、頭を上にした直立姿勢は活動時のもっとも重要な姿勢の 1 つであり、人が体を伸ばした状態での頭から足の裏までの隔たりを「身長」と呼ぶ。人の身長は、「山」「木」などのように「地面から上方への垂直的な延長」に限定されるものではなく、したがって、「高い山」とは言っても「高い人」とは一般に言わない。代わりに「背 - が／の - 高い／低い - 人」のように「背」に焦点を当てて「高い・低い」を付けた形式で使用される。

(2-35)ブロンドの髪にやせた身体、とがった角の多い顔をしていた。私は母を**背の高い人**だと思っていたが、実際には五フィート四インチしかなかった。(LBn9_00114)

(2-36) 小西　たとえば目の錯覚を利用したりする。**背が小さい人**は、トップス(上半身)とボトムス(下半身)に強い色のコントラストをもってこない。(PM31_00253)

(2-37)例えば、スポーツチームを観察すると、**背が高い人**がキャプテンになるケースはいたって少ない。(PM51_00157)

一方、人の身長に関しては、「背 - が／の - 高い・低い」以外に「大きい・小さい」も使用される。次に 4 つの用例を挙げる。これらの用例では「大きい・小さい」を 1 次元的な量を表す「背 - が／の - 高い・低い」と言い換えても、事実関係は変わらない。人

の体に言及する 3 次元的な量(「大きい／小さい」)は、場合によって 1 次元的な量(「高さ」)を表すことがある。用例(2-38)(2-39)はこのことを示している。人の体は上への伸びが際立つ形をしているが、人は身長が大きければ、それだけ腰や肩幅などの 2、3 次元的な量も大きいのが普通である。また、成長に伴い、縦へも横へも大きくなるので「大きくなる」という言い方がされる。

(2-38)日本人で**大きい人**といえば、昔バスケットボールの住友金属の選手だった岡山恭崇さん(233 cm)が有名だ。(http://otassya21.shiga-saku.net/)

(2-39)「いつ？」「きのうの夕がた。女の人-」「えっ、女！？　どんな人？」「せのたかい人と、**小さい人**、ふたり」「なん年生ぐらい？」「わかんない」(LBjn_00017)

なお、人は車と違い、「中」に入って観察することはできないため、「大きい／小さい - 人」も、「背 - の／が - 高い／低い人」も、外観の観察によって行われるのが普通である。(2-41)の発話部分は、関取が、取組の相手が自分よりも体が大きいと捉えた表現である。

(2-40)彼の体系がウエストが 100ｃｍくらいあって、体格がかなりよく、上着も 3L くらいを選ばないと着れません。〈中略〉でも、私としてはもう少しオシャレしてほしいので、どこか**大きい人**でもオシャレに着れるような洋服のブランドやネットで買えるサイトを知ってる方がいましたら教えて下さい。
(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q144228409)

(2-41)相手の腰に食らいつく形で組むと、左下手をどんどん深く差し込んで、琴ノ若の巨体を腰から崩した。「**大きい人**を相手に中に入ったら、あの攻めしかない」そうで、いつも見ている元横綱、若乃花の相撲のビデオが、とっさに浮かんだという。(PN1m_00081)

以上の考察から、次元的な量について言う時、「山・木・建物」は「大きい・小さい」と「高い・低い」の両方が用いられるが、典型的には「高い・低い」が用いられる対象である。「車・人」は「大きい・小さい」と「高い・低い」の両方の用例がデータとして現れるが、「高い・低い」を用いる場合は、「～が／の - 高い／低い」という形でその高

さを表現するのが一般的である。これについては 3.2.4 でも述べる。

続いて、「テーブル」について述べる。

テーブルは立体的な形を持つ一方、人がその平面の上で作業などをするのが一般的である。そのため、テーブルを観察する場合、注目する部分はテーブルを設置したときに占める空間の体積とテーブルの面の部分の面積の 2 つと考えられる。

(2-42)作業がしやすくてお勧めなのは、小さいテーブルをはさんで向かい合わせに座るポジションです。(LBq4_00017)

(2-43)重厚な木製のドアを押して中に入ると、細長い空間が広がっていた、両脇に研究員用の個室が並ぶだけで、やたらと目立つのが部屋の真ん中に置かれたどっしりとした大きいテーブルだ。(PB30_00065)

(2-44)礼拝室の奥には、すでに白い清潔なベッドがととのえられていた。男は、小さいテーブルの上に燭台を置いた。(LBkn_00002)

(2-45)昨晩は当店一番大きいテーブルが狭くなる程の方々が。ありがとうございます。(https://www.facebook.com/nekonez/posts/525472620900789)

用例(2-42)は「概念的把握」で、「小さいテーブル」が作業に適していることを説明している。用例(2-43)(2-44)はともに実際的把握であり、2 例ともテーブルの体積・面積の両方に注目している。2 つの用例の文脈から「体積」と「面積」の注目の優先順位が読み取れる。(2-43)の「どっしりした大きいテーブル」から体積(主)、面積(従)に注目しているのに対して、(2-44)の「小さいテーブルの上に…置いた」から「面積」(主)、体積(従)に注目しているのがわかる。

一方、Yahoo!から(2-45)のような興味深い用例があった。(2-45)では「大きいテーブル」と表現している一方、「大きいテーブルが狭くなる程」という文脈から、「大きい」は面積のことを指していることがわかる。

続いて、「低いテーブル」[28]について見てみよう。

[28] 「高いテーブル」の用例は 1 例だけで「背の高いテーブル」という形で表現をして、ここで取り上げないことにした。

(2-46)お子さんなら子供用の椅子(豆椅子)や座布団・タオルで高さは調節できますし、部屋も広く使えて子供の視線に合わせた生活になりいいと思います。実際長男の時は**低いテーブル**で両方経験してみたら小さいうちで可能なら、またあまり年をあけずにご兄弟を望まれるならテーブルの方がいいと思いますよ。(OC10_01545)

(2-47)「…でも、そうですね、ほとんど変わってませんよ、多分。老朽化した部分に手を加えたくらいですから」　二階は、居心地の良さそうなソファと椅子が点在し、**低いテーブル**とクッションが備えてある。(PB39_00041)

(2-48)桂木圭太はその奥の、事務室とベッドルームを兼ねた部屋にいた。やはり花を飾った**低いテーブル**を前に、ブルーグレーのソファベッドに腰かけて、ぼんやりと煙草を吹かしていた(LBn9_00050)

用例(2-46)は、言語主体が子供の身長に合わせてテーブルの高さに注目する「概念的把握」の用例である。用例(2-47)(2-48)のどちらも「実際的把握」であり、実際の視線によってテーブルの高さを把握している。

(2-49)リビングルームのドアを開けると、猫が二匹飛び出してきた。二匹とも、のらくら顔をしている。大きなソファと**背の低いテーブル**。(LBf9_00069)

(2-50)「いいえ。めずらしいわよ。まったくないわけじゃないけど」ソファーに座っていたアリアが肩をすくめる。ソファー前の**足の低いテーブル**には、ロアン周辺の地図が乗っていた。二人で鐘の所在を推理していたのだろう。(LBr9_0024)

「～が/の - 低い - テーブル」の形式については、上記のような用例が見られる。用例(2-49)では、実際の視線でテーブルの高さを把握している。(2-50)では、地図がテーブルの上に置いてあるので、「関わる動作の結果の存在する所」として把握している。この2 つの用例においては、「背の低いテーブル」「足の低いテーブル」を「低いテーブル」と言い換えることができ、また文意も変わらない。一方、「車」や「人」は一般的に「車高が／の～」、「背が／の～」を省略することができず、この点で「テーブル」と「車」「人」の用法は異なっている。表 3.2.2 でまとめたように、「車」「人」と違って「テーブル」は「上端に顕著な面を持つ」ためと考えられる。

最後に、以上の分析を次の表でまとめる。

表 3-2-4　「車」「人」「テーブル」における「大きい・小さい」「高い・低い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲（「場」）	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	「視点」の要素①②③の違いによる次元形容詞の使用
車	車が占めている 3 次元の空間	対象の「場」の外／中	体積・容積；1 つのまとまったもの	大きい・小さい - 車
			高さ；1 つのまとまったもの	～の高い・低い - 車
人	人が占めている 3 次元の空間	対象の「場」の外	体積・高さ；1 つのまとまったもの	大きい・小さい - 人
			高さ；1 つのまとまったもの	～の高い・低い - 人
テーブル	テーブルが占めている 3 次元の空間	対象の「場」の外	体積・面積；1 つのまとまったもの	大きい・小さい - テーブル
			高さ；1 つのまとまったもの	低いテーブル・～の低いテーブル

3.2.3.2.3　「窓」における「大きい・小さい」「高い・低い」の使い分け

『明鏡国語辞典』では、「窓」を部屋の「採光・通風・展望などのために壁面や屋根にあけた穴」と記述している。「窓」は「建物」「テーブル」などの人工物が独立しているのと異なり、ものの一部として存在している。「窓」については、3.1 で「大きい窓」と「広い・狭い窓」の使用状況について述べたが、本節では 3.1 の分析に基づき、「高い・低い - 窓」についてもさらに用例を分析していく。

(2-51)やがて本堂とその豊かな<u>大きい窓</u>の列が現われる。僕は、ただこの教会の姿に見とれた。道路に面した横手の入口から入ると、内部は、高い窓と規則正しく円柱が立ち並ぶ、方形のバジリカ式会堂であった。(LBn1_00034)

(2-52)せっかくなので普通の窓では無く、<u>大きい窓</u>(開けると続きのテラスと一体のス

ペースに使えるようなカフェのような窓)にしたら、実際寒いですか？

(http://oshiete.goo.ne.jp/qa/4830687.html)

(2-53)東南の日当たりバッチリの角地なのに、今流行りの**小さい窓**ばかり付けていた。なんか暗いし、風通しも悪かったよ。[29]

(http://www.e-kodate.com/bbs/thread/318336/)

用例(2-51)の「大きい窓」では、言語主体が外から「窓」の全体的な形を把握している。用例(2-52)(2-53)では、窓の全体的な形と窓の採光・通風の両方に注目している。

国広(1982)は「『タカイ窓』の場合はふた通りの意味がある。ひとつは〈窓全体の位置が高い〉ことを指し、もうひとつは〈窓そのものの上下の枠の距離がおおきく、かつ上の枠は観察者の手が届かないくらい上の位置にある〉ということである」、また「『タカイ』が用いられる時はつねに注意の焦点と基準との上下の距りが問題にされているのであるが、前者の意味では窓全体が焦点の中に収まっているのであり、後者の意味では上の枠のみが焦点となっているのである」(1982：158)と述べている。

(2-54)「窓にカーテンは？」　「あった。あ、そうだ、アトリエ内には**高い窓**のカーテンを開閉するための長い棒があったらしい。(LBe9_00071)

(2-55)**高い窓**から見事な山の借景。旅の疲れがすっと抜けて行く(図 3-2-2)

図 3-2-2

(2-56)共有地の向こうの様子を、幼児学級の受け持ちの小柄なミス・フォガーティは爪立ちして教室のゴシック式の**高い窓**からかろうじて見て取ることができた。子どもたちが興味つきない外界に気を取られないようにとの配慮から、ヴィクトリア

29　BCCWJ における「小さい窓」の 5 つの用例はすべて抽象的な用法であるため、この用例は Yahoo! から拾った。

時代の建築家は窓をこのように高くしつらえたのだろう。(PB19_00526)

用例(2-54)は、窓全体の「位置」が高いため、カーテンを開閉するために長い棒が必要とされることについて述べている。一方、用例(2-55)の「高い窓」は、「上の枠」が高い位置にある窓のことを指している。この場合、窓ガラスがある程度上方まで伸びる必要がある。用例(2-56)は「概念的把握」である。「上の枠」が高い窓と全体の「位置」が高い窓の両方を示す可能性がある。文中の「爪立ちして」「かろうじて見て取ることができた」との表現から、「窓の下の枠」が高い位置にある、つまり全体の位置が高い窓であると考えられる。

表 3-2-5　「窓」における「大きい・小さい」「高い・低い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲(「場」)	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	「視点」の要素①②③の違いによる次元形容詞の使用
窓	窓の枠に囲まれた部分	対象の「場」の外	全体的な形；1つのまとまったもの	大きい／小さい - 窓
			①高さ(下端から上端までの距離)；1つのまとまったもの、窓の向こう側(の上方)を見るために必要とされる所 ②高さ(上下の観点から見た窓の位置)；1つのまとまったもの	高い／低い - 窓

3.2.4　「形容詞 - 名詞」と「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」について

3.2.3.2.2 では「背が - 高い／低い - 人」、「車高が - 高い／低い - 車」といった形式の用例についても取り上げ分析した。本節では「車」と「人」について、「形容詞 - 名詞」と「名詞 - ガ・ノ - 形容詞 - 名詞」の使い分けについて述べる。記述の便宜上、「形容詞 - 名詞」を「形式 A」、「名詞 - ガ・ノ - 形容詞 - 名詞」を「形式 B」と一部略称で呼ぶこととする。

まず、「高い／低い」が具体的意味、つまり次元的な意味で使用されているか、抽象的な意味で使用されているかを、BCCWJ におけるデータで見てみる。数字は該当用例数を表す。

表3-2-6　「形容詞 - 名詞」、「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」の用例の数

形容詞と名詞	「形容詞 - 名詞」(形式A)		「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」(形式B)	
	次元的な意味	抽象的な意味	次元的な意味	抽象的な意味
「高い・低い」と「車」	1	5	6	14
「高い・低い」と「人」	5	19	53	250

表 3-2-6 からわかるように、「車」「人」の 2 つの名詞の場合、「形式 A」、「形式 B」のいずれも、次元的な意味を表す用例数より抽象的な意味を表す用例数が多くなっている。

人の身長(次元的な意味)に言及する場合は、形式 B の「背 - ガ／ノ - 高い - 人」が一般的であるが、「高い／低い - 人」が次元的な意味を表す用例が 5 件見られる。しかしこの中には、文脈上の理由から「ガ／ノ」格が省略されたと考えられるものが含まれる。用例(2-57)では、「高い人と低い人」「やせた人とふとった人」がともに「コンビ」として挙げられており、用例(2-58)では、文の前半に「背が高い」とありさらに数字との比較として「低い人」と述べている。このような場合は形式 A でも次元的な意味を表すが、特別な文脈がなければ形式 A の場合、抽象的な意味で使用されると言える。

(2-57)途中でひっくり返ったりしないで早くゴールへ着いた組が勝ち。コツ見るほうもたのしむのなら，**高い人**と**低い人**，やせた人とふとった人，というようにコンビを組ませると苦心しますのでゆかいです。(LB17_00022)

(2-58)最初は中国の人は背が高いのかと思っていたら、工場に行くと百五十八センチの私と同じぐらいや、もっと**低い人**も多い。(LBk3_00041)

次に、表 3-2-6 における抽象的な意味について実際にどのような意味かを記述する。「車」の形式 A における 5 件は「価格」などの意味を表しており、形式 B における 15

件は「安全性」「重心」などを表している。「人」の形式Aは、「血圧」「体温」などの意味を表しており、形式Bは「リスク」「プライド」などの意味を表している。

「高い」の次元的な意味について、森田(1989)は「その物の属性として上下に大きな落差を持っていること」(1989：630)とし、『明鏡国語辞典』では「基準点から上方に存在するものまでの距離が大きい。また、あるものが基準点より上方に位置している。」としている。また、西尾(1972)は位置が固定していないものは、固定しているものより、「高い」と言いにくいと指摘している。つまり、「固定している」、「基準点がある」、「上下に一定的落差を持つ」という3つの条件が揃わないと「高い・低い」とは言いにくいこととなる。したがって、「車」のように移動するものや「人」のようにいろいろな姿勢をとるものは、「高い」を使用する典型的例とはならずあまり言わないと考えられる。

一方、「形式B」の場合、「名詞1 - ガ・ノ - 形容詞＋名詞2[30]」の名詞1の後に「ガ」あるいは「ノ」をおくことで、名詞1に焦点に当てることになる。それによって、単独ではやや使いにくい「高い・低い」が安定した表現として使用されると考えられる。

3.2.5　考察

「山」「木」「建物」「車」「人」「テーブル」「窓」の7つの語の用例を3.2.3.2で分析した。そして、①言語主体の立脚点、②言語主体から見える対象の範囲(「場」)、③言語主体が注目する対象の部分と特性、およびこの3点の違いによる対象の全体的な捉え方を表3-2-3、3-2-4、3-2-5にまとめた。ここでは、視点の違いによる「大きい・小さい」「高い・低い」の使い分けを表3-2-7でまとめる。「車」「人」における「高い・低い」の用例は「名詞 - ガ／ノ - 形容詞 - 名詞」という形が主であるが、対照のため括弧書きで表に含めた。

表の中で、①言語主体の立脚点は「『場』の外から／『場』の中から」に当たる。「場」は②の言語主体から見える対象の範囲を示す。「全体的な形」、「体積」などは、③の言語主体が注目する対象の部分と特性を表す。

30「が/の」の前を名詞1、形容詞の後ろを名詞2と呼ぶ。

表 3-2-7　視点の違いによる「大きい・小さい」「高い・低い」の使い分け

	大きい・小さい	高い・低い
山	「場」の外から、「山」の全体的な形・体積に注目し、１つのまとまったものとして把握する	「場」の外から、「山」の下端から上端までの距離(高さ)に注目し、１つのまとまったものとして把握する
木	「場」の外から、「木」の全体的な形・体積に注目し、１つのまとまったものとして把握する	「場」の外から、「木」の下端から上端までの距離(高さ)に注目し、１つのまとまったものとして把握する
建物	「場」の外から、「建物」の全体的な形・体積・容積・面積に注目し、１つのまとまったものとして把握する	「場」の外から、「建物」の下端から上端までの距離(高さ)に注目し、１つのまとまったものとして把握する
車	「場」の外/中から、「車」の体積・容積に注目し、１つのまとまったものとして把握する	(「場」の外から、「車」の下端から上端までの距離(高さ)に注目し、１つのまとまったものとして把握する)
人	「場」の外から、「人」の体積・高さに注目し一つのまとまった対象として把握する	(「場」の外から、「人」の下端から上端までの距離(高さ)に注目し、１つのまとまったものとして把握する)
テーブル	「場」の外から、「テーブル」の体積・面積に注目し、１つのまとまったものとして把握する	「場」の外から、「テーブル」の下端から上端までの距離(高さ)に注目し、１つのまとまったものとして把握する
窓	「場」の外から、「窓」の全体的な形に注目し、１つのまとまったものとして把握する	①「場」の外から、「窓」の下端から上端までの距離に注目し、１つのまとまったものとして把握する。 ②「場」の外から、「窓」の高さ(上下の観点から見た窓の位置)に注目し、１つのまとまったものとして把握する

		③「場」の外から、「窓」の向こう側(の上方)を見るために必要とされる所として把握する

続いて、「視点」による分析内容に基づき、言語主体と対象との関係を、図で示す。

それぞれの図における記号とイラストの意味は次のとおりである。

大きい長方形の「S」は言語主体から見える対象の範囲(「場」)、小さい長方形の「0」は対象物、「目」のイラストは言語主体の立脚点を表す。点線の矢印は心理的視線、実線の矢印は実際の視線を表している。

「概念的把握」においては、1種の図で表す、7つの語例「山、木、建物、車、人、テーブル、窓」を1つ(図3-2-3)で示す。

「実際的把握」においては、3種の図で表す、6つの語例「山、木、建物、車、人、テーブル、窓」を図3-2-4、5、6で示す。「窓」は用法が異なるため、ほかの語例と区別して図3-2-7、8の2つの図で示す。

A. 概念的把握

「概念的把握」における、「大きい・小さい」「高い・低い」を 1 つの図で示す。

言語主体が対象の場の外にいて、心理的視線によって対象を 1 つのまとまったものとして把握する。(図 3-2-3)

用例：(2-1)(2-14)(2-25)(2-28)(2-42)(2-56)など

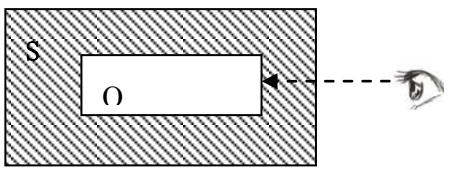


図 3-2-3

B. 実際的把握

B.-1　「大きい・小さい」を 1 つの図で示す。

言語主体が対象の場の外にいて、実際の視線によって対象の全体的な形を把握する。A.の概念的把握と異なり、実際の視線を実線で表している。(図 3-2-4)

用例：(2-2)(2-18)(2-39)(2-43)など

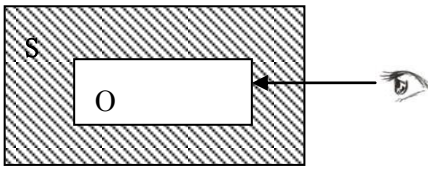


図3-2-4

B.-2　「高い・低い」を 1 つの図で示す。

言語主体が対象の場の外にいて、実際の視線によって対象の下端から上端までの距離(高さ)を把握する。(図3-2-5)

用例：(2-9)(2-16)(2-23)(2-34)など

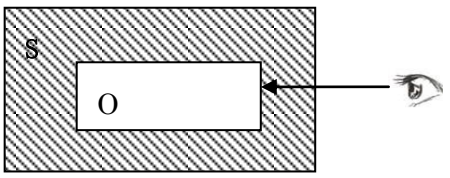


図3-2-5(=図3-2-4)

B.-3　「窓」には 2 つの場合がある。1 つ目は B.-1 と同じ把握、2 つ目は「窓」特有の把握である。

B.-3-1　言語主体が「窓」の場の外にいて、実際の視線によって「窓」の「全体的な形」、「位置の高さ」を把握する。これは「大きい・小さい - 窓」「高い・低い - 窓」の両方の場合である。(図 3-2-6)

用例：(2-51)(2-52)(2-53)(2-54)

B.-3-2　言語主体が「窓」の場の外にいて、心理的視線によって場の中に入り、心理的視線と実際の視線を伸ばし窓の向こう側（の上方）を目に入れながら、窓の高さを把握する。これは「高い窓」の場合である。(図 3-2-7)

用例：(2-55)

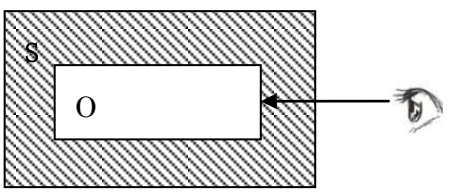


図3-2-6(=図3-2-4)

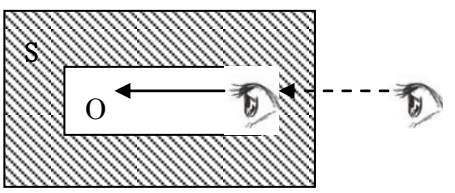


図3-2-7

以上、本節では「大きい・小さい」と「高い・低い」が同じ対象を修飾する場合について、「山」「木」「建物」「車」「人」「テーブル」「窓」の 7 つの語の用例を通して、「視点」との関連性について検証した。3.2 の小節では次のような結論が得られた。

1)言語主体が「視点」によって、観察対象を「１つのまとまったもの」として把握する場合は、「大きい・小さい」を使用する傾向が見られる。一方、言語主体が「視点」によって、観察対象を「１つのまとまったもの」として把握し、かつ「対象の下端から上端までの距離」／「上下の観点から見た対象の位置」に注目する場合は「高い・低い」を使用する傾向が見られる。

2)言語主体が「視点」によって、「窓」を「向こう側(の上方)を見るために必要とされる所」として把握する場合は、「高い」を使用する傾向が見られる。

3)「固定している」「基準点がある」の 2 点が揃わないことで「高い・低い」と言いにくい場合は、焦点を当てる部分の語を「ガ/ノ」の前において「名詞 - ガ／ノ - 高い/低い - 名詞」という形を使用する傾向が見られる。

3.3　「広い・狭い」と「太い・細い」の使い分け

3.3.1　先行研究における「広い・狭い」と「太い・細い」

本節では「広い・狭い」「太い・細い」に関する主要な先行研究として、服部(1968)、国広(1968、1982)、西尾(1972)の三人の説を取り上げる。

「広い・狭い」と「太い・細い」における次元的な量については、西尾(1972)と国広(1968)の研究が挙げられる。西尾(1972)によれば、「広い・狭い」は 2 次元の量を表すことが多いが、1 次元の量も 3 次元の量も表すことができるという。一方、「太い・細い」に用いられる対象は「細長いもの」と「長い形をした 2 次元のもの」[31]の 2 種類の対象があるという。「細長いもの」については「細長い物体の，最大の延長をもつ辺に対して直角の断面の，さしわたし，すなわち 1 次元の量が大きいか小さいかを表わすものとみることができる」(1972：228)とし、「断面の面積すなわち 2 次元の量を表わすともいえることになる」(1972：228)と述べている。それに対して、「長い形をした 2 次元のもの」については、「『ふとい』『ほそい』は，長い形をした 2 次元のものの幅の大小，すなわち 1 次元の量を表すこともある」(1972：228)と述べている。

また、国広(1968)では「太い・細い」の意義素について、「『太い、細い』は長いものについて、その中心線と直角の方向の距離が標準値より大きい(小さい)ことを表し、そのものが立体的であるか平面的であるかは無関係である。」と述べている。

このように、「広い･狭い」と「太い･細い」は、長い形をした 2 次元の面的な広がりを持つものを対象とする時、ともに使われる場合がある。先行研究においては、「道」という例が挙げられる。

「広い・狭い - 道」について、服部(1968)は「日本語でも、ヒロイミチ、ヒロイタニ、ヒロイカワ(河)などというが、この場合でも日本語では、幅よりもひろがりが問題になっているのではなかろうか。すなわち、道や谷や河は、縦には長いものだから、ある 1 点に立って見るときには、長さは問題とならず、幅の広狭が問題となるわけだが、その場合でも一方の岸(または端)までの広がりを問題にして、ヒロイとかセマイとか言うよ

[31] 「細長いもの」は棒のようなものを、「長い形をした 2 次元のもの」は道のようなものを指している。

うに思う。」(1968：107)と述べている。

一方、西尾(1972)では、「広い道」においては、「広い」が 1 次元の量(道の幅)、と 2 次元の量(道の面積)のどちらを示すかについて、はっきりしない場合もあるとし、「広い道」は本来なら、道幅の広さ(1 次元の量)を表すが、道幅が広くなれば当然面積も広くなるので 2 次元の量の表現である可能性もあると述べている。つまり、「広い・狭い - 道」における注目する次元は、服部の場合は 2 次元を表す「広がり」が主であるとするのに対し、西尾の場合は 1 次元を表す「幅」が主であるとしている点がやや異なると言える。

本節では、「広い・狭い」「太い・細い」の使い分けを明らかにするため、先行研究で挙げている「道」「橋」「川」「谷」の 4 つの語を対象としてどのような次元的な量―「広がり」、「幅」、「面積」―を表しているかに注目する。また、「視点」の観点から実際の用例を通して使用状況を分析していく。

3.3.2　「広い・狭い」と「太い・細い」における視点

本節では、1.2 及び 3.3.2 の視点と捉え方に関わる研究に基づき、「視点」を次の 4 つからなるものと考える。

① 言語主体の立脚点
② 言語主体から見える対象の範囲(「場」)
③ 言語主体が注目する対象の部分と特性
④ 言語主体が対象をどの程度主体的／客体的に解釈するか

このうち、本節で扱う「広い・狭い」「太い・細い」については、以上の 4 つすべてに基づいて分析する。

①言語主体の立脚点
②言語主体から見える対象の範囲(「場」)
③言語主体が注目する対象の部分と特性
④言語主体が対象をどの程度主体的／客体的に解釈するか

3.3.3　主体性、およびトラジェクターとランドマーク

3.1、3.2 で取り上げた「大きい・小さい」「高い・低い」の用例を見ると、言語主体が対象を客観的に解釈している場合が多い。一方、本節における、「広い・狭い」「太い・細い」の組において、「広い・狭い」は「幅」「面積」「容積」の 3 つの概念に関わっており、実際の用例では、言語主体が観察対象の中に入って参与者となって観察対象を把握する例が少なくない。

本節で取り上げる「広い・狭い」「太い・細い」における「道」「橋」などの対象においては、重要な機能の 1 つとして、人などがその上を移動することがある。そして、言語主体が、動作主体としてあるいは心理的に対象の「場」の中に入って、主体的に対象を把握する場合が見られる。つまり、「主体性(subjectivity)」の概念が、より深く関わることが考えられる。そこで、本節では、視点の①②③に加えて、主体性(④)、トラジェクター、ランドマークの考え方に着目し、「広い・狭い」「太い・細い」の使い分けを検討することとする。

用例分析の前に、本節の議論に関わる「主体性」についてまとめる。まず、認知言語学で言う「主体」と主体による捉え方について、深田・仲本(2008)は、次のように解説している。

> 主体とは、言語化の主体のことであり、その言語表現が表す事態を解釈する概念化者である。
>
> 主体は、自らが主体的に選択したパースペクティヴから、同じく主体的に選択した＜存在＞に注目して事態を解釈し、それを言葉に反映させていく。
>
> 深田・仲本(2008：170)

そして、事態解釈は心的スキャニングに基づくとし、次のように述べている。「すべての言語表現の背後には、ある立脚点からその言語表現によって表される事態を「心的にスキャニングし」(mentally scan)、それに基づいてその事態を解釈していく概念化者がいる。この「心的スキャニング(mental scanning)」の方向は、具体的な移動物が存在する場合には、基本的に、その移動物の移動の方向に一致する。しかし、具体的な移動物

が存在しない場合には、概念化者によって自由に選択される。」(深田・仲本 2008：44 - 45)　1.2.1 で、パースペクティヴには、「視線の向き、立脚点、方向性、ある存在をどの程度主体的／客体的に解釈するか」の 4 つの要素があるというラネカーの説を述べた。「主体性」は、心的スキャニングの方向性と密接に関わり、「ある〈存在〉がどの程度主体的／客体的に解釈されるか」であるとまとめられる。

さらに、「主体性」は、その度合が高い場合もあれば度合が低い場合もある。これについて、深田・仲本(2008)は次のように述べている。(傍点は筆者による。)

> 「言語主体が概念化の対象である事態の中に入り込み、その中でその事態を主体的・主観的に解釈していくというパースペクティヴを取る場合には、それを反映した言語表現は、主体性の度合が非常に高くなる。一方、主体が概念化の対象である事態を外から客観的に解釈していくというパースペクティヴを取る場合には、それを反映した言語表現は、主体性の低い(言い換えれば、客体性の高い)言語表現となる。」
>
> 深田・仲本(2008：172)

次に、トラジェクター(trajector, TR)とランドマーク(landmark, LM)について述べる。一般に、プロファイルされた存在のうち、相対的により際立って認知される対象をトラジェクター、これを背景的に位置づける対象をランドマークとして区別する。別の言い方をすれば、ランドマークはトラジェクターの参照点(基準点)として働く。

次の図 3-3-1 は、この関係を示したものである。

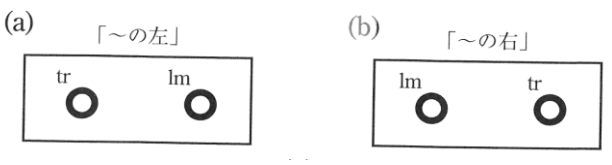


図 3-3-1

(a)「～の左」の場合には、左側の丸がトラジェクター、右側の丸がランドマークである。右側の丸は左側の丸を位置づけるための参照点として働いている。逆に、(b)「～の右」の場合には、右側の丸がトラジェクター、左側の丸がランドマークであり、左側の丸は右側の丸を位置づけるための参照点として働いている。(山梨 2000：24)

Langacker(1987)によると、単文構造においては、主語で表された対象を、トラジェク

ターと呼ぶ。トラジェクターを位置づけるための参照点として働いているのは、第二番の図つまりランドマークである。たとえば、「The book is on the table」における、ゲシュタルト心理学の「図」(book,本)と「地」(table,テーブル)という用語に対し、Langacker(1987)は「テーブル」は「地」というより、二番目に注目している「図」であると指摘している。この場合の「図」を「トラジェクター」、「地」を「ランドマーク」と呼んでいる。つまり、「本」はトラジェクターであり、「テーブル」はランドマークである。また、空間前置詞「on」は、注目している「本」と、その本の背景となる「テーブル」との位置関係、すなわち、トラジェクターとランドマークの関係を表している。

なお、深田・仲本(2008)おいても、「トラジェクターとランドマークは、形容詞や動詞、等といった＜関係＞を表す言語表現において関連付けられる 2 つの参与者である。トラジェクターはこの関係においてより顕著な参与者、ランドマークは、トラジェクターの次に顕著な参与者である。両者は、図／地の関係から言えばいずれも図であり、その違いは顕著さの違いだけである。」(2008：41 - 42)と述べている。

本節で取り上げる「道」「橋」などの用例において、観察対象及び二番目の観察対象(観察対象以外の参与者)を「トラジェクター」と「ランドマーク」で区別することにした。言語主体から見える対象の範囲は、「道」の場合には、「道」と「道」を成立させている背景を含む全体と考えられるからである。

3.3.4　「広い・狭い」と「太い・細い」の使用状況と使い分け

3.3.4.1　「広い・狭い」と「太い・細い」における集計結果

本節では、「広い・狭い」「太い・細い」の両方が用いられる対象の中で「道」「橋」「川」「谷」の4つについて用例をあげて分析していく。

まず、BCCWJの用例数について見てみよう。

表3-3-1　「広い・狭い」「太い・細い」が「道･橋･川･谷」を修飾する用例の数

	広い～	狭い～	太い～	細い～	計
～道	50	98	1	123	272
～橋	0	1	0	4	5
～川	9	3	0	3	14
～谷	7	7	0	0	14

集計結果から、以下の 2 点が指摘できる。

①「広い・狭い」と「太い・細い」の 2 対の次元形容詞の使用傾向に差のある語があることが分かる。「広い・狭い - 川」の用例は 12 で、「太い・細い - 川」の用例は 3 である。また、「広い・狭い - 谷」は 14 あるのに対して、「太い・細い - 谷」は 0 となっている。「川」「谷」については、「太い・細い」より「広い・狭い」の方が多く現れている。

②1 対の次元形容詞の中で、「量的に大きい方」と「量的に小さい方」のどちらが被修飾語と多く共起するかについての傾向がうかがえる。たとえば、「道」においては、「広い・狭い」では、「広い道」が 50、「狭い道」が 98 とともに多くの用例が見られたのに対し、「太い・細い」では、「太い道」が 1、「細い道」が 123 と明らかに用例数が非対称になっている。これについて、筆者は「太い」と「細い」の「非対称性」と呼ぶことにし、3.3.5 で取り上げる。なお、「太い～」は「道・橋・川・谷」4 語の用例の合計も 1 である。

次に、データの扱いと集計方法について2点補足する。

①多義語については、次元的な量以外の意味で使用されている用例は個別の分析対象から外した。たとえば、「道」を「人生の道」に喩えるような場合である。

②BCCWJ においては、「広い橋」「太い橋」「太い川」「太い・細い - 谷」の用例数がゼロであるが、検索サイト Yahoo!では用例が見られる。そこで、Yahoo!の用例を個別分析で取り上げる。

続いて、4 つの分析対象について特徴の異同を整理する。

第一に、「道」「橋」「川」である。「道」「橋」「川」は人などが通行するためのもので、川は渡るものでもある。このため、次元的な量を検討する際に、「道」「橋」「川」の平面の部分に関する次元的な量が問題となる。

第二に、「谷」である。注目する部分について、「道」「橋」などが平面的な部分に関する次元的な量であるのに対して、「谷」の場合はその立体的な形に関わった次元的な量でなければならない。

個別の用例の分析は、上記の特徴の異同、分析上の便宜、及び結論とのつながりの 3 点を考慮し、「道・橋・川」、「谷」に分けて分析していく。

3.3.4.2　「広い・狭い」「太い・細い」における用例の個別分析

3.3.4.2.1　「道」「橋」「川」における「広い・狭い」「太い・細い」の使い分け

まず、「広い・狭い - 道」の用例について述べる。

(3-1)わたしたちは岳温泉でたっぷり楽しんだので、素通りする。もっとも、小屋の近くに源泉があって、岳温泉の湯もそこからひいているらしい。そのまま、なだらかな**広い道**を歩けば、やがて金明水の水場。そのさきが勢至平で、だらだらと下る道を小一時間も進めば、鳥川ぞいの自然歩道に出て奥岳のバス停にいたる。(PB52_00145)

(3-2)「傘かしげ」っていいましたっけ？**狭い道**でお互い傘をさしてすれ違うとき、相手に傘がぶつからないように斜めにして行き違うことです。私は、誰に教わらなくても自然に身につくことと思っていたのですが。(OC11_01080)

用例(3-1)の場合、言語主体は物理的に移動しながら観察することによって、道の幅及びその上方の空間の 3 次元的な広がりを把握していくと見られる。用例(3-2)では、言語主体は頭の中で過去の経験を思い出し、道に沿って移動しており、雨の日に傘を差している人が占める空間について説明している。

なお、用例(3-1)の実際の物理的移動に対し、用例(3-2)は概念的把握であり、心理的視線の走査で観察する例である。

(3-3)放り込むと走り出した。 空港からは熱帯らしくヤシの並木にはさまれた**ひろい道**がつづいている。(LBb9_00060)

(3-4)正興がぶらぶら歩いていくと、**せまい道**をはさんで家が立ち並び、花のように美しい暖簾を出したり、軒には家の名をしるした提灯をかけつらねている。(LBp2_00046)

「道」を分析対象として扱う場合、道を成立させている背景を含むものの全体を取るのが適切だと考える。なぜならば、道はその背景で輪郭が決まるからである。したがって、本研究では、「道」における「場」を「『道』＋『道を成立させる背景』」とする。たとえば、用例(3-3)の「ヤシの並木にはさまれたひろい道」のように、道の「場」は「道」と「ヤシの並木」からなる。 用例(3-3)(3-4)では、「～にはさまれた道」「道をはさんで」と表現されていることから、プロファイルされた対象(道)をトラジェクター、道を成立させる背景をランドマーク[32]として考えることができる。用例(3-3)では、道が T、ヤシの並木が L である。道(T)はヤシの並木(L)に挟まれている。用例(3-4)では、道が T、家が L である。道(T)はたくさんの家(L)が並んでいる住宅街の中を通り抜けるという様子を描写している。つまりここでは、ヤシの並み木と立ち並ぶ家が背景の役割であるのに対し、道が前景になっている。さらに、木と家の背景の役割によって、道はより際立っている。

(3-5)やがて小路を右へ曲る。やや**広い道**に出たが、そこはさらに冷えびえと静かだった。(LBf9_00215)

(3-6)ごつごつした田舎道を抜ければ、思わず整った**広い道**が目の前に現れます。これは歩きやすいよい道であることだ。
(http://www2.biglobe.ne.jp/~endoy/SANTOU60.html)

1.2.2 で述べたように、本稿では、1 つの対象を認知する際の観察に対して「視線の走

[32] 以下、トラジェクターを「T」と、ランドマークを「L」と略称する。

査」という表現を用い、対象の輪郭を観察する際に「輪郭に視線を走らせる」という表現を用いる。一方、1 つの対象と別の対象を比較するという認知プロセスに「スキャニング」という用語を用いる。

したがって、用例(3-5)(3-6)は「スキャニング」であり、幅が急に変わる道にそって言語主体が移動するときの心象の変化を描写している。対象(道の全体)をTとLに分け、言語主体が現在いる道を L、その先で幅が変わる道を T として捉えている。言語主体は現在の道(L)の中にいて、物理的な移動をしながら、現在いる道(L)を比較基準として、その先の道(T)の幅の広さの変化する様相を把握している。

以上、「言語主体の観察方法」と「言語主体の立脚点」の 2 点から分析を行った。次に、「主体性の度合」から見てみよう。用例(3-3)～(3-6)のいずれも言語主体が意識をするかしないかに関わらず、言語主体自身がその対象に関わった形で主体的に解釈する方法を取っている。言語主体が実際に道を歩く(3-1)、あるいはヤシの並木にはさまれた道を走る(3-3)ことについて、言語主体は自分を対象の中に置いて、「広い」という形容詞の客体的な意味を希薄化し、代わりに、自分自身の解釈を顕在化させることによって対象を把握している。属性形容詞は、一般的には客体的に取ることが多い。しかし、「広い道」「狭い道」の用例では、人が実際に道に沿って移動しながら観察することが多く、主体的な解釈を行っていると考えられる。

服部 (1968)では、「太い線」と「太い棒」の両用法は「太い」の同一の意義素によるものであると述べている。つまり、長いものにおける「太い・細い」は、そのものの中心線に対して直角の「差し渡し」を表している。国広(1968)はこの説を参考にして、「細い道」と「狭い道」の意味の差について次のように述べている。「細い道」は「道が長く伸びていることが念頭にある。『狭い道』と比較するとき、客観的描写という含みを持つことが感じられる」とし、「狭い道」は「道が長く伸びている点は念頭から薄らいでおり、人間が通るには窮屈だという主観的な表現である」(1968：25)と述べている。では、「太い・細い - 道」の用例を見いく。

次の用例(3-7)～(3-9)は「太い・細い」における最もよく見られる用法である。

(3-7)眺めると泉は大小の砂山に、ぐるりと取り囲まれており、一番高い砂山は数十メートルある。その山頂に向かって**細い道**が続いている(PB12_00343)

(3-8)2011 年 5 月 18 日 〈中略〉フェリーを降りた真正面の**太い道**が，ずーっと北に向かっています。 (http://ta-ro.at.webry.info/201105/article_18.html)

(3-9)道路の地図をご覧ください。市内、いや全国の地図を見ますと**太い道**や**細い道**、或いは曲がりくねった道と皆さんの身体(生活)を支える血管のような働きをしているようには見えないでしょうか？
(http://www.city.takarazuka.hyogo.jp/card/01080202000000-20090615-113542.html)

西尾(1972：228)では、「『太い』『細い』は、長い形をした 2 次元のものの幅の大小、すなわち 1 次元の量を表すこともある」としている。また、国広(1968)では「太い・細い」の意義素について、「『太い、細い』は長いものについて、その中心線と直角の方向の距離が標準値より大きい(小さい)ことを表し、そのものが立体的であるか平面的であるかは無関係である。」と述べている。すなわち、3.3.1 で述べたように「道」においては、「広い・狭い」も「太い・細い」も 1 次元の量を表すことができると思われる。

用例(3-7)では、山を遠望しているため、道の全体像をとることができる。「細い道」が「山」の斜面にあることについて説明している。用例(3-8)では、言語主体がフェリーから降りた真正面にある道は北に向かっている「太い道」だと言っている。用例(3-9)は実際の道ではなく、地図を見て、「太い道」と「細い道」を使用している。この場合について、国広(1982)では、「平面上に描かれた線について「フトイ(ホソイ)」を用いることができる。この説明は必ずしも明確でないが、ひとつの解決法は、これは棒などの場合の立体性が捨象され、目に映る形のみを問題にするという形で線を見ているのだ、というのである。」(1982：165)と述べている。

以上の 3 つの用例ではいずれも、言語主体は解釈対象を自分と完全に切り離し、客体化している。

また、次の 2 つの用例のように、言語主体が別のところから、視線によって前方の道の状況を把握する場合もある。

(3-10)ぼくも別に急いであとを追う必要も感じないままあまり商店の並んでいない通りを歩いていって、その道よりまた少し**細い道**とぶつかったところで自転車にまたがったまま立っていた不動産屋に追いついて、そこで今度は不動産屋は右に折れ

た先を指して、「この道を道なりに行くと、(LBj9_00208)

(3-11)森が切れると急に畑が広がり、のどかな田園風景に変わった。途中の**細い道**に十台ほど乗用車が停まっていた。バスは通ることができない。運転手がクラクションを鳴らすと、畑でイチゴを摘んでいた人たちがゆっくり戻ってきて車を移動させ(PB12_00292)

用例(3-10)の場合では、言語主体は商店通りにいるが、その先にある「その道よりまた少し細い道」を視線で把握している。用例(3-11)では、言語主体がバスに乗っている、視線によって、前方の道について「十台ほど乗用車が停まっていた。バスは通ることができない」と判断している。2 つの用例ともに、言語主体が道の外から道の幅を客観的に捉える、主体性の低いことを示している。

(3-12)当代島～今井橋までの土手は、大人の背丈を覆い隠すほどのススキが生い茂っていた。踏み固められた獣道のような、一筋の**細い道**がススキのトンネルの中を通じていた。(PB42_00102)

(3-13)「たしかめてこよう。」　大助はつくえのまえをはなれた。ちょうどいいひまつぶしになる。家のまえのほそい坂道を大助はおりていった。おりきったところで、バス通りをわたる。**ほそい道**の両がわに田んぼがひろがっている。(LBen_00021)

用例(3-12)、(3-13)では、いずれも言語主体が対象の前におり、対象に対して「実際的把握」を行っている。用例(3-10)では、道がススキに囲まれ、一筋の細長い道のイメージが読み手に浮かびあがる。用例(3-12)(3-13)では、言語主体が自分を対象の場の外において、視線の走査で道の輪郭を把握していると考えられる。

以上、認知言語学の立場における分析から、「広い・狭い - 道」と「太い・細い - 道」の使い分けを説明することができる。「広い／狭い - 道」が用いられる用例においては、主体性が高い用例が多い。つまり、言語主体自身が自分を観察対象の場の中におり、対象を把握する。一方、「太い／細い - 道」が用いられている用例はより客体性が高いものが多い。つまり、言語主体が概念化の主体として、その対象の中に入り込むのではなく、外から客観的に捉える場合が多いと考えられる。

続いて、「橋」の用例について述べる。

(3-14)ある人が、広い川にかけられた長くて**狭い橋**を息子とふたりで渡っていました。息子がおびえながら言いました。「お父さん、怖いよう。ほら、下に水が流れているのが見えるでしょう！」(PB11_00044)

(3-15)摩堀の近くに、名を忘れて残念ですが一つもっとも**狭い橋**があります。人力車一台ようやくにして通り得るという
(www.aozora.gr.jp/cards/000259/files/3552_8139.html)

(3-16)80 年前に建設された萬代橋ですが、片側 2 車線＋両端に歩道のある**広い橋**です。
(japankankou.jp/niigata/025-265-8000.html)

「橋」は、人や車が通行するためのものなので、通行するための平面的な部分に注目する。用例(3-14)は小説の文章で、「概念的把握」である。言語主体はある人と息子が「長くて狭い橋」を渡る場面について描写している。言語主体が観察対象に関わった形で主体的解釈をしている。

用例(3-15)(3-16)も「概念的把握」である。用例(3-15)では、橋の幅は「人力車一台ようやくにして通り得る」と説明して「狭い橋」という印象を読み手に伝えている。用例(3-16)では、車線も歩道も人が活動するため人為的に決められた活動範囲である。人、あるいは人が車に乗って橋を通行する時、注目するのはその部分の面積及び上方の空間である。

(3-17)昨日予め描いたとおり運河沿いを走り、丈夫な橋は避け、危なっかしい**細い橋**のたもとで振り返ると、予測より遅いが、四人が一列になって追いすがって来るのが視野に入った。(LBq9_00260)

(3-18)Car Tube「超危険な**細い橋**を渡る車の車載カメラ映像！」の自動車動画。細くて不安定な 木造橋を渡る車の車載カメラ映像です。
(car-tube.from.tv/VTR000423.html)

(3-19)ゲームボーイアドバンス SP のエメラルド、ルビーで、白くて**細い橋**がありますが、渡ることができません。どうやったらいいのですか。教えて下さい。

(oshiete.goo.ne.jp/qa/1655376.html)

用例(3-17)では、「昨日予め描いたとおり」という表現から、言語主体が移動しながら頭の中で過去に描いた内容を再現していることが分かる。橋の形に対して客観的観察を行うことができると考えられる。用例(3-18)のは、車載カメラの映像について、橋が「細い」「不安定」「危険」なものであると述べている。用例(3-19)はゲーム機で橋の映像を見るており、画面を通して橋の全体像を捉えている。この場合、言語主体が対象の場の外にいて、客体的解釈を行っている。

続いて、地図では「道」と似たよう形で表示される「川」について述べる。

(3-20)天之冬衣達はあちこちと巡り、敵の追撃に堪えながら、舟橋を用いなければならないような**広い川**のある所を進んで、退位して移り往く国を探し求めたのです。(LBg2_00023)

(3-21)鬼平犯科帳の「流星」にて、川越の船頭友五郎さんが、川舟で盗品を運ぶ場面など記されています。現在も本当に川舟が通るほどの**狭い川**ですが、両岸は桜堤となっていて、川越市街の北側沿いを、ぐるりと川越城址近くから田谷堰付近まで花盛り。(OY01_04008)

川にボートを浮かべたり川で泳いだりする場合は、岸から岸までの見通しがきくとは限らず、客観的に全体を把握することができないこともある。用例(3-20)(3-21)はともに概念的把握の例であり、「川」について、用例(3-20)では舟橋を使わなければならないほどの幅、用例(3-21)では川舟が通るほどの広さについて述べている。

(3-22)ある人が、**広い川**にかけられた長くて狭い橋を息子とふたりで渡っていました。息子がおびえながら言いました。「お父さん、怖いよう。ほら、下に水が流れているのが見えるでしょう！」(PB11_00044)

(3-23)それらの建物の間に、河に捧げるゲーンダーの花を売る花屋が並んでいた。　それを通りぬけた時、河は忽然と姿を現わした。午後の陽を反射させ、**広い河**はゆるやかな曲線を描き、流れている。水面は灰色に濁り、水量は豊かで河床は見えない。(OB4X_00007)

(3-24)見るからになよやかな感じの町で、男の人が「…つかわさいや」と言ってもここでなら何もおかしくはない。この**幅の広い川**には秋から冬にかけ、濃い霧が立つ。(PB39_00555)

用例(3-22)の「広い川」では、注目しているのは川の両岸の間の距離である。「長くて狭い橋」の「長い」との対比からそれが分かる。

用例(3-23)(3-24)では、言語主体が「川」の場の外に立って、「川」を観察している。用例(3-23)は、言語主体が「河」の場の外に立ち、視線の走査によって川の輪郭を把握している。「ゆるやかな曲線を描き、流れている」という表現から流れる河の水と河の輪郭の両方に注目していることが分かる。(3-24)では、「幅の広い川」で、言語主体が「幅」に焦点を当てている。「広い - 道・橋」の用例では主体的な解釈がされているのと異なり、「広い川」(「幅の広い川」)の場合は川の場の外に立って客体的な解釈を行っていることが分かる。

続いて、「太い／細い - 川」について述べる。

(3-25)湖は長方形で、長さに較べて幅がひどく狭く、両端はすぐには見渡せないため、**細い川**のようにも見えました。わたしたちは何も見えない湖面を見渡しました。(PB39_00100)

(3-26)牧場の中には、天山の雪解け水が何本もの**細い川**となって斜面を流れている。その川沿いの石の間にハラゴントンの可憐な姿を見つけた。黄色いつりがね草のような草花だ。(OB2X_00210)

(3-27)この**太い川**は白くなっている部分が２か所ありますが、その部分には普通の人でも渡れるように橋がついているのでしょうか？(図 3-3-2)

(detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1333579433)

図 3-3-2

用例(3-25)は湖について述べており、その湖の形を「細い川」に喩えている。湖の長さより幅が非常に狭いことを「実際的把握」によって捉えている。用例(3-26)では、遠いところから牧場を眺めることによって、斜面を背景として何本もの川の全体像を捉えている。

「太い川」の用例は少ないが、Yahoo!からの用例(3-27)のように、「地図」の川について、太い／細い - 川」を使用することは可能である。これは「太い･細い - 線」という言い方と同様である。

また、以上の 3 つの用例においては、言語主体が自身とは無関係に外側から対象を把握していると考えられる。つまり、主体性の度合の低いことを示している。

ここで以上の分析を表 3-3-2 にまとめる。本節では「主体性の度合」を加えた 4 つの要素で説明する。

表 3-3-2「道」「橋」「川」における「広い・狭い」「太い・細い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲(「場」)	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	④主体性の度合	「視点」の要素①②③④の違いによる次元形容詞の使用
道	道､および道の形を作る周囲のもの	対象の「場」の中	幅とその上の空間；動作を行う所	主体性の度合が高い	広い・狭い - 道
		対象の「場」の外	輪郭;1 つのまとまったもの	主体性の度合が低い	太い・細い - 道
橋	橋の路面の部分	対象の「場」の中	幅とその上の空間;動作を行う所	主体性の度合が高い	広い・狭い - 橋
		対象の「場」の外	輪郭;1 つのまとまったもの	主体性の度合が低い	太い・細い - 橋
川	川の水面の部分	対象の「場」の外	幅;1 つのまとまったもの	主体性の度合が低い	広い・狭い - 川
		対象の「場」の外	輪郭;1 つのまとまったもの	主体性の度合が低い	太い・細い - 川

3.3.4.2.2　「谷」における「広い・狭い」「太い・細い」の使い分け

「谷」の意味記述を見ると、『日本国語大辞典[33]』では「地表に見られる細長いくぼ地。」、『日本大百科全書[34]』では「山と山との間の窪地(くぼち)。小さいものは渓(けい)という。」、『明鏡国語辞典』では「山と山の間にはさまれた、細長くくぼんでいる所」としている。

「谷」は一般的に細長い形をしており、谷と谷でない所は境界線がないため輪郭は明確ではない。なお、地図上では「川」を図 3-3-3(1条河川[35])のように「線」という形で示すのに対して、「谷」は図 3-3-4 のように等高線で表示されるのが一般的である[36]。

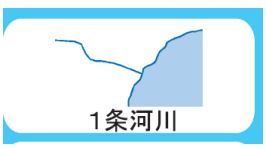


図 3-3-3

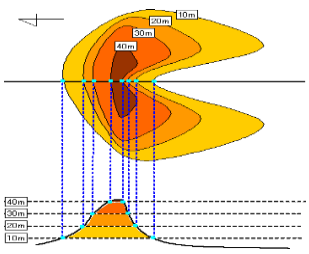


図 3-3-4

このような特徴から、用例を分析する際、「道」「橋」「川」では面的広がりに注目するのに対し、「谷」の場合は立体的な形も考慮する必要がある。

まず、「谷」の中から観察する場合について見ていく。

(3-28) ウバーレがさらに大きくなり，凹地の底が，地下水面のちかくまでさがると，「ポリエ」とよばれる，ひろい谷になる。ポリエの底はひらけた平地となり，川も流れ，むかしから，人びとに耕地として利用されている。(LBc4_00016)

(3-29) 出合から地獄谷へ一歩踏み込むと両岸が数十メートルの高さは有る絶壁が迫っている。幅は狭い場所で 5 メートルほど狭い谷の両側にはブナなどの木谷を隠すように繁る。

[33] 日本国語大辞典（オンラインデータベース),＜http://www.jkn21.com＞
[34] 日本大百科全書（オンラインデータベース),＜http://www.jkn21.com＞
[35] 地図記号一覧：国土地理院
[36] 図 3-3-4 における、等高線が内側に食い込んでいるように見える部分が谷である。

(arasimadake.plala.jp/arasimadake/tani_canyon/arasimatani.htm)

(3-30)あんなに**せまい谷**を、両岸からかぶさるような崖のあいだを潜りぬけるようにして川上へ来ると、またこんな谷がひらけるのだから全く呆れるよりほかはない。(LBj9_00024)

「谷」は地形上の成因によって、さまざまな形をしている。たとえば用例(3-28)のような谷底は広い平地となり、人に生活の場所を提供している。また、用例(3-29)(3-30)のように谷の軸方向に沿って進むとき、谷の両側の斜面が急傾斜なものとなり、人に圧迫感を与えることもある。観察する際、前者(用例(3-28))が谷底の面積に注目しているのに対して、後者(用例(3-29)(3-30))は囲まれている感覚が強く、谷の斜面と斜面の間の隔たりに注目していると考えられる。

以上の3つの用例のうち、(3-28)は「概念的把握」であり、(3-29)(3-30)は「実際的把握」である。いずれの用例も「主体性の度合が高い」と見られる。

(3-31)支流の谷は、その入り口で根尾川の本流の谷かと見間違うほどに大きな広い谷ですが、入るとすぐに正面に山が立ちはだかって、行き止まりのような景色になります。このような**広い谷**が、急に終わるのは不自然です。(LBg4_00031)

用例(3-31)では、幅が急に変わる地形に沿って移動することによって、入り口付近の地形と目の前の地形と比較し、心象が変化することを表している。「入るとすぐ」は言語主体の心理認識の変化の〈点〉と考えられる。この〈点〉によって、言語主体は「谷に入る」前の頭の中での想像と「入ってすぐ」の山が立ちはだかる谷の状態を比較することが可能となる。

Yahoo!では、「太い谷」の用例はわずかしか見られなかった。用例(3-32)(3-33)は、天文愛好者が撮った月の写真の説明文である。遠方から月の全体像を観察する場合、月面の谷は線状に伸びている図形のようであり、そのため「細い」が使用されやすいと考えられる。

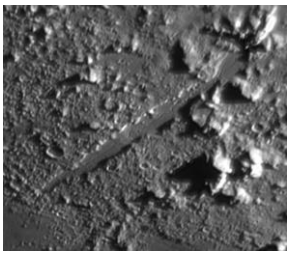


図 3-3-5[37]

(3-32)アルプス谷の内部は平坦ですが、谷の底面にはもう一本非常に**細い谷**が走っています。この**細い谷**は場所によって蛇行したり、小さなクレーターが連なっているようにも見えます。(http://mo.atz.jp/meisyo/alpus/index.htm)

(3-33)ここに掲載しているアルプス谷の拡大画像はいずれも 20cm 反射と Web カメラで撮影したものです。Web カメラと画像処理のおかげで何とか**細い谷**が確認できますが、眼視や撮影時のパソコンのモニタでは、これほど明瞭に確認できるものではありません。(http://mo.atz.jp/meisyo/alpus/index.htm)

「太い谷」の用例はわずかしかない。「太い谷」が不自然な理由の 1 つとして、日本人は U 字谷より V 字谷のほうが典型的な形として思い浮かべやすいことが考えられる。日本語では「山折り」、「谷折り」という語があり、ともに「山」「谷」の鋭角的な性質を利用した言い方である。「太い・細い」は「棒状や線状」のものを言及対象とするのが基本的であり、V 字谷の底の部分の面と共起しにくいと考えられる。ただし、用例(3-32)(3-33)からも分かるように、遠方から月を観察した場合には、谷の全体的な形が写真の中にきれい納まっており、「細い谷」が使われやすいと考えられる。

最後に、以上の「谷」における分析を次のようにまとめる。

[37] 例文(3-32)(3-33)は図 3-3-5 の説明文である。

表3-3-3　「谷」における「広い・狭い」「太い・細い」の使い分け

対象	②言語主体から見える対象の範囲（「場」）	①言語主体の立脚点	③言語主体が注目する対象の部分と特性	④主体性の度合	「視点」の要素①②③④の違いによる次元形容詞の使用
谷	谷及び谷の形を作る周囲の地形	対象の「場」の中	立体的な広がり、幅；動作を行う所	主体性の度合が高い	広い・狭い - 谷
		対象の「場」の外	輪郭；1 つのまとまったもの	主体性の度合が低い	太い・細い - 谷

3.3.5　「太い～」と「細い～」の使用における非対称性

3.3.4.1 で触れたように、量的に大きい方(太い)と量的に小さい方(細い)の使用は、とりわけ「道」において不均衡である。この、「太い」と「細い」の使用の非対称性を見るため、「広い・狭い」と合せて BCCWJ での用例数を再掲する。

表 3-3-4　「太い」と「細い」の非対称性

	太い		細い		広い		狭い	
道	太い道	1	細い道	123	広い道	50	狭い道	98
川	太い川	0	細い川	4	広い川	9	狭い川	3
橋	太い橋	0	細い橋	4	広い橋	0	狭い橋	1

集計結果では、「広い～」と「狭い～」の用例数には極端な差がないのに対し、「太い～」と「細い～」の数は明らかに非対称であることが分かる。特に、「道」においては、「広い道」50、「狭い道」98、「細い道」123 件といずれも多く見られたのに対し、「太い道」は 1 件しかなかった。

村木(2002) は、二項対立と対義語についてまとめた論考の中で、実際の言語活動にお

ける基本的な形容詞の語彙調査の結果を取り上げ、「大きい、長い、深い、多い」の対では「次元や数量などの程度の大なることを示す単語の方がその対立項より多く使われている」(2002：72) と指摘している。また、「太い」と「細い」の対立関係において、「太い」の方が「程度の点で積極面をもっている」にもかかわらず「細い」の使用がまさっているのは、「われわれが「細い」ことに「太い」ことよりも、＜中略＞ 価値を認めたり、注意をそそいだりしていることが多い結果であるといえよう」(p.73) と述べている。

村木の説は、形容詞の多義性や修飾対象を考慮しないものであり、全般的な傾向を述べたものと考えられる。本研究における用例を見た限りでは、「太い道」より「細い道」に「価値を認めたり、注意をそそいだり」した結果とは考えにくい。むしろ、「狭い」はマイナス的なイメージが強くて、「狭い道」は価値が認めにくい。婉曲用法で「細い道」という中立的な表現を選んだ可能性が考えられる。一方、「広い」と「太い」はこのような関係が見られない。2 組の形容詞を分析対象として初めて非対称を説明することができる例であろう。

3.3.6　考察

「道」「橋」「川」「谷」の 4 つの語の用例を 3.3.4.2 で分析した。そして、①言語主体の立脚点、②言語主体から見える対象の範囲(「場」)、③言語主体が注目する対象の部分と特性、④言語主体が対象をどの程度主体的/客体的に解釈するか、およびこの 4 点の違いによる対象の全体的な捉え方を表 3-3-2、3-3-3、にまとめた。ここでは、視点の違いによる「広い・狭い」「太い・細い」の使い分けを表 3-3-5 でまとめる。

表の中で、①言語主体の立脚点は「『場』の外から／『場』の中から」に当たる。「場」は②の言語主体から見える対象の範囲を示す。「幅」「動作を行う所」などは、③の言語主体が注目する対象の部分と特性を表す。「主体性の度合」が④言語主体が対象をどの程度主体的/客体的に解釈するかを示す。

表3-3-5　視点による「広い・狭い」「太い・細い」の使い分け

	広い・狭い	太い・細い
道	「場」の中から、「道」の幅とその上の空間に注目し、動作を行う所として把握する；主体性の度合が高い	「場」の外から、「道」の輪郭に注目し、1つのまとまったものとして把握する；主体性の度合が低い
橋	「場」の中から、「橋」の幅とその上の空間に注目し、動作を行う所として把握する；主体性の度合が高い	「場」の外から、「橋」の輪郭に注目し、1つのまとまったものとして把握する；主体性の度合が低い
川	「場」の外から、「川」の幅に注目し、1つのまとまったものとして把握する；主体性の度合が低い	「場」の外から、「川」の輪郭に注目し、1つのまとまったものとして把握する；主体性の度合が低い
谷	「場」の中から、「谷」の3次元的広がりに注目し、動作を行う所として把握する；主体性の度合が高い	「場」の外から、「谷」の輪郭に注目し、1つのまとまったものとして把握する；主体性の度合が低い

続いて、「視点」による分析内容に基づき、言語主体と対象との関係を、図で示す。

それぞれの図における記号とイラストの意味は次のとおりである。

大きい長方形の「S」は言語主体から見える対象の範囲(「場」)、小さい長方形の「0」は対象物、「目」のイラストは言語主体の立脚点を表す。点線の矢印は心理的視線、実線の矢印は実際の視線を表している。場合によって、対象物をトラジェクター「T」とランドマーク「L」に分かれて示す。

「概念的把握」においては、4つの語例「道、橋、川、谷」を1つ(図3-3-6)で示す。

「実際的把握」においては、4つの語例「道、橋、川、谷」を5つの図(図3-3-7、8、9、10、11)で示す。

A.　概念的把握

「概念的把握」における、「広い・狭い」「太い・細い」を1つの図で示す。

言語主体が対象の場の外にいて、心理的視線によって対象を1つのまとまったものと

して把握する。(図 3-3-6)

用例：(3-2)(3-15)など

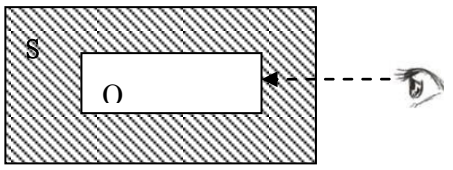


図 3-3-6

B.　実際的把握

B.-1　「広い／狭い」について、4つの図で示す。

B.-1-1　言語主体が場 の中のプロファイルされた対象の中に入り、物理的移動をしながら実際の視線の走査によって対象の幅と面積を把握する。(図 3-3-7)

用例：(3-1)

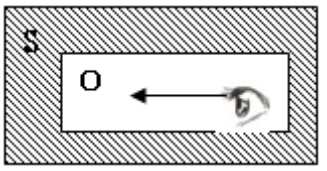


図 3-3-7

B.-1-2　言語主体がプロファイルされた対象のトラジェクターの中に入って、実際の視線の走査によってトラジェクターの幅とその上の空間を把握する。(図3-3-8)
プロファイルされた対象はトラジェクター(T)とランドマーク(L)に分かれる。T はＬに囲まれているか、あるいはＴはＬの中を通り抜けるということを示している。つまり、Ｌの背景の役割に対し、Ｔが前景になる。さらに、Ｌの背景の役割によって、Ｔはより目立ちうる。

用例：(3-3)(3-4)(3-29)(3-30)など

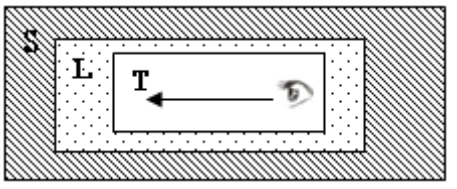


図 3-3-8

B.-1-3　言語主体がプロファイルされた対象のランドマークの部分の中に入り、物理的移動をしながら、スキャニングによってその前方のトラジェクターの部分の形状の変化様相　(L を比較基準として)を把握する。(図 3-3-9)

用例：(3-5)(3-6)(3-31)

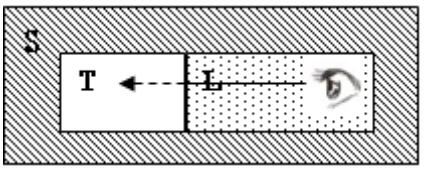


図 3-3-9

B.-1-4　言語主体は場の外から実際の視線の走査によって、自らが参与者となっていないプロファイルされた対象の輪郭を把握する。(図 3-3-10)

用例：(3-23)

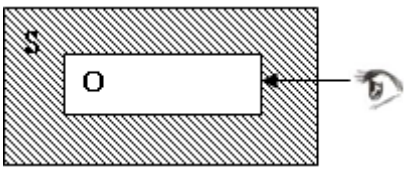


図 3-1-10

B.-2　「太い／細い」を 1 つの図で示す。

言語主体は場の外から実際の視線の走査によって、自らが参与者となっていないプロファイルされた対象の輪郭を把握する。（図 3-3-11）

用例：(3-7)(3-10)(3-12)(3-19)(3-27)(3-33)など

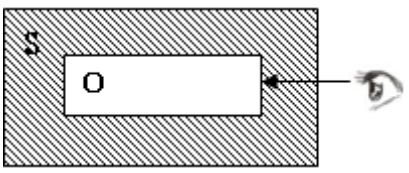


図 3-3-11(=図 3-3-10)

以上、本節では「広い・狭い」と「太い・細い」が同じ対象を修飾する場合について、「道」「橋」「川」「谷」の 4 つの語を通して、「視点」「主体性」等との関連性を検証した。3.3 の小節では次のような結論が得られた。

1) 言語主体が「視点」によって、観察対象を「動作を行う所」として把握する場合は、「広い・狭い」の方を使用する傾向が見られる。一方、言語主体が「視点」によって、観察対象を「１つのまとまったもの」として把握する場合は、「太い･細い」の方を使用する傾向が見られる。

2) 「広い・狭い」の用例においては、言語主体の対象に対する解釈は主体性の度合が高く、「太い・細い」の用例においては、言語主体の対象に対する解釈は客体性の度合が高い。

3) 「広い・狭い - 道」「広い・狭い - 谷」においては、言語主体が「道」／谷」の軸に沿って移動しながら、スキャニングによって、プロファイルされた対象をランドマークとトラジェクターに分けて把握する場合がある。

第四章　結論

現代日本語書き言葉均衡コーパスと「Yahoo!　Japan」で収集した用例の分析から、対象の把握の仕方は、「概念的把握」と「実際的把握」の 2 つに分けられることが分かった。「概念的把握」とは言語主体が対象の前にいるかどうかに関わらず、持っている知識や経験などで対象の空間的な量について把握する場合、「実際的把握」とは言語主体が対象の前にいて、視覚によって対象を把握する場合を指す。「概念的把握」の用例は知識・経験に基づくため、心理的な視点によって対象に対して客観的把握を行うことが多いと考えられる。一方、「実際的把握」の用例では、捉え方が「概念的把握」より複雑である。これには、言語主体の立脚点と対象の場との位置関係、主体性の度合いなどが関わっていると考えられる。

用例は「概念的把握」と「実際的把握」に分けた上で、対象とする名詞のグループごとに、「①言語主体の立脚点」、「②言語主体から見える対象の範囲(「場」)」、「③言語主体が注目する対象の部分と特性」、「④言語主体が対象をどの程度主体的／客体的に解釈するか」に注目して、次元形容詞の使い分けを論述した。図式を利用して、「視点」の中の言語主体と対象との関係を示した。対象とする名詞のグループごとの特徴は「③言語主体が注目する対象の部分と特性」に反映する。さらに、「広い・狭い」「太い・細い」の使い分けにおいては、主体性の度合の高さ、トラジェクターとランドマークの関係で説明できることを示した。

以下に、まず、3 つの小節の結論を整理して述べ、次に図式をまとめ、最後に要点をまとめる。

3.1、3.2、3.3 の小節の結論は次の通りである。

3.1 では、「大きい・小さい」「広い・狭い」と「湖」「建物」「部屋」「窓」「皿」「紙」「解答欄」の 7 つの語のそれぞれの組み合わせ(例えば、「大きい湖」と「広い湖」)を含む文の使用状況を集計し、「視点」から分析した結果、次の 3 点が明らかになった。

1)言語主体が「視点」によって、観察対象を「１つのまとまったもの」として把握する

場合は、「大きい・小さい」の方を使用する傾向が見られる。一方、言語主体が、「視点」によって、観察対象を「動作を行う所／関わる動作の結果の存在する所」として把握する場合は、「広い・狭い」の方を使用する傾向が見られる。

2)言語主体が「視点」によって、「窓」を「向こう側を見るために必要とされる所」として把握する場合は、「広い・狭い」を使用する傾向が見られる。

3)「広い・狭い」における用例のうち、たとえば「広い湖」のように、言語主体が対象を「動作を行う所」として把握する際、対象に対して主体的な解釈を行う場合がある。

3.2 では、「大きい・小さい」「高い・低い」と「山」「木」「建物」「車」「人」「テーブル」「窓」の 7 つの語のそれぞれの組み合わせ(例えば、「大きい山」と「高い山」)を含む文の使用状況を集計し、「視点」から分析した結果、次の 3 点が明らかになった。

1)言語主体が「視点」によって、観察対象を「１つのまとまったもの」として把握する場合は、「大きい・小さい」を使用する傾向が見られる。一方、言語主体が「視点」によって、観察対象を「１つのまとまったもの」として把握し、かつ「対象の下端から上端までの距離」／「上下の観点から見た対象の位置」に注目する場合は「高い・低い」を使用する傾向が見られる。

2)言語主体が「視点」によって、「窓」を「向こう側(の上方)を見るために必要とされる所」として把握する場合は、「高い」を使用する傾向が見られる。

3)「固定している」「基準点がある」の 2 点が揃わないことで「高い・低い」と言いくい場合は、焦点を当てる部分の語を「ガ/ノ」の前において「名詞 - ガ／ノ - 高い/低い - 名詞」という形を使用する傾向が見られる。

3.3 では、「広い・狭い」「太い・細い」と「道」「橋」「川」「谷」の 4 つの語のそれぞれの組み合わせ(例えば、「狭い道」と「細い道」)を含む文の使用状況を集計し、「視点」から分析した結果、次の 3 点が明らかになった。

1)言語主体が「視点」によって、観察対象を「動作を行う所」として把握する場合は「広い・狭い」の方を使用する傾向が見られる。一方、言語主体が「視点」によって、

観察対象を「１つのまとまったもの」として把握する場合は、「太い･細い」の方を使用する傾向が見られる。

2)「広い・狭い」の用例においては、言語主体の対象に対する解釈は主体性の度合が高く、「太い・細い」の用例においては、言語主体の対象に対する解釈は客体性の度合が高い。

3)「広い・狭い - 道」「広い・狭い - 谷」においては、言語主体が「道」／「谷」の軸沿って移動しながら、プロファイルされた対象をランドマークとトラジェクターに分けて、スキャニングによって観察が行われる場合がある。

次に、3.1、3.2、3.3 で使用した図式について、その基本型をまとめる。

それぞれの図において、大きい長方形の「S(scope)」は「場」を表し、小さい長方形の「O(object)」は対象物、「目」のイラストは言語主体、実線の矢印は視線、点線の矢印は心理的視線を表す。

一、「概念的把握」の場合

言語主体が対象の前にいるかどうかにかかわらず、心理的視線によって持っている知識・経験などで対象の次元的な量について把握する。図 4-1 は「概念的把握」のすべての用例に適用することができると考えられる。

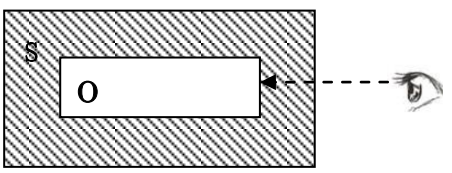


図 4-1

二、「実際的把握」の場合

図 4-2 は、言語主体が対象の場の外から、実際の視線によって対象の「全体的な形」/「輪郭」/「下端から上端までの距離(高さ)」/「体積」/「面積」を把握する場合を示している。

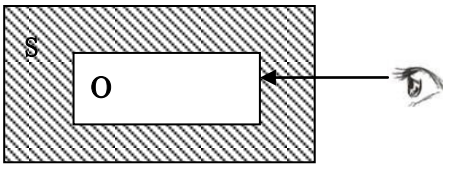


図 4-2

図 4-3 は、言語主体が何らかの動作によって対象の場の中に入り、実際の視線によって対象の「体積」/「容積」/「面積」/「幅とその上の上の空間」を動作を行う所として把握する場合を示している。

なお、3.3 で見られたプロファイルされた対象がトラジェクター(T)とランドマーク(L)に分かれる 2 つの場合(図 3-3-7、3-3-8)は、この図をさらに詳細に表したものであり、図 4-3 にまとめることができる。

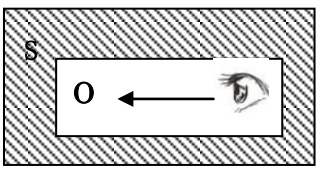


図 4-3

図 4-4 は、言語主体が場の中に入り、対象の「容積」/「面積」に注目して、何らかの動作をし、その場を関わる動作の結果の存在する所として把握する場合を示している。

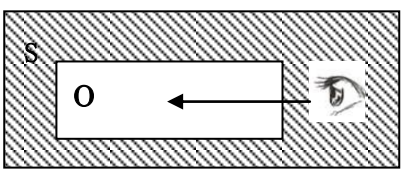


図 4-4

図 4-5 は「窓」の特有の場合であり、「心理的視線」を示す図である。言語主体が対象の場の外にいて、心理的視線によって場の中に入り、心理的視線と実際の視線を伸ばして対象の向こう側を目に入れながら、対象を把握する。これは「窓」について見られる場合である。

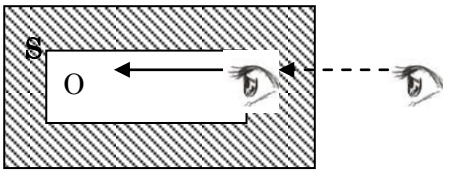


図 4-5

最後に、3.1、3.2、3.3 の小節の結論及び言語主体と対象との関係を示す図から、「大きい・小さい」と「広い・狭い」、「大きい・小さい」と「高い・低い」、「広い・狭い」と「太い・細い」の 3 組 4 対の次元形容詞の使い分けについて、次のようにまとめられる。

①言語主体が「視点」によって、観察対象をどのように(「１つのまとまったもの」/「作を行う所」/「関わる動作の結果の存在する所」/「向こう側を見るために必要とれる所」)把握するかが、次元形容詞の使用傾向に影響を与える。対象名詞の特徴は「言語主体が注目する対象の部分と特性」に反映する。

②3.1「広い・狭い」と「大きい・小さい」の一部の用例、3.3「広い・狭い」と「太い・細い」の組では、さらに、主体性の度合から見た言語主体の視点が、観察対象の把握の仕方において重要な役割を果たす。

③「広い・狭い - 道」「広い・狭い - 谷」においては、言語主体が「道」「谷」の軸に沿って移動しながら、プロファイルされた対象をランドマークとトラジェクターに分けて、スキャニングによって観察が行われる場合が見られる。

第五章　おわりに

5.1　まとめ

本論文では、「視点」による次元形容詞「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」の使い分けについて考察した。論文の各章の概略は、以下の通りである。

第一章では、空間的な量を表す形容詞に関する先行研究、及び視点に関わる認知言語学的アプローチについて述べた。

まず、『分類語彙表』(1964,2004)における空間的な量を表す形容詞のカテゴリーと扱いについてまとめた。次に、国広と久島の空間的な量に関する研究について述べた。国広(1968, 1982) は 8 対の次元形容詞の意義素を分析し体系化を試み、久島(1993,2001)は形容詞が修飾する対象を分析して、《物》、《場所》、及び《準場所》、《地点》という新たな概念を定義・提案した。このほか、英語との対照研究をおこなった服部(1968)、用例に基づく形容詞の意味記述をおこなった西尾(1972)について解説した。

次に、「視点」を中心に、認知言語学の理論的概念をまとめた。本多(2005)は、「視点現象」という概念を提案し 5 つの要素を設定したことを述べた。また、パースペクティヴと主体の役割についてラネカーの説を紹介し、山梨(2000)によるスキャニングと視線の移動、ラネカーのスキャニングについて述べた。

第二章では、用例の収集及び分析方法について述べた。

まず、4 対 3 組の次元形容詞と 16 の名詞が研究対象として妥当であることを、先行研究に基づいて説明した。次に、分析のための用例として使用した、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の特徴などを解説し、用例の補足資料として検索サイト Yahoo! Japan を使用したことを述べた。最後に、BCCWJ の用例におけるデータの処理と第三章で使用数を集計する際の基準と関連事項について具体的に説明した。

第三章では、「大きい・小さい」と「広い・狭い」、「大きい・小さい」と「高い・低い」、「広い・狭い」と「太い・細い」の 3 組について、「①言語主体の立脚点、②言語主体か

ら見える対象の範囲(「場」)、③言語主体が注目する対象の部分と特性、④言語主体が対象をどの程度主体的／客体的に解釈するか」の 4 点を「視点」の要素として抽出し、コーパスなどにおける実際の使用例を分析した。

各節において、主に「『視点』の要素」「BCCWJ のデータ収集結果」「名詞群の特徴の異同」「用例の詳細な分析」「考察」の 5 点を提示した。

3.1 では、「大きい・小さい」「広い・狭い」と「湖」「建物」「部屋」「窓」「皿」「紙」「解答欄」の 7 つの語のそれぞれの組み合わせ(例えば、「大きい湖」と「広い湖」)を含む文の使用状況を集計し、「視点」から把握の仕方を分析した。そして、「大きい・小さい」「広い・狭い」のそれぞれの使用傾向を明らかにし、図式とあわせて示した。また、「窓」に関しては、その特性上他の語と異なり、言語主体が心理的視線によって場の中に入り、窓の向こう側を目に入れながら窓を把握するという他の対象物と異なる用法が見られることを述べた。

3.2 では、「大きい・小さい」「高い・低い」と「山」「木」「建物」「車」「人」「テーブル」「窓」の 7 つの語のそれぞれの組み合わせ(例えば、「大きい山」と「高い山」)を含む文の使用状況を集計し、「視点」から把握の仕方を分析した。そして、「大きい・小さい」「高い・低い」のそれぞれの使用傾向を明らかにし、図式とあわせて示した。また、対象名詞のうち、固定性と基準点(基準面)の存在という条件を満たさない「人、車」について、基本的には「名詞－ガ／ノ－高い／低い－名詞」の形で使用されるが、実際の用例では文脈の支えがあると「名詞－ガ／ノ」が省略される場合が見られることを指摘した。

3.3 では、「広い・狭い」「太い・細い」と「道」「橋」「川」「谷」の 4 つの語のそれぞれの組み合わせ(例えば、「狭い道」と「細い道」)を含む文の使用状況を集計し、「視点」から把握の仕方を分析した。そして、「広い・狭い」「太い・細い」のそれぞれの使用傾向を明らかにし、図式をあわせて示した。また、「広い・狭い」の用例においては、対象に対する言語主体の解釈の主体性の度合いが高く、対象の場の中にいて、その軸にそって移動しながら対象を把握する場合があることを述べた。さらに運用上の特徴として、「道」に関しては「細い、狭い、広い」の用例は多く見られるのに対し「太い」は非常に少なく、「太い」と「細い」の使用が非対称であることを指摘した。

第四章では、第三章の 3.1、3.2、3.3 で論じた内容に基づいて考察し、結論をまとめた。

「大きい･小さい」「広い･狭い」「高い･低い」「太い･細い」4 対による 3 組の形容詞が計 16 の名詞を修飾する場合について、「視点」①②③④との関連から使い分けの様相をまとめ、「実際的把握」と「概念的把握」に分けて、言語主体と対象物との関係を図式で表した。この中で、各節における「窓」「道」などの対象は、その特性上他の語と異なる捉え方があることを示した。また、一対の形容詞の「量的に大きい」方と「量的に小さい」方の使用上の非対称等、運用面における特徴についても指摘した。

最後に、3.1、3.2、3.3 の節の結論及び言語主体と対象との関係を示す図から考察をまとめた。

以上、本論文では、4 対 3 組の次元形容詞「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」が「湖、建物、部屋、窓、皿、紙、解答欄、山、木、車、人、テーブル、道、橋、川、谷」の計 16 の名詞を修飾する用法を、なぜ同じ対象に対して次元形容詞の使い分けがあるのか､どのような基準によって使い分けが行われているのかを｢視点」の概念を中心に認知言語学的知見も活かして述べた。

分析方法として、収集した用例を「概念的把握」と「実際的把握」に分けた上で、対象とする名詞のグループごとに､「視点」の「①言語主体の立脚点｣､「②言語主体から見える対象の範囲(「場」)｣､「③言語主体が注目する対象の部分と特性｣､「④言語主体が対象をどの程度主体的／客体的に解釈するか」に注目して、次元形容詞の「大きい・小さい」と「広い・狭い」､「大きい・小さい」と「高い・低い」､「広い・狭い」と「太い・細い」の 3 組の次元形容詞の使い分けを論述した。さらに、図式を利用して､「視点」の中の言語主体と対象との関係を示した。

用例データに関しては、文脈重視の立場から前後関係を長く読めるように整形して利用した。また集計、分析に当たっては、意味や文法性についても考慮した｡「視点」の観点から用例を分析し結論を得た。結果として共起名詞や全体の文脈と次元形容詞の間には相関があることを現代日本語書き言葉コーパスと検索サイト「Yahoo! Japan」で収集した用例の分析から示した。

5.2　今後の課題

以上、本研究では、3 組の次元形容詞「大きい・小さい」と「広い・狭い」、「大きい・小さい」と「高い・低い」、「広い・狭い」と「太い・細い」が 16 個の名詞を修飾する用法を、なぜ同じ対象に対して次元形容詞の使い分けがあるのか、どのような基準によって使い分けが行われているのかを、「視点」の概念を中心に認知言語学的知見も活かして検討した。

今後の課題としては、以下の事がらが挙げられる。

本研究では、分析対象として「大きい窓」のような連体修飾の形、つまり装定用法を取り上げたが、いずれの形容詞も「窓が大きい」などの述定用法でも使用される。これらの形式も分析対象に含めることで、よりまとまった研究にできるのではないかと考える。

量的に大きい方と量的に小さい方の次元形容詞の使用に関して、「道」において際立った違いがあることを指摘したのは用例調査の成果ではあるが、本研究では十分にその理由を追究することはできなかった。これは発展的課題としたい。

本論 3.2.4 の「高い・低い」では、「形容詞 - 名詞」と「名詞-ガ・ノ-形容詞 - 名詞」の使い分けについて取り上げた。これ以外に、「広い・狭い」も「幅の - 広い／狭い」のような使い方が見られる。この「形容詞 - 名詞」と「名詞-ガ・ノ-形容詞 - 名詞」使い分けは、日本語教育上の留意点として今後の研究課題になりうると考える。

文献目録

大里泰弘　(1990).「日本語次元形容詞に関する報告」『長崎ウエスレヤン短期大学紀要(13)』28-39　長崎ウエスレヤン大学

荻野網男　(2008).「www をコーパスとして利用する研究　―文系と理系の観点から―」『日本語学(27-2)』4-9　明治書院

河上誓作編著　(1996).『認知言語学の基礎』　研究社出版

久島茂　(1993).「日本語の量を表す形容詞の意味体系と量のカテゴリーの普遍性」『言語研究(104)』49-91　日本言語学会

久島茂　(1994).「形を表す形容詞の意味体系」『国語国文 63(4)』17-38　星野書店

久島茂　(1995).「＜物＞と＜場所＞の量の捉え方の統一的理解　―＜形態＞と＜方向＞の関連―」『國語學(181)』118-105　国語学会(日本語学会)

久島茂　(2001).『≪物≫と≪場所≫の対立　―知覚語彙の意味体系―』　くろしお出版

久島茂　(2007).『はかり方の日本語』　筑摩書房

国広哲弥　(1968).「日本語次元形容詞の体系」『言語の科学』2：13-26　東京言語研究所

国広哲弥　(1970).『意味の諸相』　三省堂

国広哲弥　(1982).『意味論の方法』　大修館書店

国広哲弥　(1997).『理想の国語辞典』　大修館書店

小出慶一　(2000).「次元形容詞の空間的用法と非空間的用法」『群馬県立女子大学紀要(21)』107-113　群馬県立女子大学

国立国語研究所　(1964).『分類語彙表』　秀英出版

国立国語研究所　(2004).『分類語彙表　増補改訂版』　大日本図書

崎田智子・岡本雅史　(2010).『言語運用のダイナミズム：認知語用論のアプローチ』　研究社

澤田治美　編　(2011).『ひつじ意味論講座(5)主観性と主体性』　ひつじ書房

柴田武・国広哲弥・長崎善郎・山田進　(1976).『ことばの意味：辞書に書いていないこと』　平凡社

柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進・浅野百合子　(1979).『ことばの意味 2：辞書に書いていないこと』　平凡社

柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進 ・浅野百合子　(1982).『ことばの意味 3：辞書に書いていないこと』　平凡社

鈴木孝夫　(1973).『ことばと文化』　岩波書店

鈴木春菜　(2005).「次元形容詞　―英語と日本語の“高い・低い”と“深い・浅い”に関する考察―」『北海道大学大学院文学研究科研究論集(5)』207-223　北海道大学文学研究科

篠原和子　(2007).「空間認知実験と時間メタファー」『認知言語学論考(6)』1-47　ひつじ書房

谷口一美　(2006).『学びのエクササイズ　認知言語学』　ひつじ書房

田中茂範　(1997).「空間表現の意味・機能」『空間と移動の表現』　研究社出版

田野村忠温　(2012).「BCCWJ に収められ新種の言語資料の特性について―データ重複の諸相とコーパス使用状の注意点―」『待兼山論叢(46)文化動態論篇』　大阪大学大学院文学研究科

田野村忠温　(2013／3／15 最終更新).「BCCWJ の資料的特性―コーパス理解の重要性―」朝倉書店(未刊)

辻幸夫　編　(2001).『ことばの認知科学辞典』　大修館書店

辻幸夫　編　(2002).『認知言語学キーワード事典』　研究社出版

辻幸夫　編　(2003).『認知言語学への招待』　大修館書店

マイケル・トマセロ著 ; 辻幸夫 他 訳　(2008). 『ことばをつくる : 言語習得の認知言語学的アプローチ』　慶應義塾大学出版会

中本敬子・李在鎬　編　(2011).『認知言語学研究の方法　内省・コーパス・実験』　ひつじ書房

西尾寅弥(国立国語研究所)　(1972).『形容詞の意味・用法の記述的研究』　秀英出版

服部四郎　(1968).『英語基礎語彙の研究』　三省堂

廣瀬幸生　(2000).「視点と知覚空間の相対化」『空間表現と文法』　くろしお出版

深田智　(2001).「"Subjectification"とは何か : 言語表現の意味の根源を探る」『言語科学論集(7)』61-89　京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座

深田智　(2004).「未分化な意味の分化：形容詞における主体／客体関係を中心に」『言語科学論集(10)』117-147　京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座

深田智・仲本康一郎　(2008).『概念化と意味の世界　認知意味論のアプローチ』　研究

社
本多啓　(2005).『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』　東京大学出版会
本田啓　(2013).『知覚と行為の認知言語学―「私」は自分の外にある』　開拓社
前川喜久雄　(2009).「コーパスとは何か」『国文学　解釈と鑑賞(74-1)』6-14　至文堂
松木正恵　(1992).「『見ること』と文法研究」『日本語学(11-9)』　明治書院
松本曜　編　(2003).『認知意味論』　大修館書店
町田章　(2012).「主観性と見えない参与者の可視化―客体化の認知プロセス―」『日本認知言語学会論文集　JCLA(12)』246-258　日本認知言語学会
宮崎清孝・上野直樹 (1985).『視点』　東京大学出版会
宮島達夫　(1962).「空間的な量を表す形容詞」『言語研究(41)』100-101
村木新次郎　(2002).「意味の体系」『朝倉日本語講座(4)語彙･意味』54-78　朝倉書店
籾山洋介　(2002).『認知意味論のしくみ』　研究社出版
籾山洋介・深田智　(2003).「意味の拡張」『認知意味論』73-134　大修館書店
森田良行　(1989).『基礎日本語辞典』　角川書店
森田良行　(1996).『意味分析の方法：理論と実践』　ひつじ書房
森田良行　(2008).『動詞・形容詞・副詞の事典』　東京堂出版
森山新　(2008).『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』　ひつじ書房
山梨正明　(2000).『認知言語学原理』　くろしお出版
山梨正明　(2004).『ことばの認知空間』　開拓社
吉村公宏　(2004).『はじめての認知言語学』　研究社
ロナルド・W・ラネカー　山梨正明(訳) (2011).『認知文法論序説』　研究社
李在鎬・砂川有里子・石川慎一郎　(2012).『日本語教育のためのコーパス調査入門』　くろしお出版
劉笑倩　(2011).「視点の違いによる次元形容詞の使い分け―『広い・狭い』と『大きい・小さい』―」『拓殖大学大学院言語教育研究(11)』83-98　拓殖大学言語教育研究科
劉笑倩　(2012).「視点の違いによる次元形容詞の使い分け―『広い・狭い』と『太い・細い』」『日本認知言語学会論文集(12)』324-335　日本認知言語学会
劉笑倩　(2013).「視点の違いによる次元形容詞の使い分け　―『大きい・小さい』と『高

い・低い』―」『拓殖大学大学院言語教育研究(13)』77-89　拓殖大学言語教育研究科

Langacker,Ronald.W　(1987). Theoretical prerequisites. Stanford University Press, 1987(*Foundations of Cognitive Grammar*:vol. 1)

Langacker,Ronald.W (1988). ″A View of Linguistic Semantics″. In Brygida Rudzka-Ostyn,ed.,*Topics in Cognitive Linguistics*,49-90

Langacker,Ronald.W　(2002). *Concept, Image, and Symbol : The Cognitive Basis of Grammar*.2nd ed. Berlin ; New York : Mouton de Gruyter, 315-319

参考辞典

『岩波国語辞典』第 7 版新版　(2011). 岩波書店

『学研現代新国語辞典』改訂第 5 版　(2008). 学研教育出版

『広辞苑』第六版　(2008). 岩波書店

『新明解国語辞典』第 6 版　(2005). 三省堂

『大辞泉　増補・新装版』　(1998). 小学館

『日本国語大辞典』第 2 版　(2000-2002). 小学館

『日本語大シソーラス―類語検索大辞典―』　(2003).　大修館書店

『明鏡国語辞典』第 2 版　(2010). 大修館書店

使用したコーパスと検索システム：

現代日本語書き言葉均衡コーパス　中納言　1.1.0

https://chunagon.ninjal.ac.jp/

NINJAL-LWP for BCCWJ(NLB)-国立国語研究所

http://nlb.ninjal.ac.jp/

JapanKnowledge Lib　JK ジャパンナレッジ　Lib

http://japanknowledge.com/library/

謝辞

本研究を遂行し博士論文をまとめるに当たり、指導教授である遠藤裕子教授に深く感謝しております。博士課程入学当初から 5 年という長きにわたり御指導を賜りました。研究の進め方、考え方、まとめ方など研究の基礎から懇切丁寧にご教授して頂きました。特に分析においても論文の書き方においても拙い私の論文を、何度も読んでいただき、指導していただいた遠藤先生に大変ご苦労をかけてしまいましたことにも心よりお詫びを申し上げたいです。

本研究を遂行するに当たり、博士論文中間発表と完成発表の際、貴重なご教示と多くのご助言をいただきました、石川守教授、木村政康教授、阿久津智教授、小林孝郎教授には謹んで謝意を表します。また、論文の査読をしていただいた石川教授、阿久津教授には、本論文を完成させるに当たって、大変有意義且つ的確なご意見をいただき、深く感謝しております。

日本に留学に来てから現在にわたり、多数の友人たちとの出会いに恵まれ、温かく励ましていただきました。とても全員の名前を挙げることはできませんが、皆さんに深く感謝しております。

最後に，これまで自分の思う道を進むことに対し、温かく見守りそして辛抱強く支援してくださった両親に対しては深い感謝の意も表して謝辞といたします。